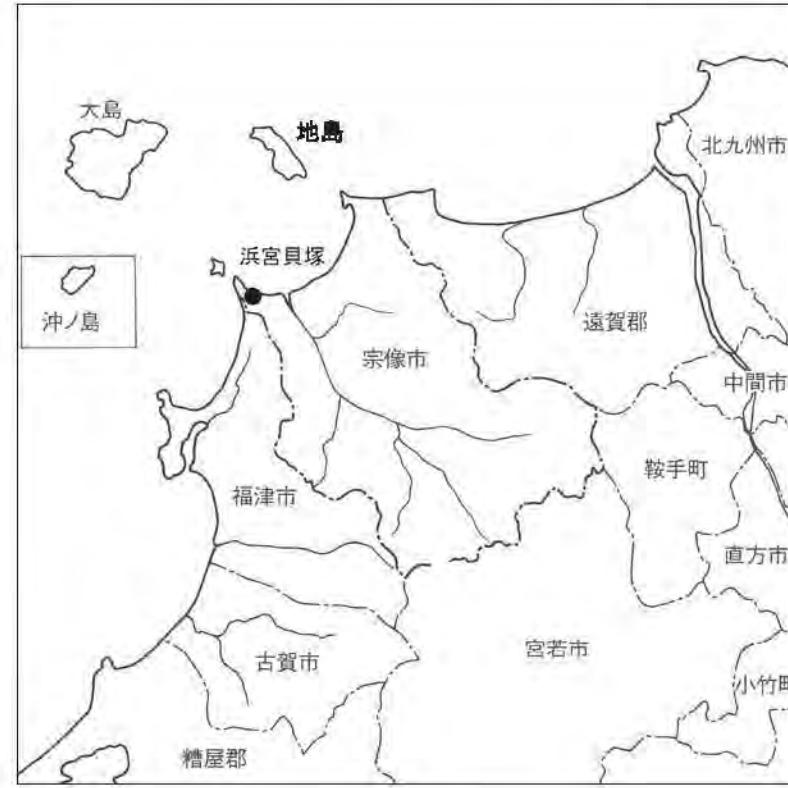


HA MA MI YA KA I ZU KA
浜宮貝塚 I

－福岡県宗像市神湊の発掘調査報告－

宗像市文化財調査報告書 第 76 集



2018

宗像市教育委員会

序 文

宗像市は、福岡県の北部、福岡市と北九州市の両政令都市の中間に位置する交通至便な住宅都市です。市域は九州本土側の内陸部と、離島である大島・地島・勝島・沖ノ島の4島からなり、内陸部は北を玄界灘に面し、他方の三方を山々に囲まれた風光明媚な風土に悠久の歴史が息づいております。

さて、本市では平成14年から取り組んでおりました「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界文化遺産登録が平成29年7月にユネスコ世界遺産会議におきまして登録が決定いたしました。そのようななか、いまだ不明な点の多い沖ノ島祭祀を支えた宗像海人のくらしや活動範囲を知る重要な遺跡として、宗像大社の末社である浜宮を中心として分布する浜宮貝塚が注目されております。昭和46年度の発見当時に民間の調査会である筑紫野史学研究会によって発掘調査が行われ、古墳時代の大規模な貝塚であることがわかつておりましたが、詳細な内容が不明のまま年月が過ぎておりました。このたび出土遺物の返還を受け再整理を行い、急務であった調査報告書の刊行にこぎ着けることができました。本書の刊行が、これから浜宮貝塚の保存・活用、学術研究や教育の場における歴史学習の一助となりますよう祈念いたします。

最後になりましたが、浜宮貝塚の発掘調査に参加された多くの人々、並びに本書刊行にご尽力いただいた多くの方々に心より厚く御礼申し上げます。

平成30年3月31日

宗像市教育委員会
教 育 長 遠 矢 修

本文目次

例　　言

- 1.本書は、昭和46年度の発掘調査と、その後の表面調査及び表探資料を含めた埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2.発掘調査は、筑紫野史学研究会が実施したものである。発掘調査成果と表面調査、表探遺物の整理及び報告書の作成は宗像市教育委員会が主体となって行った。
- 3.遺跡名は、浜宮貝塚と呼称し、宗像市文化財番号00045とする。
- 4.今回の報告は、各層位ごとの遺物報告を主として行うものとする。
- 5.遺物の実測は、主として豊崎晃史が行い、吉田東明(福岡県文化財保護課)、山田広幸、池田拓、の協力を得た。
- 6.遺物の製図は豊崎、株式会社イビソクが行った。
- 7.遺物の写真撮影は主として、豊崎・坂本雄介が行った。
- 8.本編の執筆、編集は主として豊崎が行い、白木英敏、山田広幸、野木雄大(福岡県文化財保護課)、山崎純男氏の協力を得た。

今回の発掘調査報告書の作成において、山崎純男氏、吉田東明氏、野木雄大氏はじめ多くの方々にご協力・ご指導をいただきました。この場を借りて心からお礼申し上げます。

第1章 序　　説

1.調査に至る経過	1
2.調査組織	1
3.位置と環境	2
4.昭和46年度調査概要	6

第2章 調査の記録

1.基本層序	9
2.各層の出土遺物	11

第3章 浜宮貝塚の骨角器・貝製品と自然遺物(山崎純男)

第4章 文献からみた浜宮(野木雄大)

第5章 まとめ

挿　　図　　目　　次

第1図	周辺遺跡分布図(1/50000)	3
第2図	周辺遺跡調査出土遺物	5
第3図	神湊周辺遺跡分布図(1/10000)	7
第4図	昭和46年度　浜宮貝塚周辺地形測量図	8
第5図	浜宮貝塚トレンチ西壁土層図	10
第6図	III-1層出土遺物実測図①	12
第7図	III-1層出土遺物実測図②	13
第8図	III-1層出土遺物実測図③	14
第9図	III-2層出土遺物実測図①	16
第10図	III-2層出土遺物実測図②	17
第11図	III-3層出土遺物実測図①	18
第12図	III-3層出土遺物実測図②	20
第13図	III-3層出土遺物実測図③	21
第14図	III-3層出土遺物実測図④	22
第15図	III-4層出土遺物実測図	23
第16図	III-5層出土遺物実測図	24
第17図	III-6層出土遺物実測図	25
第18図	昭和46年度調査　表探遺物実測図①	27
第19図	昭和46年度調査　表探遺物実測図②	29

(2) 平成29年度 組織構成

総括	宗像市教育委員会	教育長	遠矢修
	市民協働環境部	部長	磯部輝美
	郷土文化課	郷土文化課長	吉原賢治
	同	文化財係長	白木英敬
庶務・会計		技師	田子森千子
報告書作成担当者		主任技師	山田広幸
		技師	豊崎晃史
		技師	池田拓
		技師	坂本雄介

3. 位置と環境

(1) 地理的環境

宗像市は福岡市と北九州市の中間、玄界灘沿岸部に位置する。市北部の玄界灘に面した地域を除く三方を山地や丘陵で囲まれた盆地状地形を形成している。

市内北東部から東部は、標高400m前後の山々が連なる四塙連山が遠賀郡岡垣町との境界をなす。南東部から南部は、低山地が連なり宮若市と鞍手郡鞍手町と接している。南西部から北西部は、低山地や沿岸部から内陸部にかけて南北に延びる標高50m前後の台地が続き、福津市と接している。玄界灘に面した市北部は、緩やかな弧状の砂丘地帯(さつき松原)と急崖で形成された、市最北部に位置する鐘岬や沿岸部北西の草崎半島で構成される。

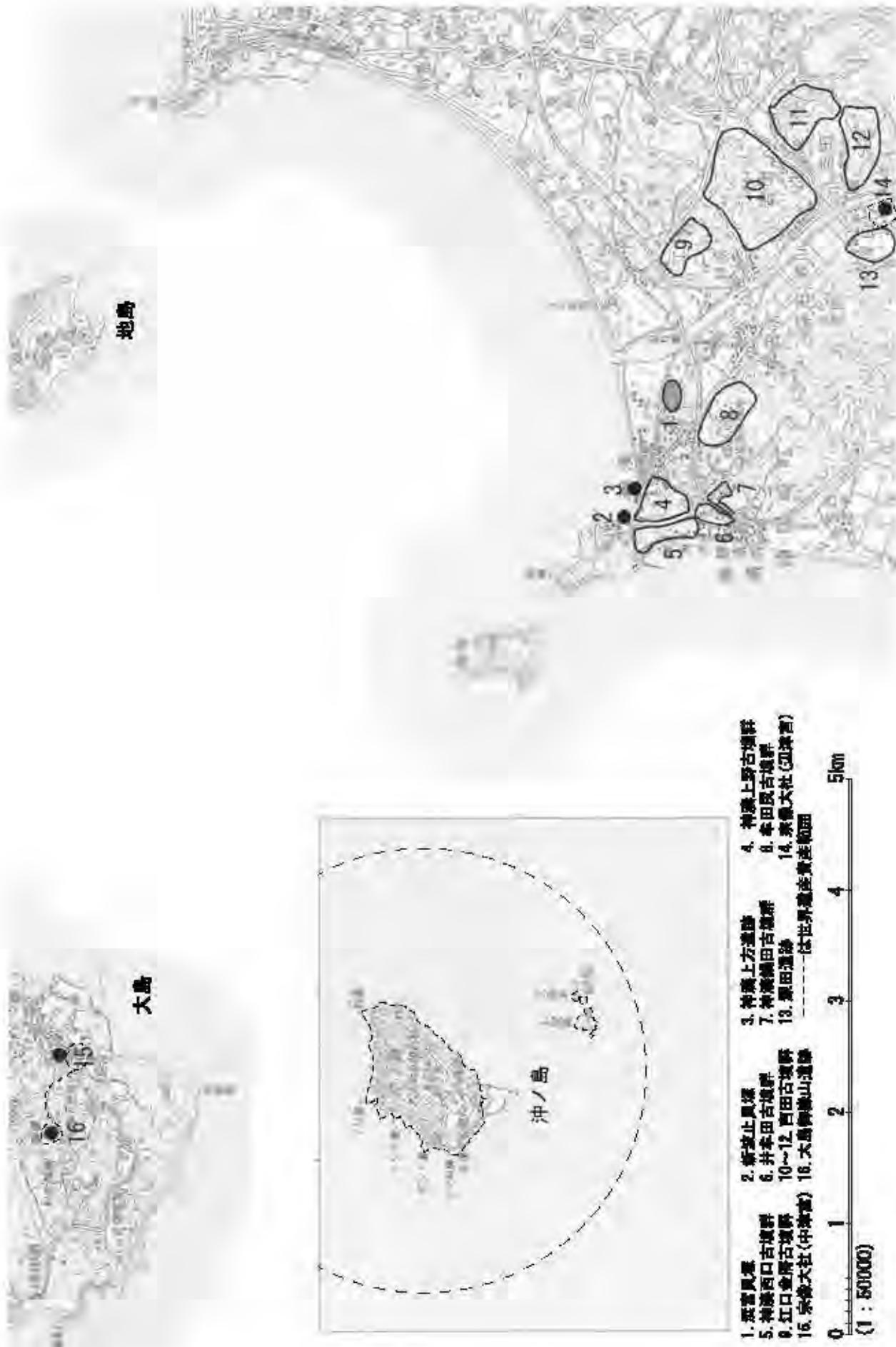
沖合には福岡県最大の有人の大島、地ノ島や無人島の勝島、九州本土から約60km離れた沖ノ島の4島を有す。市南東部の戸田山付近が水源となる全長16kmの釣川は市内中心部を貫流する市最大の河川である。支流には朝町川、山田川、樽見川、八並川、横山川、高瀬川などがあり、三方の山地がそれぞれ水源となる。釣川によって形成された沖積平野は主に水田として利用され、釣川と水田地帯の周囲には、三方の山地から派生した台地が延び、台地上や沖積平野にも住宅街が広がっている。

今回報告する浜宮貝塚は、福岡県宗像市神湊1270番地周辺を中心に、東西約220m、南北約160mの範囲に展開すると推定される古墳時代の貝塚である。立地環境としては、市内を貫流する釣川河口の右岸、南西から北東に延びる標高4m~10m程の低砂丘上に所在している。

(2) 浜宮貝塚の変遷と周辺遺跡

神湊に位置する宗像大社浜宮周辺は、戰前から一帯に貝に混じり遺物が散布する状況があったことから、在野の研究者らによって遺跡の存在が知られていた。戰後も一帯の調査が行われ、浜宮貝塚以外にも神湊沿岸一帯に所在する遺跡の存在が明らかとなった。以下、変遷を報告する。

まず、昭和11年に、当時宗像高等女学校に赴任していた教師の田中幸夫氏が郷土の紹介と宗像郷土館の建設資金調達のために刊行された「宗像の旅」(註1)に記載がみられる。本文において、神湊の貝に弥生式の貝塚として紹介されており、貝殻に混じり弥生時代後期の土器、土鍬、骨針出土の記載がある。当時は営林署所管の土地であるがためにどうすることもできないとの記載が見える。



第20図	昭和46年度調査 表採遺物実測図③	30
第21図	昭和46年度調査以後 表採遺物実測図①	33
第22図	昭和46年度調査以後 表採遺物実測図②	34
第23図	昭和46年度調査以後 表採遺物実測図③	35
第24図	昭和46年度調査以後 表採遺物実測図④	36
第25図	昭和46年度調査以後 表採遺物実測図⑤	37
第26図	柄状骨角製品	40
第27図	骨角器	41
第28図	貝製品	42
第29図	五社の濱殿神幸路図	54

表 目 次

表1	各層出土魚類及び部位	44
表2	貝類構成比	50
表3	出土遺物一覧表	63

図 版 目 次

図版 1	1.浜宮貝塚周辺航空写真 2.宗像大社浜宮 現況
図版 2	1.昭和46年度調査写真① 2.昭和46年度調査写真② 3.昭和46年度調査写真③
図版 3	1.昭和46年度調査写真④ 2.昭和46年度調査写真⑤ 3.昭和46年度調査写真⑥
図版 4	1.昭和46年度調査写真⑦ 2.昭和46年度調査写真⑧
図版 5	1.昭和46年度調査写真⑨ 2.昭和46年度調査写真⑩
図版 6	浜宮貝塚出土遺物①
図版 7	浜宮貝塚出土遺物②
図版 8	浜宮貝塚出土遺物③
図版 9	浜宮貝塚出土遺物④
図版10	浜宮貝塚出土遺物⑤
図版11	浜宮貝塚出土遺物⑥
図版12	浜宮貝塚出土貝製加工品
図版13	浜宮貝塚出土骨角器①
図版14	浜宮貝塚出土骨角器②

第1章 序 説

1. 調査に至る経過

宗像市においては、平成29年7月に「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群が世界文化遺産に登録され、文化財や市内遺跡に対する注目が集まっている。そのような中で、現状における市内遺跡の見直しを行い、遺跡の保護や活用に関する事業計画の策定を行った。その際に、世界遺産の構成資産である宗像大社の末社、浜宮社周辺を中心に展開する古墳時代の貝塚である浜宮貝塚の遺跡保護及び活用についての議題が挙げられた。同遺跡は、以前より古墳時代の貝塚及び遺物の散布地として認識されており、今回報告する昭和46年度トレンチ調査(筑紫野史学研究会)により、多くの須恵器・土師器片や貝類などの自然遺物が報告されている。

しかし、以前の調査報告では、紙面や調査体制の関係上、十分な遺跡の概要については報告できておらず、その後の周辺遺跡の調査成果などを加味した調査報告書の刊行が急務であった。また、近年この浜宮貝塚周辺においては、文化財有無の照会が増加傾向にあり、遺跡保護の観点からも、今年度において昭和46年度トレンチ調査成果の再整理を行い、浜宮貝塚の遺跡としての性格や位置づけを明確にし、今後の遺跡保護事業を念頭において基礎資料の蓄積を目的に報告書の刊行を行った。

2. 調査組織

(1)昭和46年度 調査団

筑紫野史学研究会
代表 中原志外頭

発掘調査担当者

下条信行、沢皇臣、島津義昭、山崎純男、森田勉、横山邦継

調査参加者

浜田昌治、渡辺文吉、小手川高造、加来満、池本正雄、宮崎泰子、江崎千代子、手嶋関圭子、山崎もと、渡辺千鶴子(以上筑紫野史学研究会)

重住、筒井、鹿島、小沢、小林、大上、晃(以上福岡教育大)

池園、森田、上原、田川、堀川、大森、永島、辻野(以上宗像高校)

山口、城戸、久富、武田、吉田、丸山、山中(以上城南高校)

児玉、城戸(以上福岡中央高校)

東海大学付属第5高校生徒(現東海大学付属福岡高等学校)

高橋直一(地元協力者)

※氏名に関しては、以前の調査概報から抜粋

次に、昭和14年宗像郷土館落成記念として刊行された「胸形」(註2)の収蔵品目録において、神湊貝塚の名がみられ、その内土鉢、骨籠、土器片の3点の記載がある。寄贈者は田中幸夫氏である。また、田中氏の記述にある神湊貝塚は、同氏刊行の「宗像郷土史」(昭和13年)中の「宗像郡古墳分布図」に示され、現在の浜宮貝塚の位置と一致している。

周辺遺跡として昭和25・26年に浜宮貝塚から西側に1.3kmほど移動した、現在の神湊漁港付近において、神湊新波止貝塚の発見・調査が行われている。発見の経緯として、昭和25年の福岡市歴史研究会による宗像方面調査において一行が神湊町に宿泊した際、福岡教育大学学生の三野章氏により発見及び調査が実施され、古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器、土師器のほか、石製品、金属器、骨角器が出土している。(註3)

続いて、昭和43年に「全国遺跡地図(史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図)」の作成に伴い、文化財保護委員会によって、遺物散布地として浜宮遺跡との記載がみられる。しかし、神湊新波止貝塚、後述する神湊上方遺跡については記載がみられない。

その後、今回報告する昭和46年度における筑紫野史学会による発掘調査が実施される。詳しくは後述するが、中原志外顧氏を調査団長とする研究グループによって、昭和46年4月29日～5月5日の短い期間で調査が行われている。5,000点を超える土器のほか、鉄器、骨角器、石製品、魚骨、動物骨、貝などの自然遺物も出土している。(註4)

また、昭和52年には「福岡県遺跡等分布地図(宗像郡編)」に作成に伴い、福岡県教育委員会によって分布調査が行われ、浜宮貝塚として記載がみられる。一方、神湊新波止貝塚、神湊上方遺跡ともに記載はみられない。

昭和54年には、第三次沖ノ島学術調査隊によって「宗像沖ノ島」が刊行され、西崎敬氏の総括編「宗像地域の展開と宗像大神」内において、「古代宗像七浦の人々-漁民と農民-」と題し、浜宮貝塚及び新波止貝塚などの神湊周辺の遺跡の報告が行われている。(註5)

昭和56年には、隣船寺昭和大改革に伴い、多量の土器が出土。吉武謙一氏の「筑前神湊隣船寺記録」昭和大改革竣工記念誌に遺物などについての記載がみられる。内容は写真、メモ程度に留まる。当時、市教育委員会では神湊上方A遺跡と命名している。(註6)

その他、平成6年には、近藤義郎「日本土器製塙研究」山崎純男「福岡県」内において、神湊上方A遺跡出土の玄界灘式製塙土器と神湊上方A遺跡に隣接する神湊上方B遺跡の製塙土器が紹介されている。両遺跡を製塙遺跡として捉えており、実測図などを記載している。(註7)

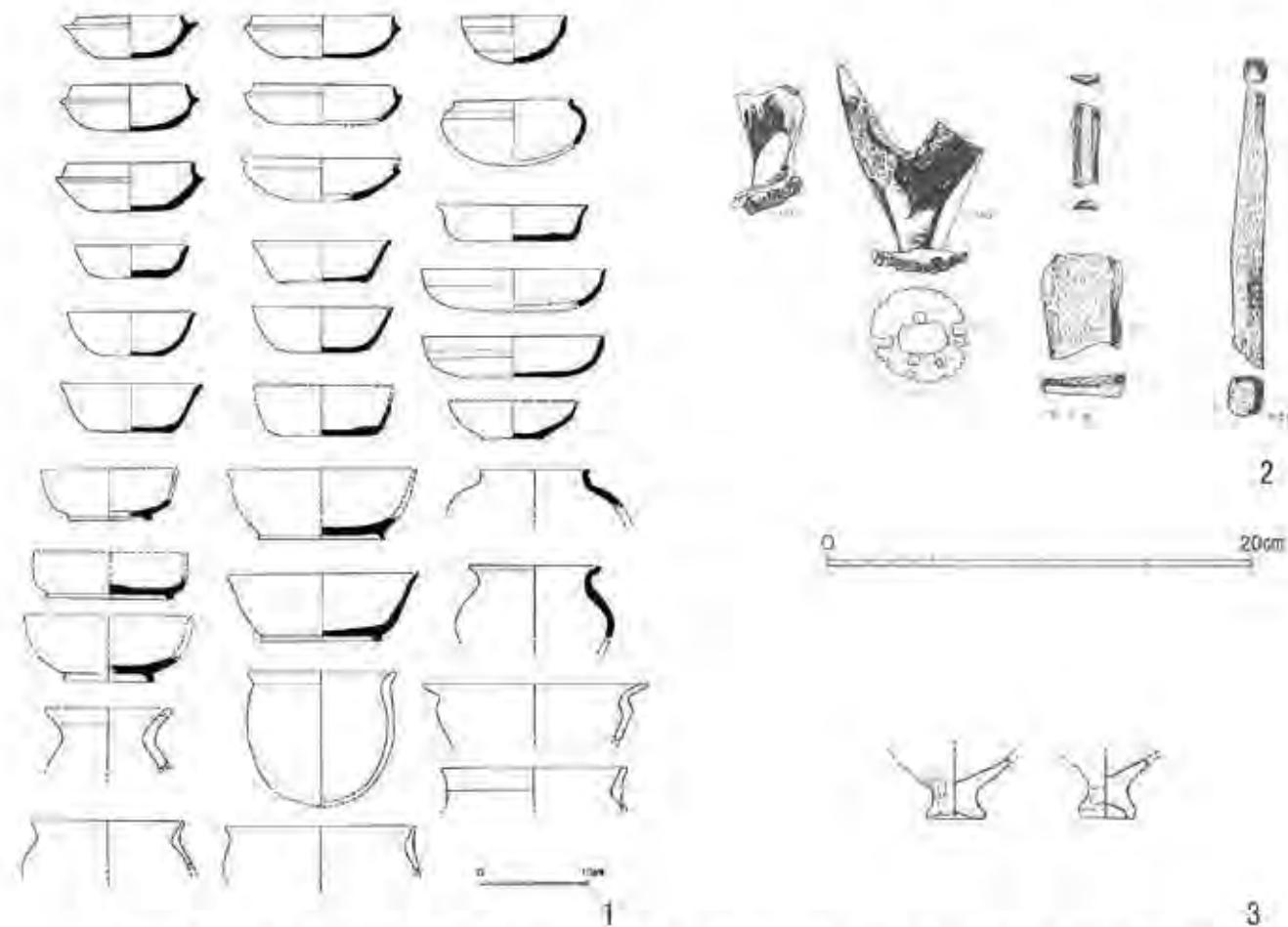
同年において、「福岡県宗像郡玄海町遺跡等分布地図」を玄海町教育委員会が行った際に、浜宮貝塚として記載がみられる。しかし、神湊新波止貝塚の記載は見られないが、神湊上方遺跡の記載は見られる。

最後に、平成23年の「宗像市遺跡等分布地図」の作成に合わせて、宗像市教育委員会によって、これまでの成果を踏まえる形で、神湊新波止貝塚及び、神湊上方A遺跡と神湊上方B遺跡を合わせ神湊上方遺跡、浜宮貝塚を記載する。

また、神湊の周辺遺跡においては、古墳群なども展開しており、浜宮貝塚から南側において牟田尻古墳群が立地している。古墳群は約200基からなる群集墳で、一部が調査されており、五世紀中頃～七世紀前半のかけての築造である。六世紀後半のアワビオコシとみられる鉄製品が出土した牟田尻桜京A-02号墳や、宗像市唯一の装飾古墳である櫻京古墳などが立地している。

また、南西側の丘陵には神湊井牟田古墳群が立地しており、6世紀後半～7世紀初頭の円墳が削平を受けているものも含め、12基確認されている。(註8)また、周辺には約10期の円墳の展開が

想定されている神湊鍋田古墳群や、最も海岸線に近い神湊西口古墳群や神湊上野古墳群が所在している。神湊上野古墳群に関しては、昭和41年福岡県史跡調査会(会長:長沼賛海・森貞次郎・渡辺正氣調査)による発掘調査が実施され、前方後円墳1基と円墳9基が確認されており「墳丘には人頭大の葺石あり」と報告されている。出土遺物として、鉄劍、短甲、須恵器、ガラス玉などが出土しており、5世紀後半の時期の築造が考えられる。また、立地からして、先に述べた新波止貝塚や神湊上方遺跡にみられる集落遺跡(海人集団)の墓域と想起できよう。



1・2 新波止貝塚出土遺物 (註3から抜粋)、3 神湊上方遺跡出土製塙土器 (註7から抜粋)

第2図 周辺遺跡調査出土遺物 (1:1/8、2:1/4、3:1/4)

参考文献

- 註1 田中幸夫1936「宗像の旅」
- 註2 田中幸夫1939「胸肩」郷土館落成記念
- 註3 三野 章2010「神湊新波止遺跡を通じて見た福島奈良朝の地方郷村文化」「福岡考古」第22号
- 註4 筑紫野史学研究会1971「浜宮貝塚調査概報」
- 註5 吉武謙一1982「筑前神湊隣船寺記録」隣船寺懇代会
- 註6 西崎敬氏1979「7.古代宗像七浦の人々-漁民と農民-」「宗像地域の展開と宗像大神」「宗像沖ノ島-本文-」
- 註7 近藤義郎・山崎純男1994「福岡県」「日本土器製塙研究」
- 註8 小池史哲1991「神湊井牟田古墳群I」玄海町文化財調査報告書第1集 玄界教育委員会
判田博明1991「神湊井牟田古墳群II」玄海町文化財調査報告書第2集 玄界教育委員会

4. 昭和46年度調査概要

調査は昭和46年(1971)の4月29日～5月5日の期間に民間団体である筑紫野史学研究会が主体となって実施された。また、調査指導・協力として福岡市教育委員会文化課、旧玄海町教育委員会、宗像大社、福岡教育大などの関係者と連携して5m×3m、深度約3mのトレンチ調査及び周辺の地形測量等の調査が行われている。

また、発掘調査と並行して分布調査が行われており、報告では「南北200m、東西800mにも達する巨大な馬蹄型の貝塚」と報告されている。現状として、馬蹄型の可能性は低く、範囲も南北はほぼ同様であるが、東西はその後の分布調査の結果、約200mの範囲に収まるものと想定される。

層序については、後章で詳しく述べるが、当時の地表面から深度約60cm程で遺物包含層が検出されている。ここから約2.4mの深度で6層の遺物包含層が検出されている。

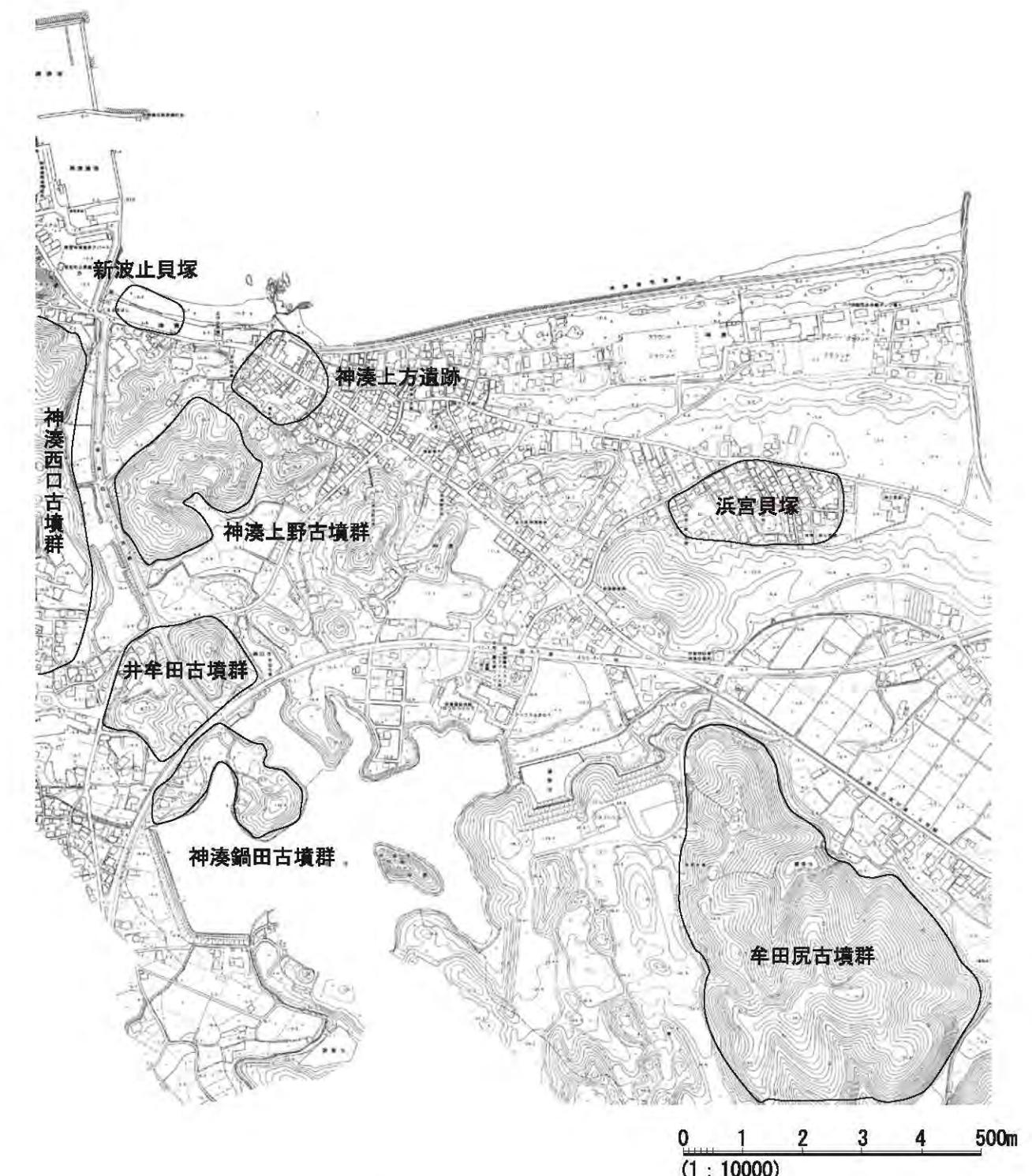
遺物としては土師器5208点、須恵器281点、その他、鉄器、骨角器、貝類等の自然遺物が出土している。土師器の器種構成としては、甕、壺、高坏、坏、塊が出土しており、甕、壺が主体になるようである。また「甕、壺に関しては外反する口縁は、やや胴張り取手の胴がつき、底部は丸底となる。中には顎もまじる。」と報告されている。その他「高坏には、坏部でみれば二種の区別がされ、坏部が塊形をなすものと坏部が屈折するものがある」とあり、全層的に出土が認められるが、前者は上層に多く、後者は下層に多く出土するとされている。これは、坏部の屈曲が明瞭な陵を持つものが形式的に古くなる時期編年と重なるが、各層位の比較検討が行える実測図等が掲載されておらず、詳細な検討はされていない。須恵器に関しては壺、高坏、坏が主体として出土しているということである。土師器に比べ遺物量が少なく、時期などの詳細な報告は行われていない。

鉄器は、刀子、鉛、ヤス類、釣り針等が出土、砂地ということもあり比較的良好な状態で出土している。また、骨角器に関しては、刀子などを装着する柄状骨角製品、細柳葉形の骨鏃などが見られる。

自然遺物に関しては、海浜遺跡ということもあり、動物骨が少なく、サメ、マダイが多くみられ、フグ、クロダイ、スズキ、カツオ、エイなども見られる。また、貝類は岩礁性のものが多く、サザエ、アワビは成長した大型のものが多く、潜水漁法の存在が想起される。

その他、祭祀に関連する遺物として、手捏ね塊形土器や有孔石製品なども報告されており、当遺跡での祭祀行為の可能性も考えられる。

以上のようなことから、浜宮貝塚については、出土遺物などから古墳時代における海浜集落の可能性が高いことが分かる資料が提示されている。しかし、出土遺物の各層位ごとの詳細な分類や時期検討などが行われておらず、遺跡の形成期の上限や最盛期、その時期幅についても明確にはされていない。祭祀に関して言えば、手捏ね塊形土器や有孔石製品の出土例から、集落内祭祀の可能性も残されており、その検討も十分に行わなければならない。また、先に述べたように、浜宮貝塚周辺は昭和46年の調査以降、発掘調査が行われた遺跡も増加してきている。当報告書では、この調査成果も加味した上で遺跡の性格や位置づけを行いたい。



第3図 神湊周辺遺跡分布図(1/10000)

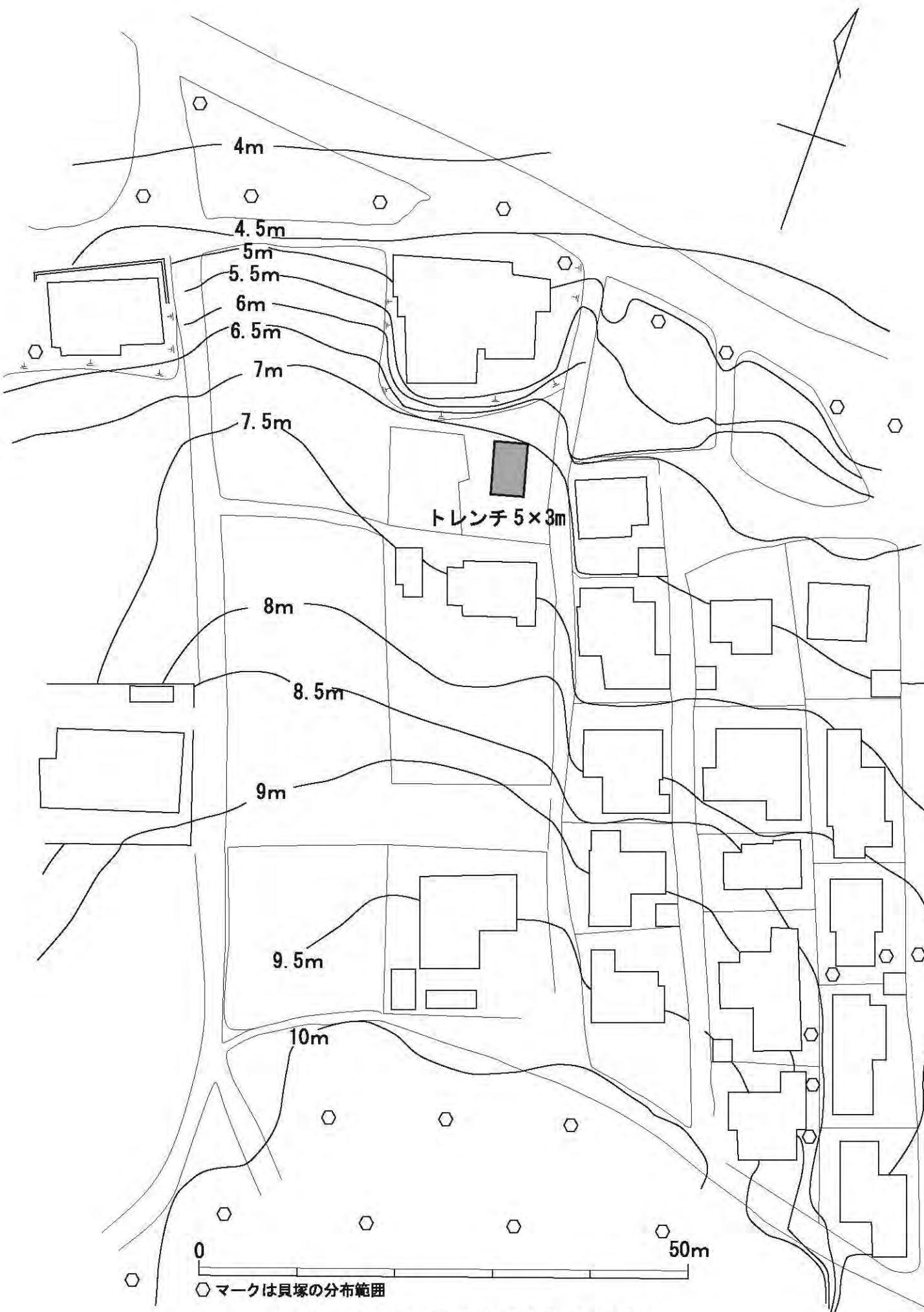
第2章 調査の記録

1. 基本層序

浜宮貝塚は砂丘上に立地しており発掘調査においては、 $5m \times 3m$ の $15m^2$ 、深度3.3mのトレンチ調査を実施している。地表面は、南西から北東にかけて緩やかに傾斜しており、基底面まで約3.1mを測る。

ここで、各層の概要を報告する。

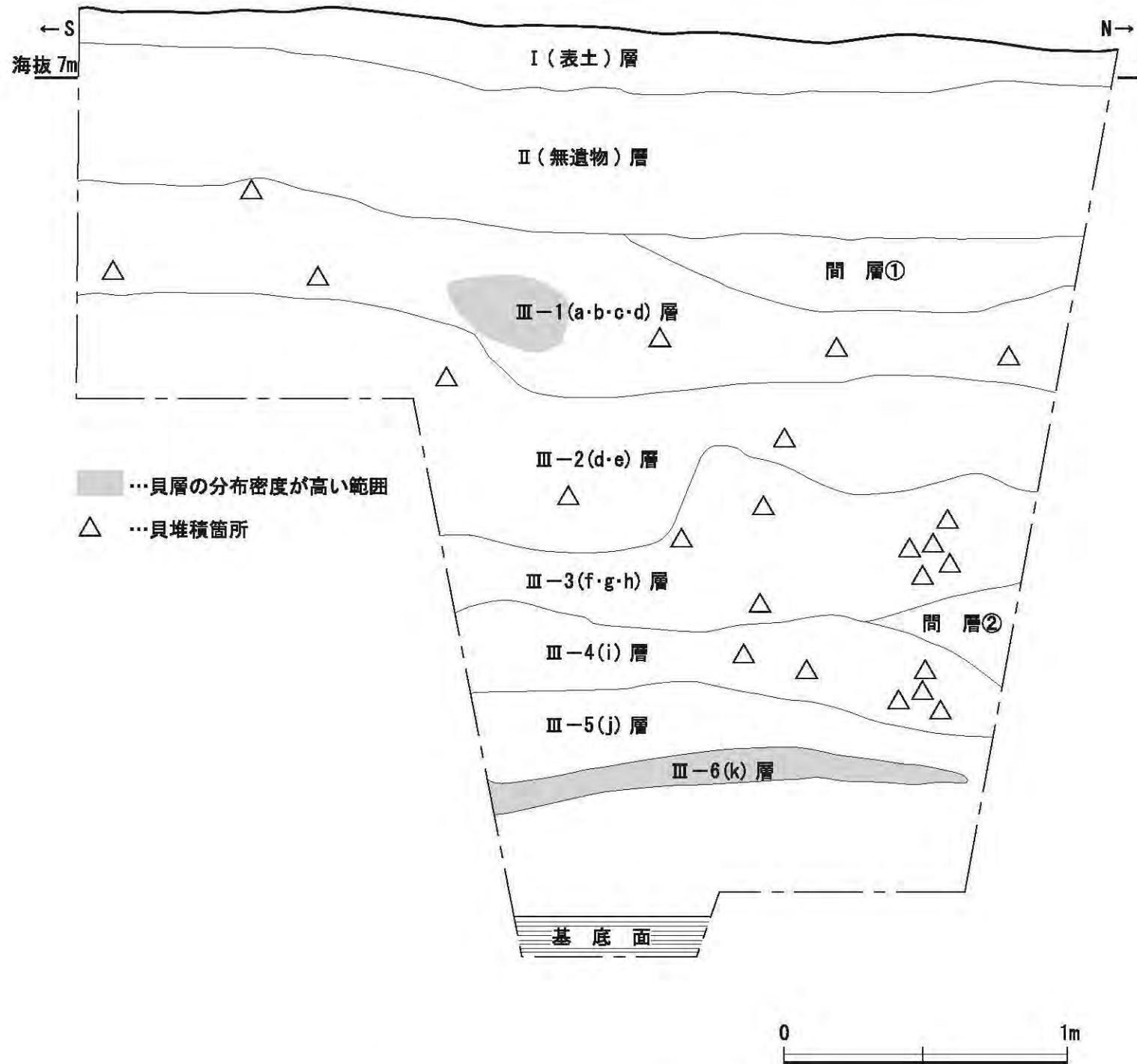
- (1) I層(表土)
耕作土であり、地表下約0.2~0.3m程堆積する。
- (2) II層(無遺物)〈淡褐色粗粒砂層〉
トレンチ全体において、約0.4~0.5mの厚さで堆積しており、遺物は確認されていない。また、下層に明褐色砂質の間層①が約0.2m堆積しているが、こちらも遺物などは確認されておらず、自然堆積層と考えられる。
- (3) III-1層(a·b·c·d)〈茶褐色混貝砂質層〉
全体的に0.2~0.6mの厚さで堆積。この層から遺物が検出でき、また、土層はトレンチ北西側に向かってやや落ち込んでおり、貝の集中した堆積も見られる。
- (4) III-2層(d·e)〈暗褐色混貝砂層〉
約0.4~0.7mの厚さで堆積する。貝が全体的にまばらに散布して出土する。他の層に比べ、やや遺物量は少ない。また、南側にかけて堆積が厚くみられる。
- (5) III-3層(f·g·h)〈茶褐色混貝砂層〉
約0.2~0.7mの厚さで堆積する。上面がやや不整形に波状を呈し、貝層が部分的に集中している箇所がみられる。堆積層はよくしまっている。
- (6) III-4層(i)〈黒色混貝砂層〉
この層は、ほぼ水平に堆積しており、約0.3mの厚さで堆積がみられる。有機物を含み、貝類はIII-3層と同様の堆積がみられる。また、この層とIII-3層との間に、明褐色の間層②が約0.2m堆積しているが、遺物などはみられない。
- (7) III-5層(j)〈明褐色砂層〉
ほぼ水平の堆積をなし、厚さ約0.8mの堆積がみられる。間層②と同様の土色であり、遺物の出土量も少ない。貝類もわずかに混入している程度である。
- (8) III-6層(k)〈茶褐色貝層〉
III-5層の中央にレンズ状に堆積している層である。この層は、他の層と比べ貝の含有率が多く、いわゆる貝層である。厚さ0.1mほどの堆積がみられ、有機物を含む。
- (9) 基底面〈茶褐色粘質層〉
茶褐色の粘質土である。遺構等は確認されていない。



第4図 昭和46年度 浜宮貝塚周辺地形測量図

2. 各層の出土遺物

ここでは、前章で述べた各層の出土遺物について報告する。先に、d層については、III-1層～III-2層にわたって出土遺物の報告が行われているため、ここではIII-2層に含める形で報告を行う。



第5図 浜宮貝塚トレンチ西壁土層図(1/20)

III-1層(a-b-c)

この層から、破片も含めれば、約2200点の土師器・須恵器が出土している。出土遺物の約90%を土師器片が占める。

須恵器(第6図 表3)

1・2は、須恵器壺蓋口縁片である。1は、天井部と口縁部にかけて、緩い稜をなす。また、口縁端部には段を有する。2は、やや丸み帯び、1と比較して時期的に下るもので、稜線や口縁端部の段などは退化している。

3～5は、須恵器壺身である。3・4は口縁端部片で4は口縁部が直線的に立ち上がり、3は短くやや内傾する形で收まる。5は、口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、底部は右回りの回転ヘラ削りである。

6・7は、須恵器壺口縁部である。6は、口縁端部に凸帯を有し、外面には二条の櫛描波状文を施す。7は、口縁端部に明瞭な陵を持ち、形態から頸部から大きく外反するタイプの口縁であろう。

土師器(第6～8図 表3)

8・9は、土師器壺口縁片である。8は、頸部から大きく外反し、やや内弯しながら端部を平坦に收める。復元口径は26.4cmを測る。9は、短頸の壺であり、口縁部を「く」の字状に緩く外反し、端部を丸く收める。また、内面接合痕より下は、やや磨滅しているが横方向のヘラ削り調整で仕上げている。

10～20は、土師器壺口縁部片である。10は、小型の壺であり、胴部から頸部までやや内傾する形で直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反する。また、内面は下から上方向へのヘラ削り調整で仕上げる。復元口径13.2cmを測る。11は、頸部から口縁部にかけて、「く」の字状に大きく外反する。外面の頸部から胴部にかけてはハケ目調整を施し、口縁部内面に関しては、横方向のハケ目調整で仕上げている。内面は頸部から胴部にかけては下から斜め上方向に向かってのヘラ削り調整である。12は、胴部が張るタイプの短頸壺であろう。胴部から頸部にかけて内傾し、頸部から口縁部に向かって短く外反し、丸く收まる。内面は横方向のヘラ削り調整で、外面は頸部から胴部にかけてハケ目調整で仕上げる。復元口径は、13.8cmを測る。外面は磨滅しているが、内面は細かい単位での横方向のヘラ削り調整で仕上げている。13は、頸部からやや外反する形で口縁端部に延びる。14～19は、壺口縁部片である。やや厚みに違いはあるが、胴部から頸部にかけて、緩やかに内傾し、口縁端部にかけてやや外反する形で短く延びる。磨滅しているものもあるが、内面は横方向のヘラ削り調整で仕上げる。20も壺と思われるが、内面の頸部から胴部にかけて、強く外弯する。

21・22は高壺壺部である。21は、鉢の可能性も残るが、口縁部で「く」の字状に屈曲し、口縁端部に向かって短く外反する。内面に横方向のミガキ調整を施す。22は、壺部に屈曲部のない、半球状を呈するタイプである。23・24も高壺壺部片で、24やや内湾気味に外傾し、口縁端部は直状に延びる。屈曲部に陵を持つタイプであろう。24は、内面は磨滅しているが、丁寧なヨコナデで仕上げる。

25~27は、高壊脚部片である。25・26は、脚部が「ハ」の字状に開き、裾部で屈曲する。外面は縦方向のヘラ削り調整で、内面は横方向ヘラ削り調整で仕上げる。27も同様に屈曲部から端部に向かってやや水平になる。前者に比べると肥厚しやや大型のものである。

28~35は、土師器鉢である。28は、内面に僅かに放射状にミガキを施し、暗文状を呈している。29は、口縁端部にかけてやや直線状に延び、端部を僅かに摘み上げる。30~32も、鉢口縁部片で、30のように口縁端部に向かって直線的に立ち上がるものがみられる。

30・31は、やや肥厚し、深みのある体部も持つ。両者とも磨滅が著しいがヘラ削り調整で仕上げていると思われる。

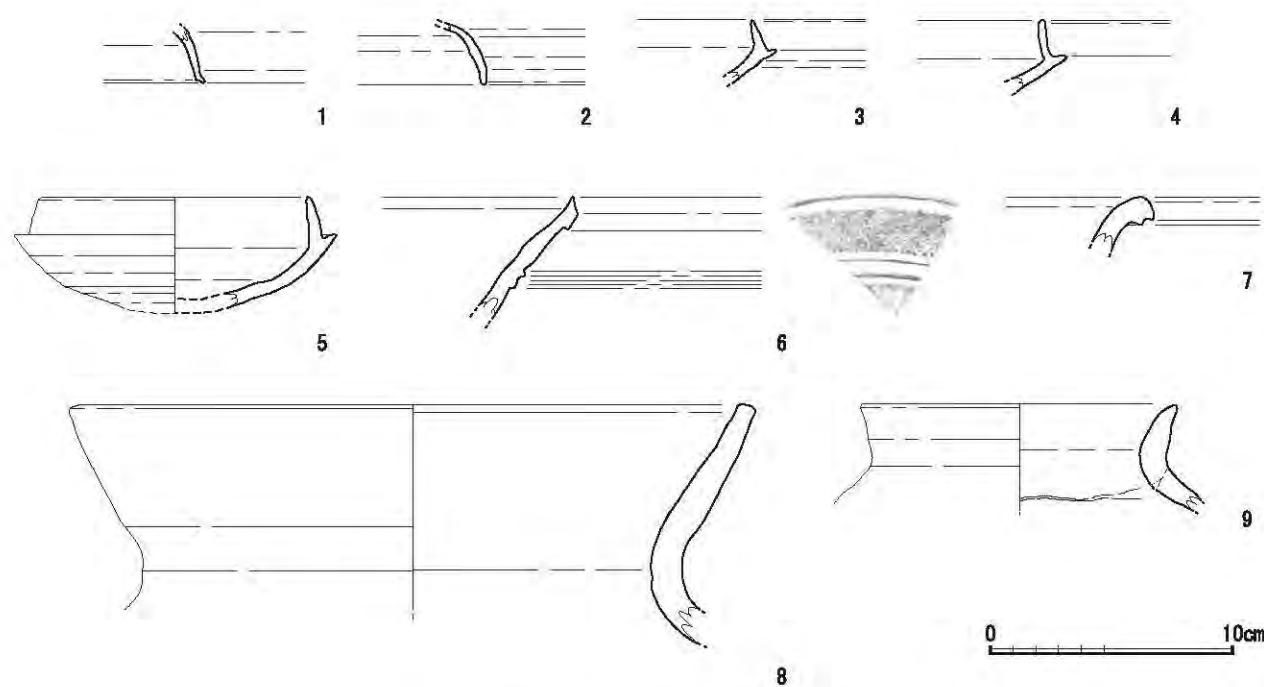
33・34は、やや小型の鉢口縁部片で、口縁端部を僅かに外反し、摘み上げている。35は、口縁部が「く」の字状に屈曲するタイプの鉢であろう。

36~41は、土師器塊である。36~38は、浅い体部を持ち、口縁端部がわずかに内弯する。調整に関しては、36はヘラミガキ、37はハケ目、38は削り後ナデ消し調整と違いが見られる。3点とも復元口径13cm前後に収まる。39~41も塊の口縁部片であるが、体部がやや丸みを持ち、口縁端部に向かって内弯する。

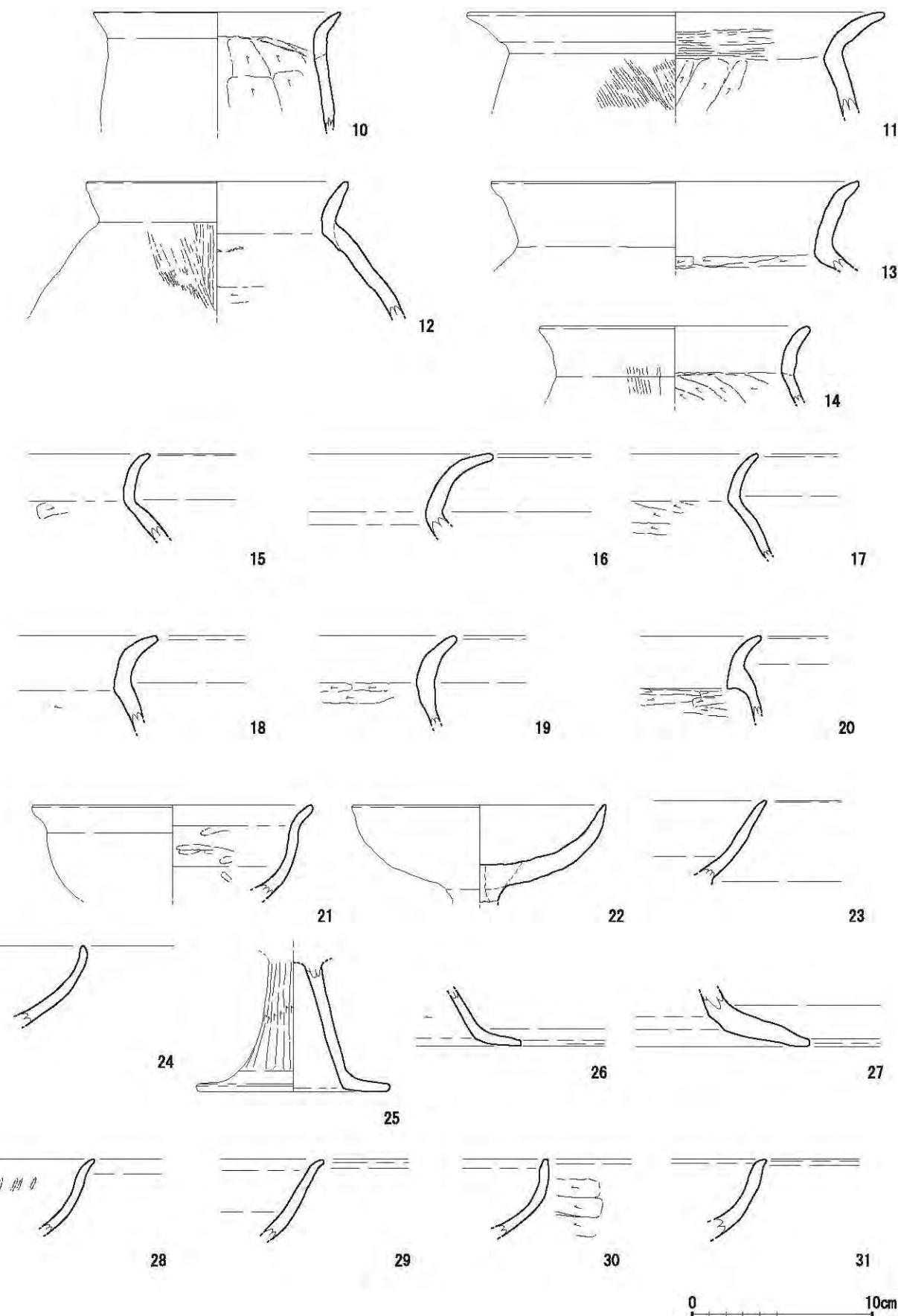
42は、製塩土器片である。玄海灘式製塩土器の特徴である、外面を強く叩き締め、内面にハケ目のようなアテ具痕が見られる。

43は、瓶把手部片である。傾きは任意で設定した。指ナデで調整し、内面は下から上方向への削り調整である。44は、瓶底部片で、三つの孔が確認できることから、多孔式のものであろう。胎土は良好で色調は暗黄褐色を呈する。

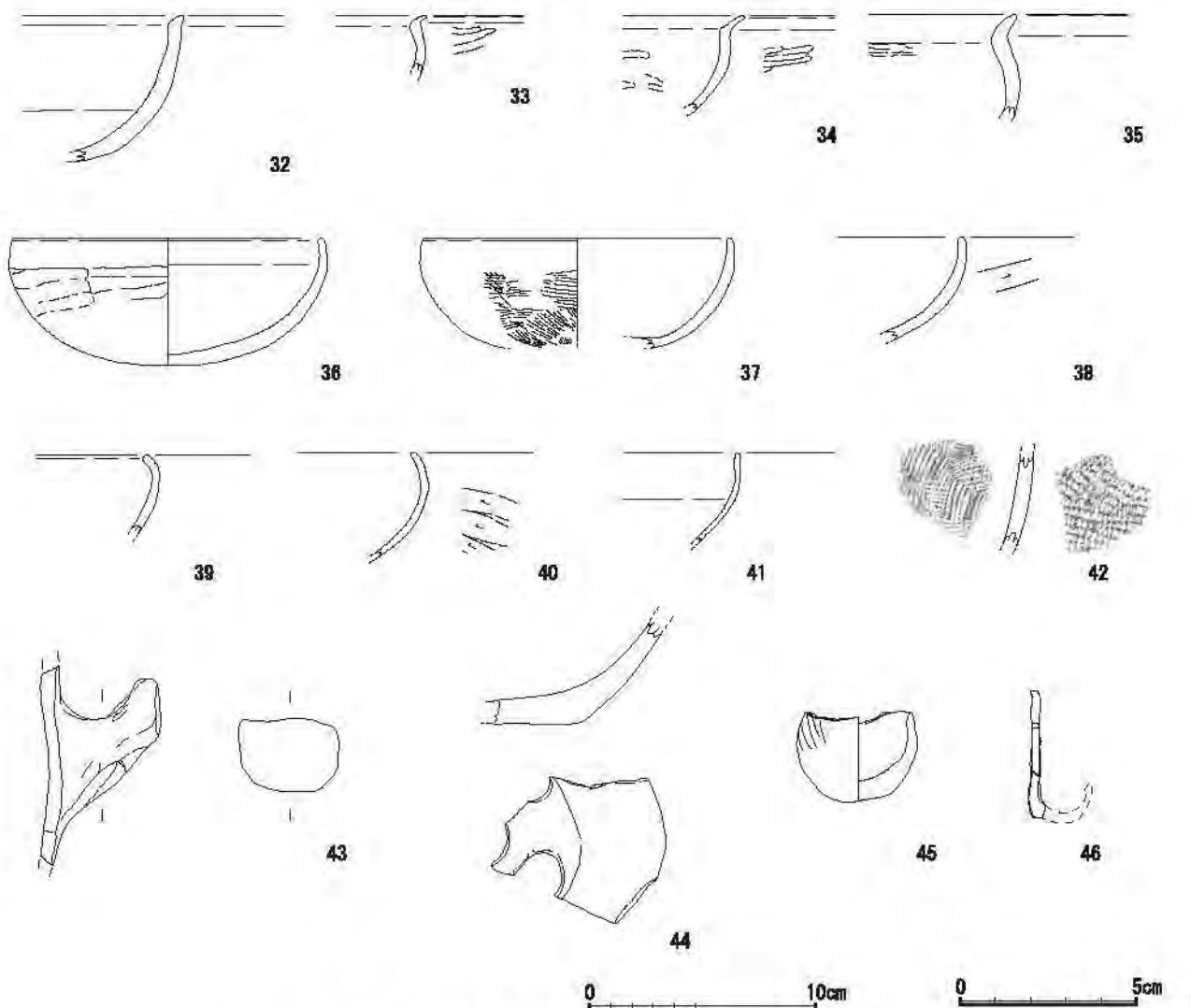
45は、手捏ね塊形土器である。口縁端部にかけてやや直状に立ち上がり、端部を指ナデで整形し、その際の稜が部分的に残る。46は、鉄製釣針である。先端部を欠損し、頭部分は糸かけの切込みであろうか。断面は円形を呈し、現存長3.5cmを測る。



第6図 III-1層出土遺物実測図①(1/3)



第7図 III-1層出土遺物実測図②(1/3)



第8図 III-1層出土遺物実測図③(32~45 1/3)(46 1/2)

III-2層(d·e)

この層からは、破片も含めれば、約1500点の土師器・須恵器が出土している。こちらもIII-1層と同様に、出土遺物の約90%を土師器片が占める。

須恵器(第9図 表3)

47·48は、坏蓋片である。47は、天井部から口縁部にかけて、一段の稜をなす。口縁端部に段はなく、全体的に肥厚している。

49~52は、須恵器坏身片である。49~51は、受け部から口縁部にかけての破片で、口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、端部を丸く收める。52は、口縁部のつまみ出しが小さくわずかに内弯して立ち上り、端部を丸く收める。底部は、右回りの回転ヘラ削り調整で仕上げる。復元口径は12.8cmを測り、色調は明灰褐色を呈し、焼成も良好である。

53は、高坏口縁片である。体部に二条の沈線を設けており、凸帯を有する。端部に向かってやや外反しており、口縁端部内面に緩い段を持つ。焼成も良好で、色調は外面暗灰褐色の内面明灰褐色を呈し、胎土も精良である。全面回転ナデ調整で仕上げる。

54~57は、高坏脚部片である。54·55は、3方向の方形状の透かしと考えられ、56·57に関しては、最低1方向の透かしは入る。54·56の脚端部は丸く收まり、55·57は2段の稜を有する。焼成は良好で、色調は、暗灰褐色及び明灰褐色を呈する。

58は、須恵器壺口縁部片である。頸部から緩やかに外反し、口縁端部に凸帯を持つ。復元口径は20.0cmを測る。

土師器(第9~10図 表3)

59~61は、壺口縁部片である。59は、やや小型の壺で、頸部からやや内弯しながら、緩く外傾し、立ち上がる。内面は横方向のヘラ削り、外面は縦方向のハケ目調整で仕上げる。60·61は、口縁部のみであるが、口縁端部に向かって外反する形で端部を丸く收める。

62~67は、壺口縁部片である。62は、胴部からやや内弯しながら、頸部に至り口縁部に向かって「く」の字状に外反しながら立ち上がる。頸部から、やや肥厚し端部を平坦に收める。頸部以下内面は横方向のヘラ削り調整で、外面は縦方向のハケ目調整である。63はやや胴部が張り、緩く内弯しながら頸部に至る。口縁は外反しながら、短くのび丸く收まる。64~66も頸部から口縁部までの破片で、65のように、頸部でやや鋭く屈曲し、やや外傾しながら直線的に立ち上がるものと、64のように緩く内弯し、短く外反して端部が丸く收まるものがみられる。66は、口縁部が短く強く外反し、端部を平坦に收めている。67は、壺口縁の可能性も残るが、壺として報告する。端部に向かって緩く外反しながら立ち上がり端部を丸く收める。内面は削り調整で、外面にはやや細かい単位の縦方向のハケ目を施す。

68は、壺底部である。やや丸みをもつ平底で、内面は磨滅が著しい。外面は斜め方向のハケ目調整で仕上げる。底径は、4.8cmを測る。

69~72は、高坏坏部片である。69は、底部がやや厚く、口縁部で緩く「く」の字形に屈曲する。内外面ともに、密なミガキ調整が施され、坏部から脚部にかけてはヘラ削り調整を行っている。特に内面は放射状にミガキ調整がみられ、暗文状になっている。復元口径は14.0cmを測り、焼成も良好。色調は、暗褐色を呈する。70は、やや扁平な坏部で、端部に向かって緩く内弯しながら立ち上がり、端部にかけて短く外反する。端部は平坦に收めており、内面口縁部に横方向のミガキ調整が見られる。僅かに残る脚部は、縦方向の削り調整である。71は、坏底部から脚部にかけての破片である。坏部においては、接合部から上の口縁部を破損しており、屈曲部の稜が残る。坏部内面は磨滅しており、外面に関しては、脚部にかけて丁寧なナデ調整で仕上げる。脚部内面は横方向のヘラ削り調整で、「ハ」の字状に開いたあと、やや水平に裾部にのびる形状と考えられる。72は、坏部のみで、やや深いある体部を持ち、端部を短く摘み上げている。全面ナデ調整で仕上げている。

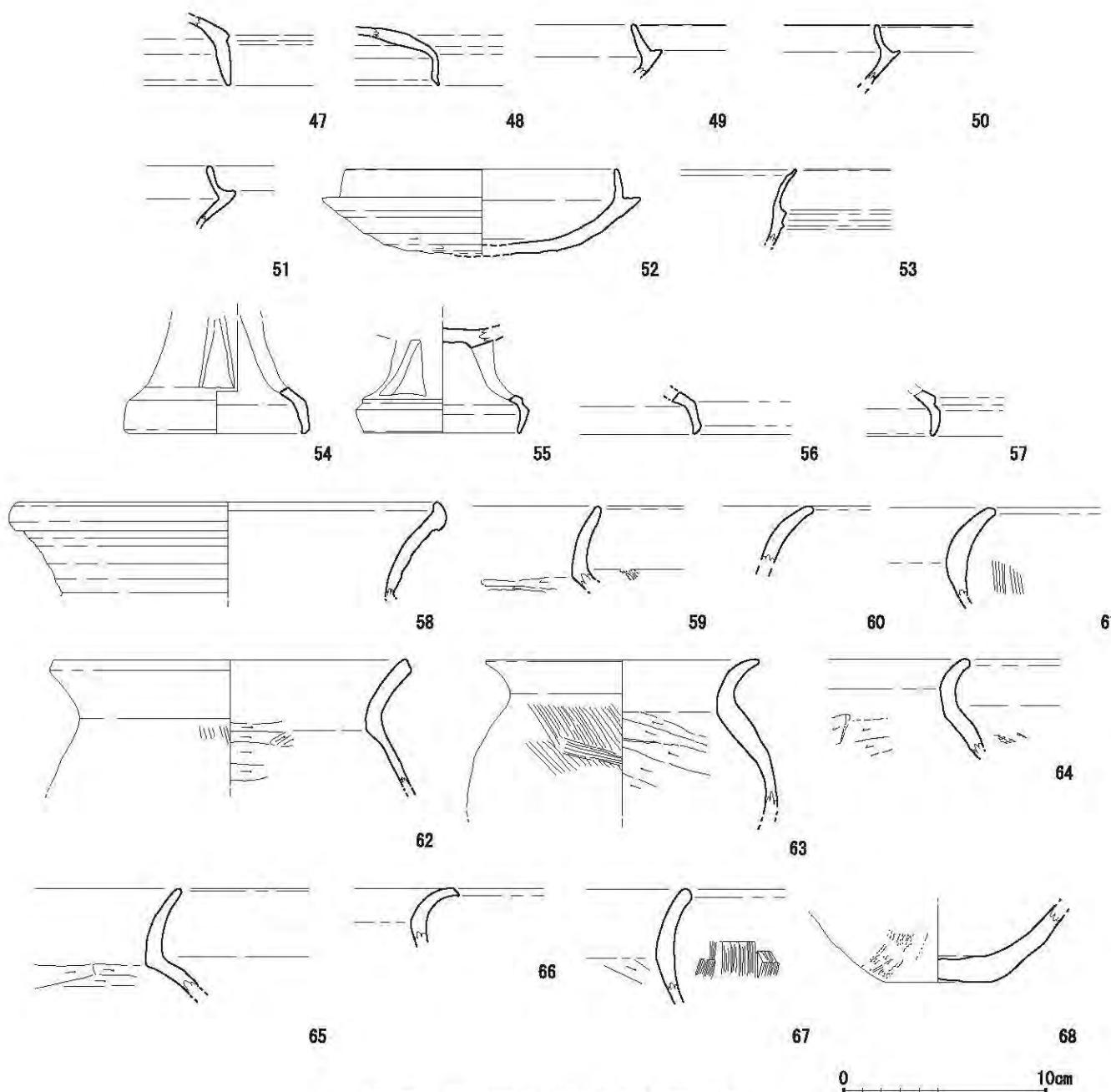
73~75は、高坏脚部片である。73は、脚部に孔を穿っている。脚は「ハ」の字状に開き、裾部にかけて強く屈曲し、やや水平になる。端部は平坦に收めており、外面は丁寧なナデ調整、内面は横方向のヘラ削り調整で仕上げている。復元底径は、15.4cmを測り、焼成は良好。色調は淡茶黄褐色を呈し、胎土には石英と微量の雲母を含む。74·75も、「ハ」の字状に脚部が開いたあと、裾部に向かって水平に開くタイプである。74は、外面は縦方向のヘラ削り調整で仕上げており、両者とも、中実があるタイプのものである。

76~80は、鉢である。76は、体部から口縁部かけて緩やかに「く」の字状に屈曲する。内面から口縁部までは、丁寧なナデ仕上げで、外面は横方向のヘラ削りで仕上げる。復元口径は12.6cmを測り、焼成も良好である。色調は、灰白色を呈する。77は、やや体部が張り口縁端部に向かって「く」の字状に屈曲する。口縁端部は、やや摘み上げる形で外反する。78も77と同様のタイプと思われるが、口縁端部の外反が緩い。79·80は、口縁端部に向かって緩く内弯しながら立ち上る。

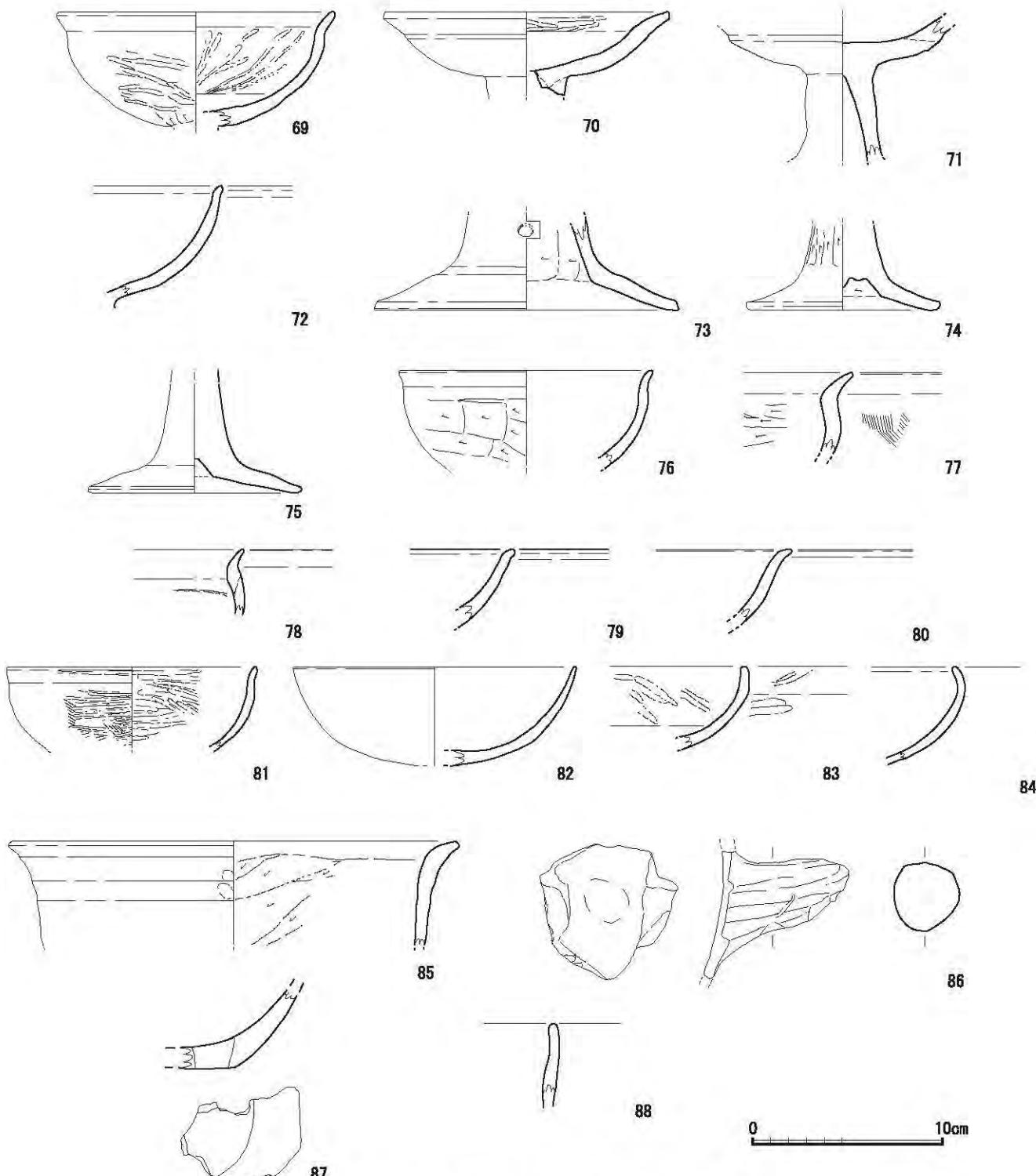
り、端部を短く外反しながら摘み上げる。調整は不明瞭であるが、ヨコナデ調整で仕上げていると考えられる。

81～84は、塊である。81は、底部から緩く立ち上がり、口縁端部で僅かに外反する。内面は密なミガキ調整で、外面はハケ目調整で仕上げている。復元口径は12.6cm、焼成も良好で、色調は黒褐色を呈する。82は、半月状の塊で、底部から口縁部にかけて緩く立ち上がる。83は、口縁端部で直線状に立ち上がり、内外面ともミガキ調整で仕上げる。84はやや体部が張り、口縁部で内弯する。外面は削り後ナデ調整で仕上げる。

85は瓶口縁部片であろう。口縁部が直線的に立ち上がり、端部で短く外反する。内面は斜め横方向のヘラ削り調整で、外面には指頭痕が見られる。復元口径は22.4cmを測る。86は、瓶把手部である。傾きは任意で設定した。内面は、下から上方方向のヘラ削り調整で、内面に把手部の接合痕を残す。87は、瓶底部である。二箇所に孔が確認できるため、多孔式のものであろう。88は、瓶口縁部片であろう。調整はヨコナデで、焼成も良好。色調は明赤褐色を呈する。



第9図 III-2層出土遺物実測図①(1/3)



第10図 III-2層出土遺物実測図②(1/3)

III-3層(f·g·h)

この層からは、約1300点の須恵器・土師器片が出土している。主体は土師器が占める。

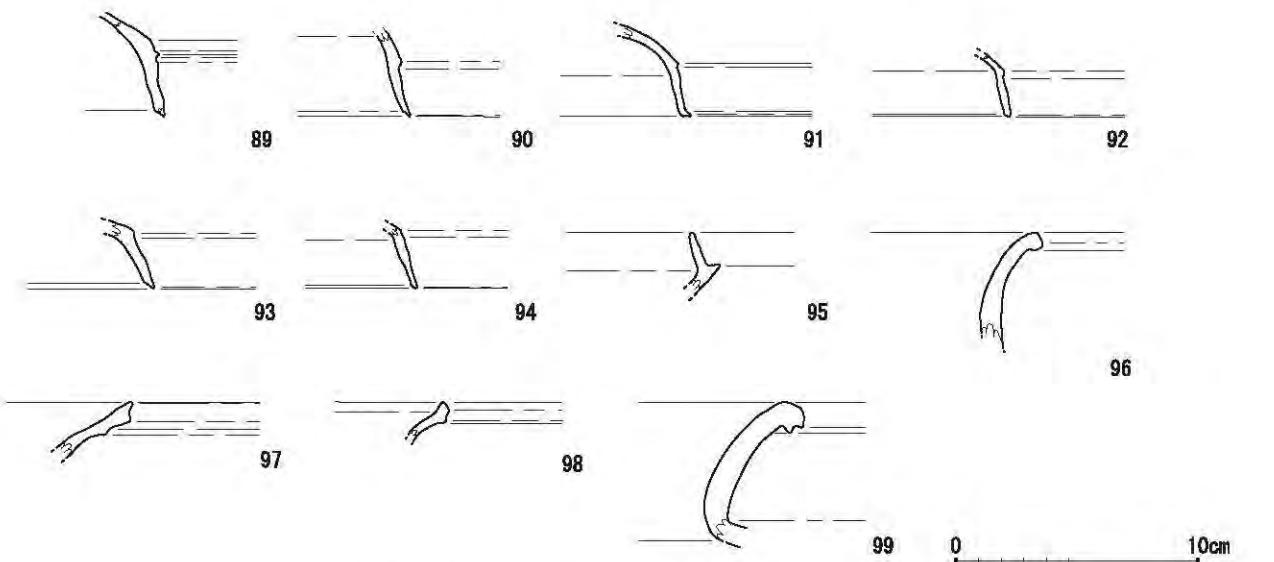
須恵器(第11図 表3)

89～94は、壺蓋である。89は口縁端部を一部欠くが、明瞭な稜が残る。また、端部も復元すれば、内面に段を有するものである。天井部は回転ヘラ削りで仕上げる。90は、天井部から口縁端部にかけて、明瞭な稜と一条の沈線を有する。また、口縁端部に僅かに段を有する。91・92も同様に、天井部から口縁端部にかけて稜と沈線がみられるが、89ほど明瞭ではなく、時期的に下るものである。

のと考えられる。93・94に関しては、90～92に比べて、器高が低く、天井部から続く稜も明瞭ではない。また、端部内面に僅かな凹みを有する。

95は、坏身である。受け部は水平方向に短く延び、口縁部はやや内傾しながら短く立ち上がる。96～98は、壺口縁部片である。96は、頸部からやや外傾しながら立ち上がり、端部にかけて外反する。端部はやや丸みを帯びた凸帯を持つ。97は、口縁端部に向かって強く外反する。また、端部直下に断面三角形の凸帯を二箇所に持つ。98も、口縁端部に向かって強く外反し、端部には、僅かに凸帯を有する。

99は、甕口縁部片である。端部にかけて外反し、端部の凸帯には明瞭な稜を持つ。



第11図 III-3層出土遺物実測図①(1/3)

土師器(第12～14図 表3)

100・101は、壺口縁部片である。100は、胴部下半を欠く。やや胴部が張り、頸部にかけてくびれ、口縁端部に向かってやや内弯しながら立ち上がる。やや肥厚し、内面は横方向のヘラ削り、外面を縦方向のハケ目調整で仕上げる。復元口径は18.0cmを測る。色調は暗褐色を呈る。101は、口縁部が短く、頸部からやや内弯しながら、外傾する。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に微量の雲母を含む。

102～111は、甕である。102は、口縁部を欠く。底部は丸底で、胴部は長胴気味で肩部はあまり張らない。口縁部は、おそらく短く外反するものであろう。内面は横方向の削り調整で、外面はやや磨滅するが、粗いハケ目で仕上げている。器高は24.7cmを測り、色調は暗茶褐色を呈する。103は、球形の胴部からやや外反する口縁部を持つ。内面は、横方向のヘラ削り、外面はハケ目調整で仕上げる。復元口径は14.6cmを測り、色調は暗褐色を呈す。106・107も同様のタイプと思われるが、口縁部内面にハケ目調整を施すなど違いも見られる。104・108～110は、胴部が張らず、長胴気味になるタイプの甕であろう。口縁部は、やや外反し、頸部の屈曲は緩い。内面はヘラ削り、外面は縦方向の刷毛目で仕上げる。105・111は、短頸甕の口縁部片である。両者とも胴部があまり張らず、頸部から口縁を短く摘み上げる。

112～118は、高坏坏部片である。112・113は、屈曲部に明瞭な稜を持ち、やや外反しながら口縁端部を外へ引き出す。116～117もやや肥厚するものもあるが、同様のタイプで、屈曲部以下を破損している。114は、坏部に屈曲部のない、半球状を呈するタイプである。口縁端部を直線的に摘み上げている。口径は12.6cm、現存器高は6.5cmを測る。色調は暗黄褐色を呈する。115は、鉢の可能性もあるが、ここでは高坏として報告する。口縁部は「く」の字状に屈曲し、緩く外反しながら端部を丸く収める。内面に暗文状のミガキを僅かに確認できる。

119・120は、高坏脚部片である。裾部に向かって大きく「ハ」の字状に開き、やや強く屈曲して裾部に至る。端部は、119は平坦に、120は丸く収めている。外面及び内面屈曲部までは、丁寧なナデで仕上げており、屈曲部より上は、横方向のヘラ削りで仕上げる。

121～127は、鉢である。121は、やや扁平で口縁端部を短く外に引き出す。口縁部は、緩い「く」の字状を呈しており、ミガキ調整で仕上げる。復元口径は、15.2cmを測り、色調は明茶黄褐色を呈する。123も同様のタイプと思われ、内外面とも密なミガキ調整で仕上げている。122は、口縁端部はわずかに外反しながら摘み上げる。123同様に、内外面とも密な横方向のミガキで仕上げる。124・125は、口縁端部片で、緩く内弯しながら立ち上がり、端部で短く外反する。126は、体部が深く、口縁端部に向かってやや直線状に立ち上がる。端部はヨコナデによって摘み出している。内面は下から上方向への削り調整で仕上げる。127は、やや大型の鉢口縁部片である。底部からやや緩く直線状に立ち上がり、端部が短く外反する形で摘み上げている。内面は磨滅が著しい。外面は端部下に縦方向のハケ目、そこから底部にかけては横方向のヘラ削りで仕上げる。現存器高は8.2cmを測り、色調は暗褐色を呈す。胎土に0.5mm以下の石英を一定量含む。

128～133は、壺である。128・129は、浅い体部から口縁部に向かって、やや内弯しながら端部を丸く収める。全体的に丁寧なナデで仕上げており、128は外面にハケ目を施す。132も同様のタイプであろう。130も、やや扁平で端部をヨコナデで摘み上げている。外面下半には、密な刷毛目調整を施す。131は、球状の体部に、端部に向かって緩く内弯する。底部は、磨滅しているが、外面は横方向のミガキで仕上げる。133は、扁平でやや小型の壺であろうか。

134は甕である。把手上半は直立し、口縁端部で短く外反する。内面は、下から上方向へのヘラ削り調整で、復元口径は25.6cmを測る。137も同様の甕口縁部片である。端部にかけてやや外反しており、内面は横方向、外面は縦方向のハケ目で仕上げる。復元口径は24.0cmを測る。

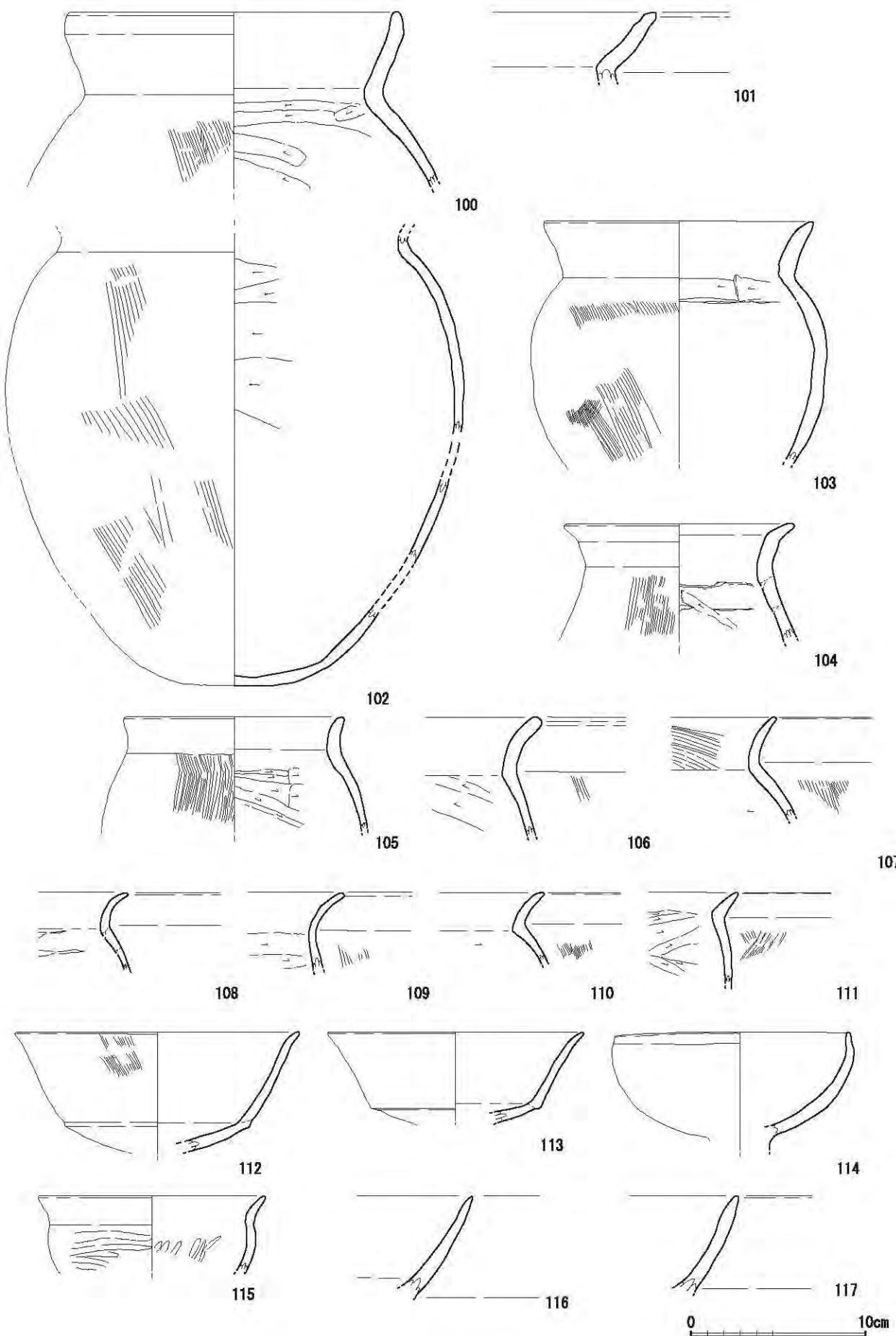
135・136は、甕把手部である。両者とも、傾きは任意で設定した。色調は灰黄褐色で、137の上面には浅い切込みが見られる。

138は、土師器模倣坏である。体部と口縁部の境に緩い段を持ち、内外面とも丁寧なミガキとヨコナデで仕上げる。復元口径は12.4cm、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。胎土は細砂粒である。

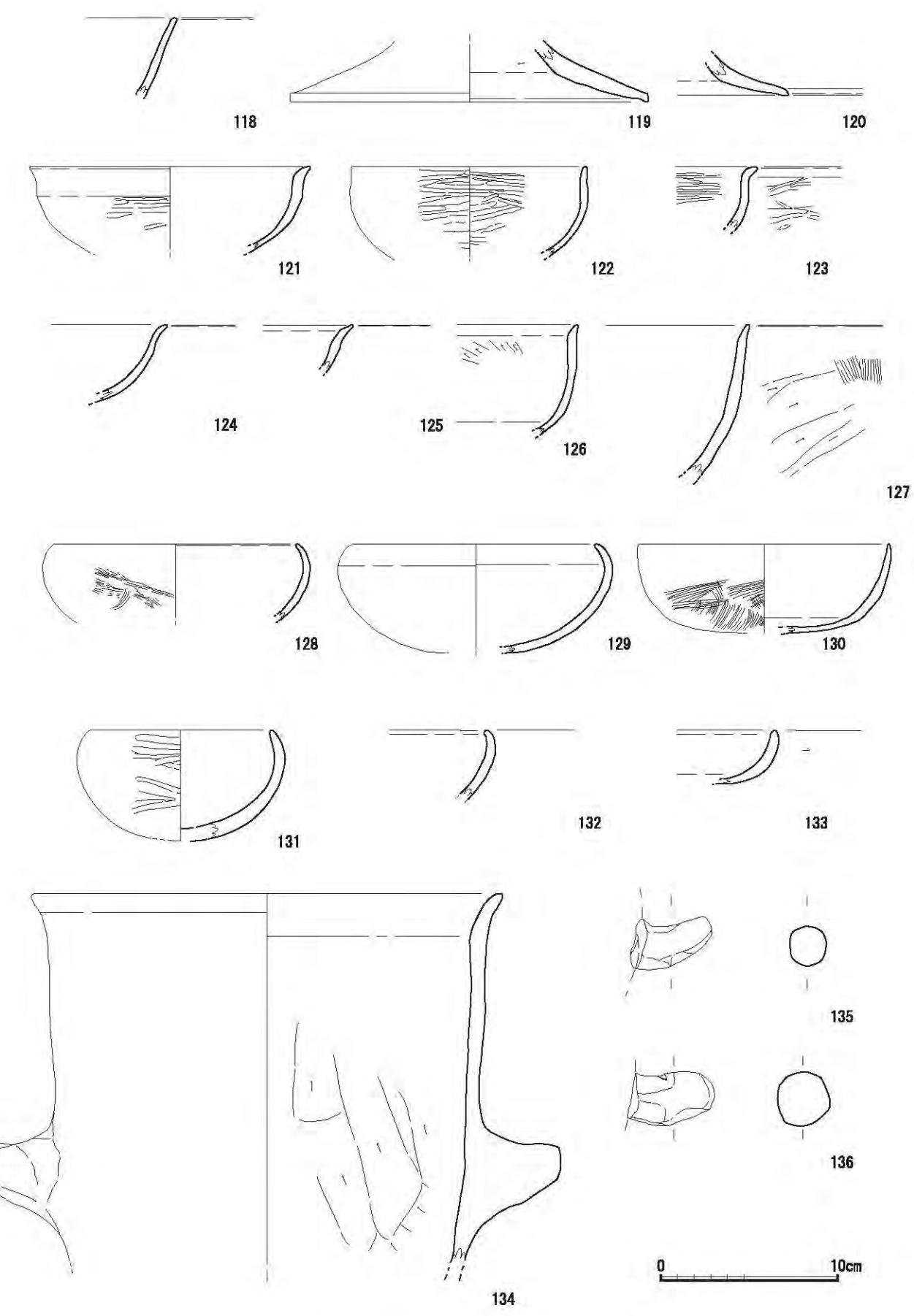
139は、滑石製の有孔円板である。板状の滑石を丸く加工し穿孔を施したもので、外面は粗く研磨されている。片面穿孔であろうか。直径3.1cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cmを測る。

140は、鉄製ヤスである。先端部を欠損するが、返しは残る。断面はやや扁平で、現存長は12.1cmを測る。

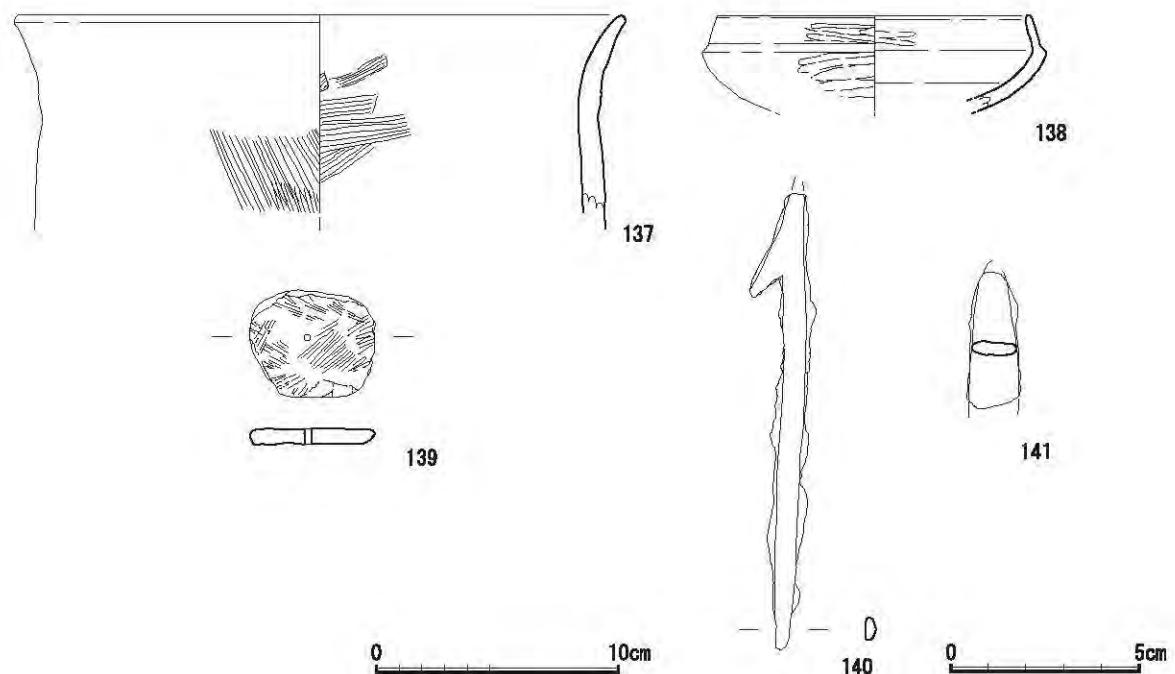
141は、鉄鎌であろうか。先端部と切先部以下を欠く。断面は扁平でノミ状を呈する。現存長3.6cm、現存幅が1.3cm、厚さは0.35cmを測る。



第12図 III-3層出土遺物実測図②(1/3)



第13図 III-3層出土遺物実測図③(1/3)



第14図 III-3層出土遺物実測図④(137・138 1/3)(139~141 1/2)

III-4層(I)

この層からは131点の土師器・須恵器片が出土している。割合は土師器95%、須恵器5%である。

須恵器(第15図 表3)

142は、須恵器高壺の壺部片である。口縁端部を欠くが、受け部のつまみ出しあは小さく、口縁部はやや内傾する。脚部にかけて右回転の回転ヘラ削りで、他を回転ナデで仕上げる。口径は復元すれば約10cm前後に収まる。焼成は良好で、色調は明灰褐色を呈する。胎土も1mm以下の砂粒である。また、脚部内面はヘラ削りで仕上げか。

土師器(第15図 表3)

143は、壺口縁部片である。頸部から屈曲し、やや直状に立ち上がる。口縁端部にかけてやや外反する。屈曲部から内面は横方向のヘラ削り、外面は刷毛目で仕上げている。復元口径は12.2cmを測り、焼成も良好である。色調は淡茶黄褐色で、胎土に6mm程の石英を含む。

144・145は、壺口縁部片であろう。おそらく頸部から緩く外反するもので、端部を丸く收める。146は、壺である。口縁端部を欠く。底部は丸底で、やや胴が張る。胴部下半は磨滅しているが、内面は下から上方向へのヘラ削り、外面は刷毛目調整で仕上げる。現存器高は、23.5cmを測り、焼成も良好である。色調は暗茶褐色を呈する。

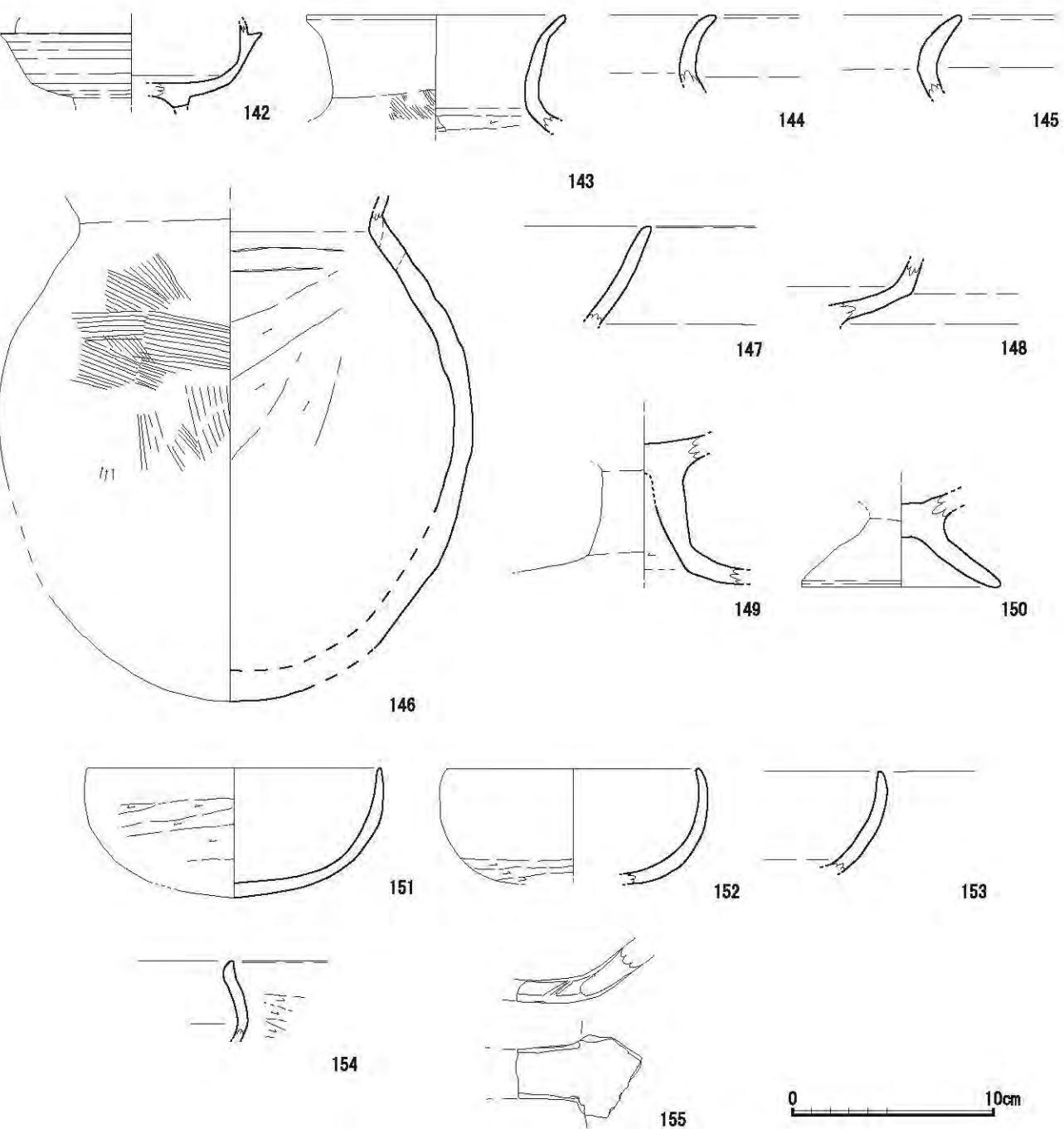
147・148は、高壺口縁部片である。147は、壺の屈曲部より下半を破損している。丁寧なヨコナデで仕上げており、色調は淡茶褐色を呈する。148は壺部の屈曲部である。傾きは任意で設定した。こちらも、丁寧なヨコナデで仕上げる。

149・150は、高壺脚部片である。149は、脚柱部が「ハ」の字状に緩く開き、裾部に向かって水平

に近くなるものであろう。壺部内面は、丁寧なナデ仕上げで、脚部内面は横方向の削り、外面は丁寧なナデで仕上げている。150は、低脚部で「ハ」の字状に開き、裾部で丸く收まる。内面はミガキの痕跡がわずかに残る。他はヨコナデで仕上げている。底径は9.3cm、現存器高は4.3cmを測る。

151～154は、鉢である。151～153は、やや深めの体部から口縁端部にかけて緩く内弯しながら立ち上がり、端部で直立か僅かに内弯する。外面を横方向の削りで仕上げ、他はヨコナデで仕上げる。154は、体部がやや張り、内湾しながら端部に至る。端部はわずかに外反して、摘み上げる。

155は、壺底部片である。底部の形状から、二孔式のものであろう。



第15図 III-4層出土遺物実測図(1/3)

III-5層(j)

この層からは、土師器しか出土しておらず、遺物も45点と少ない。

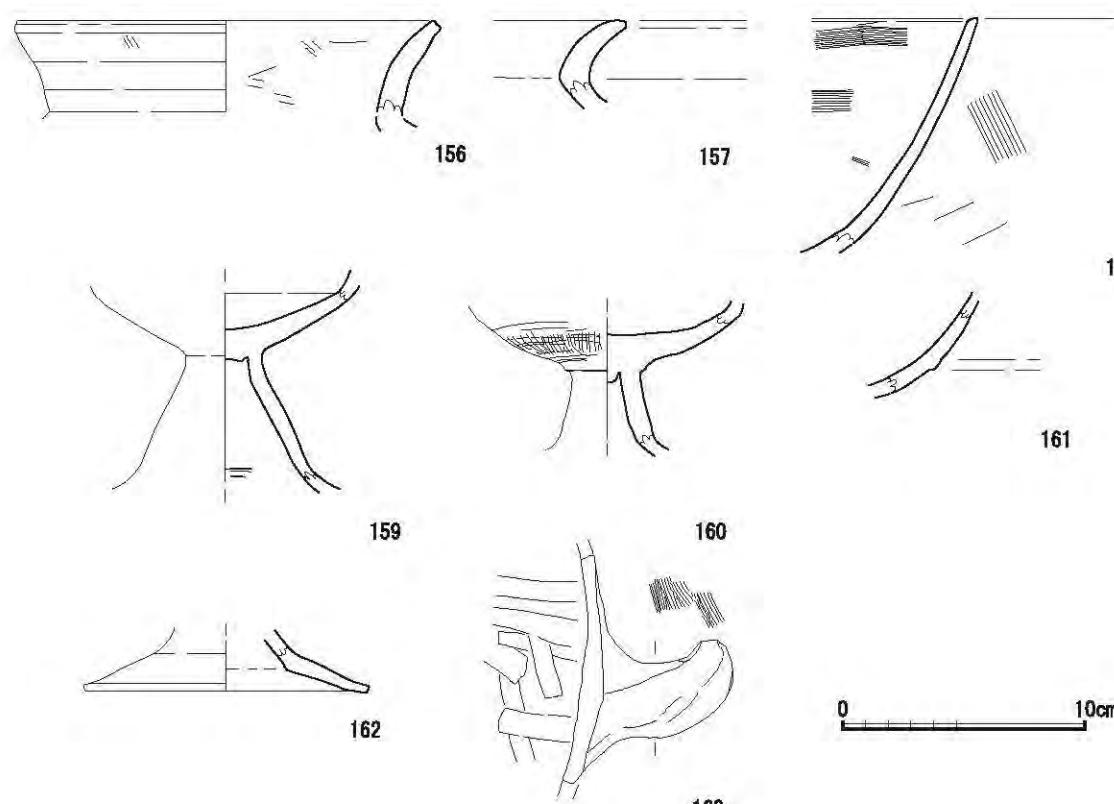
土師器(第16図 表3)

156・157は、甕口縁部片である。156は、口縁端部にかけて緩く外反する。内外面ともナデ仕上げで、一部工具ナデか。157は、頸部から緩く外反し、端部を丸く收める。やや肥厚し内面頸部以下は削りで仕上げている。

158～161は、高坏である。158は、高坏坏部片で、口縁端部に向かってやや内弯しながら立ち上がり、端部を平坦に收める。屈曲部以下を破損しており、内外面とも工具ナデで仕上げる。159・160は、坏部から脚部にかけてで、両者とも屈曲部より上と裾部を破損する。159は、裾部接合面で破損しており、外面はミガキか。脚部内面は、削り後ナデで仕上げる。160は、坏底部にヨコナデ後縦方向のハケ目で仕上げる。161は、坏部の屈曲部である。ややあまい稜が残る。

162は、高坏脚部片である。裾部でやや水平になるタイプである。外面はヨコナデ後ミガキ、内面は屈曲部より上は削りで仕上げる。

163は、甕把手部である。傾きは任意で設定した。内面は削り、把手部より直上は縦方向のハケ目を施す。



第16図 III-5層出土遺物実測図(1/3)

III-6層(k)

この層からは、土師器63点、須恵器2点が出土している。

半島系瓦質土器(第17図 表3)

164は、壺と思われる半島系瓦質土器である。内面は削り、外面はタタキ後丁寧にナデ消しで仕上げている。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。胎土も精良である。

土師器(第17図 表3)

165は、甕である。胴部から頸部にかけて緩く内弯し、口縁端部に短く外反する。後円部はヨコナデで、内面は削り、外面は縦方向のハケ目後部分的にナデで仕上げか。

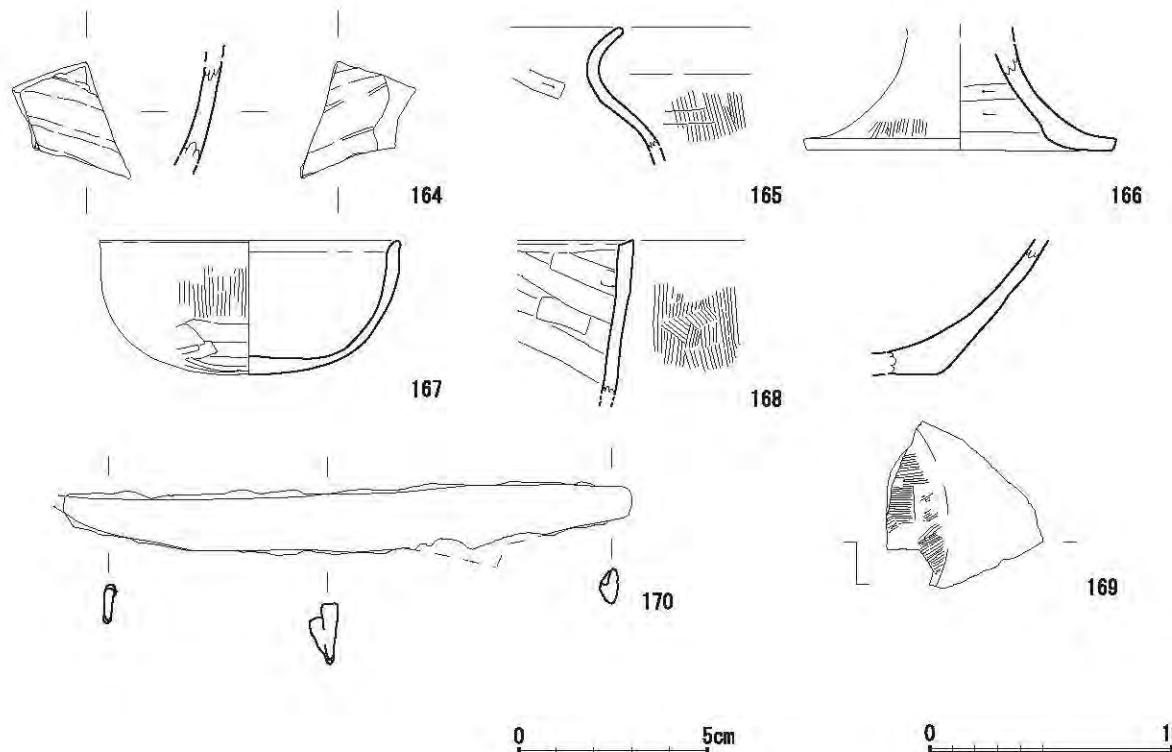
166は、高坏脚部片である。「ハ」の字状に開き、屈曲部でやや肥厚し裾部で平坦に收まる。裾部の外面は、縦方向のハケ目で、内面は横方向の削りで仕上げる。底部径は、12.4cmを測る。焼成も良好で胎土も精良である。

167は、完形の鉢である。底部から緩く立ち上がり、口縁端部で僅かに外反する。内面はヨコナデで、外面はハケ目と底部には横方向のヘラ削り調整で仕上げる。口径は12.0cm、器高5.2cmを測る。焼成は良好で、色調は、淡黄褐色を呈する。胎土も精良である。

168は、甕口縁部片である。やや直状に立ち上がり、端部を平坦に收める。内面は削りで、外面は密な刷毛目で仕上げる。

169は、甕底部片である。孔は一箇所しか確認できず、多孔式であろうか。また、底部をハケ目で仕上げている。

170は、鉄製刀子である。刃部を一部欠く。やや反りが見られ、茎の先端は丸味を帯びる。現存長15.0cm、現存幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。



第17図 III-6層出土遺物実測図(164～169 1/3)(170 1/2)

昭和46年度調査 表探資料

ここでは、昭和46年度調査時に、トレンチの表層及び調査地周辺から出土した遺物を一括で報告する。

須恵器(第18図 表3)

171～173は、壺蓋である。171は、天井部から口縁端部の境に、明瞭な稜を持ち一条の沈線が見られる。口縁端部は、やや丸みを帯びた段を有する。天井部は左回りの回転ヘラ削り、他は回転ナデで仕上げる。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。胎土も精良である。172は、やや扁平で天井から口縁部に緩い稜を残す。口縁端部には、僅かに凹みのある段を有する。天井部は回転ヘラ削り、他は回転ナデで仕上げる。173は、やや丸みを帯び、天井部と口縁部の境に稜や沈線はない。口縁端部に僅かに段を残す。

174・175は、壺身口縁部片である。174は、受け部が小さくやや水平に引出し、口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。端部には緩い段を有する。外面は受け部直下から、左回りの回転ヘラ削り、その他は回転ナデで仕上げる。復元口径は、12.0cm、現存器高は4.1cmを測る。焼成は良好で、色調は暗灰褐色、胎土は細砂粒である。175は、受け部を短く水平に引出し、口縁部は、やや長く内傾しながら立ち上がる。現存器高は4.2cmで、回転ナデで仕上げる。

176は、壺口縁部片である。口縁端部に向かって外反しながら立ち上がる。端部は凸帯を持ち屈曲する。凸部直下には、櫛描波状文を施し、他は回転ナデで仕上げている。また、頸部にかけて緩い2段の凸帯と二条の沈線を有する。現存器高は6.1cmで、焼成も良好である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土は細砂粒である。

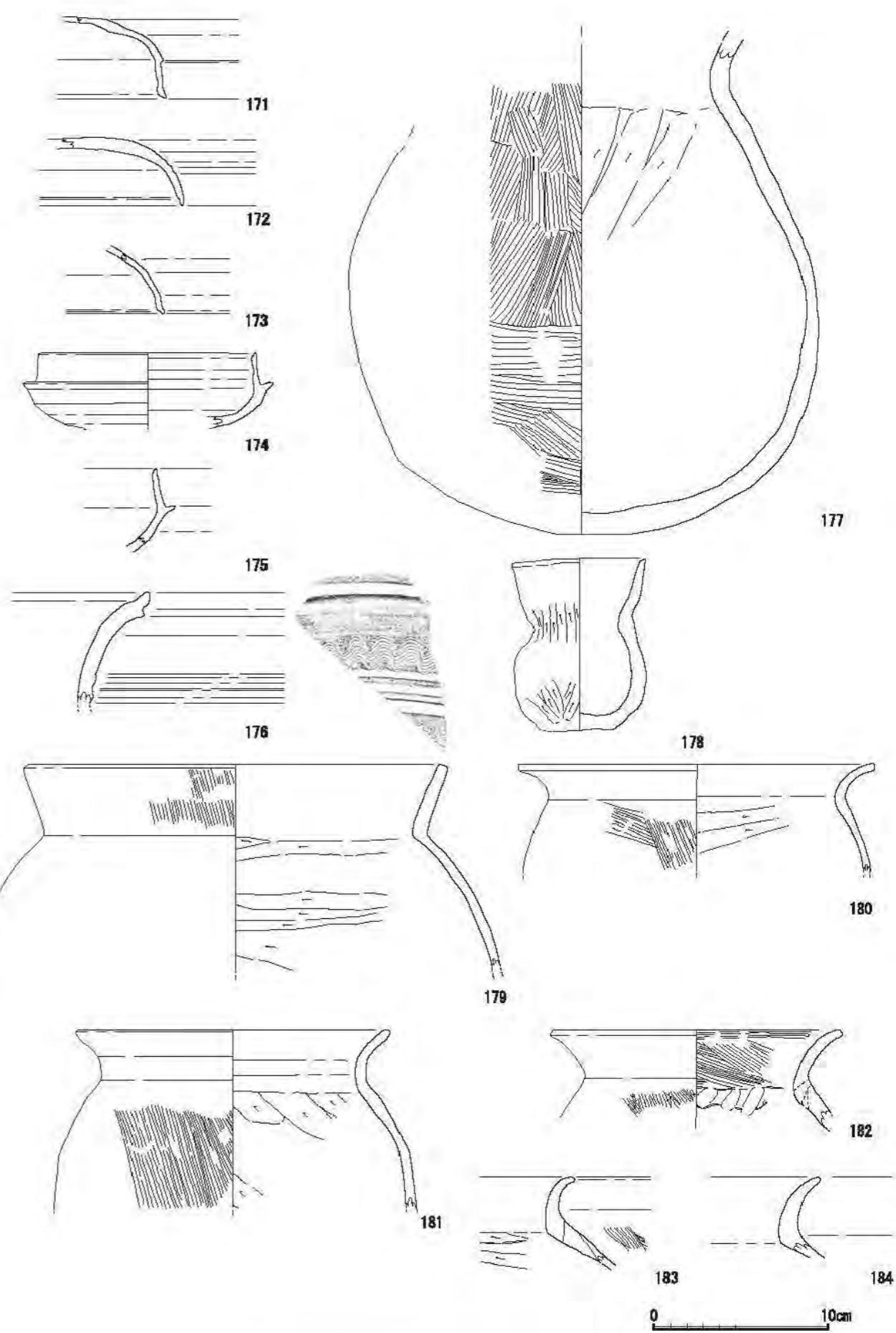
土師器(第18～20図 表3)

177は、壺である。口縁部は欠く。頸部は緩く締まり、内面に稜を持たない。胴部は底部にかけて張り、やや歪な長胴を呈する。内面は、下から上方向へのヘラ削りで、外面はハケ目、口縁部に関しては、ヨコナデで仕上げる。現存器高は27.6cmを測り、焼成は良好である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土は砂粒で石英を含む。

178は、小型丸底壺である。やや胴部が張り、頸部で緩く締まる。口縁部に向かってやや内弯しながら立ち上る。口縁部はナデで、頸部以下は削り後ナデで仕上げている。口径は7.4cm、器高は9.5cmを測る。焼成は良好であるが、胴部が焼成の際に一部破損したものとみられる。色調は、淡褐色を呈し、胎土は砂粒、雲母を微量に含む。

179～185は、壺口縁部片である。179は、頸部内面に稜を持ち、口縁端部にかけて外傾しながら立ち上がり、端部を平坦に收める。内面は、横方向のヘラ削り、口縁部外面は縦方向のハケ目、その他はヨコナデで仕上げる。復元口径は23.4cmを測る。180は、頸部からやや外反して、口縁端部に至る。端部はやや平坦に收める。181は、やや口縁部が立ち上がり、端部を丸く收める。182～185も、やや長同化するタイプの壺であろう。内面はヘラ削り、外面は刷毛目で仕上げる。182のように口縁部内面にハケ目を施すものも見られる。

186・187は、高壺壺部片である。186は、屈曲部に稜を持ち、口縁端部にかけてやや内弯気味に外傾斜し、端部を直状に引き出す。内面は磨滅しているが、その他は丁寧なナデで仕上げる。口径は16.3cm、現存器高は7.8cmを測る。焼成は良好で、色調は暗灰褐色を呈する。187は、屈曲部に明瞭な段を持つ、口縁部は外傾しながら直線状に立ち上がり、端部をやや丸く收める。壺底部はハ



第18図 昭和46年度調査 表探遺物実測図①(1/3)

ケ目で、その他はヨコナデで仕上げる。口径は14.8cm、現存器高は、10.2cmを測る。

188~191は、高坏脚部片である。脚部は、「ハ」の字状に開き裾部にかけて水平になる。また、188のように脚部上を中実になるものと、189~191のようにならないものがある。内面は屈曲部から上は削りであろうか。

192・193は、鉢である。192は、小型の鉢である。やや肥厚し、半球状の体部を呈する。口縁端部は、僅かに外に引き出し、外面はミガキで仕上げている。復元口径は10.6cmを測る。193は、底部から緩く内弯しながら立ち上がり、口縁端部で僅かに「く」の字に屈曲する。内面の調整は不明瞭であるが、外面は横方向の削りで仕上げる。復元口径は18.0cm、現存器高は6.4cmを測る。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

194は、ほぼ完形の壺である。やや内弯しながら、端部を短く摘み上げる。外面は横方向のミガキで、内面は放射状にミガキを施し、暗文状に仕上げている。口径は12.8cm、器高は5.7cmを測る。焼成は良好で、色調は淡黄褐色を呈する。胎土は、砂粒である。

195は、把手付壺である。胴部球状に張り、胴部上半に把手が付く。口縁部は、屈曲部から直状に立ち上がり端部を平坦に収める。底部は丸底である。また、やや欠損しているが片口注口を持つ。口縁部は、縦方向のハケ目が密に入り、胴部は工具ナデ痕で仕上げか。内面は削りである。口径は、20.0cm、器高は29.8cmを測る。焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。

200は、195とやや形状が類似する、瓶胴部片であろう。口縁部と底部を欠く。胴部は、やや球状であり内面は横方向の削り、外面はヨコナデで仕上げる。把手部先端に、ススが付着する。201も、瓶胴部片で、胴部は球状に張らず、口縁部にかけて直状に延びるタイプのものであろう。内面は、下から上方向への削り、外面は基本ナデで仕上げるが、把手部直上に僅かにハケ目の痕跡が残る。

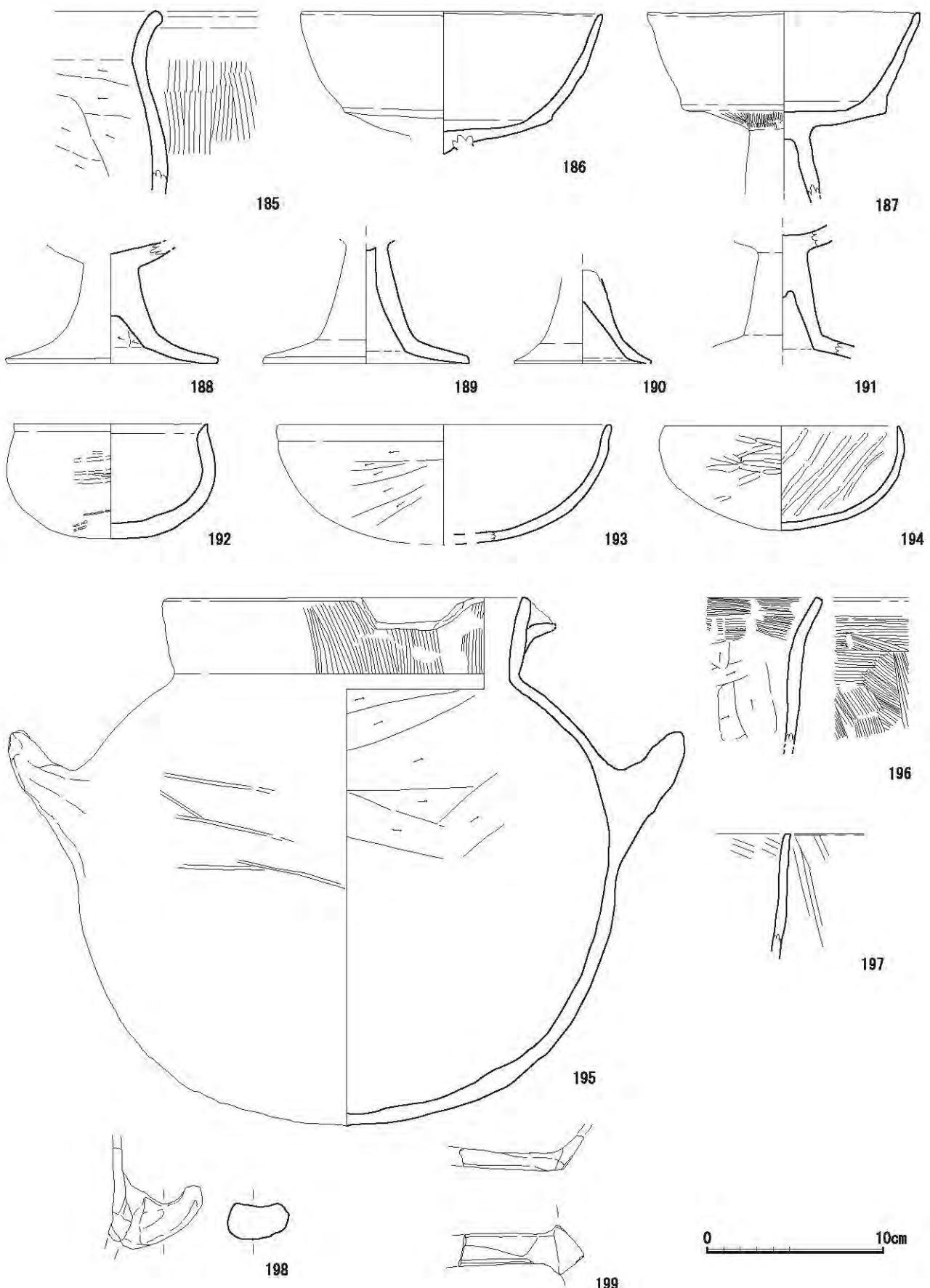
196・197は、瓶口縁部片である。196は、端部かけて僅かに外反し、端部を平坦に収める。外面と口縁部内面は密なハケ目で仕上げ、その他はヘラ削りで仕上げている。197は、あまり外反せず、やや粗いハケ目で仕上げている。

198は、瓶把手部片である。傾きは任意で設定した。断面がやや扁平である。199は、瓶底部片である。形状から二孔式のものであろう。

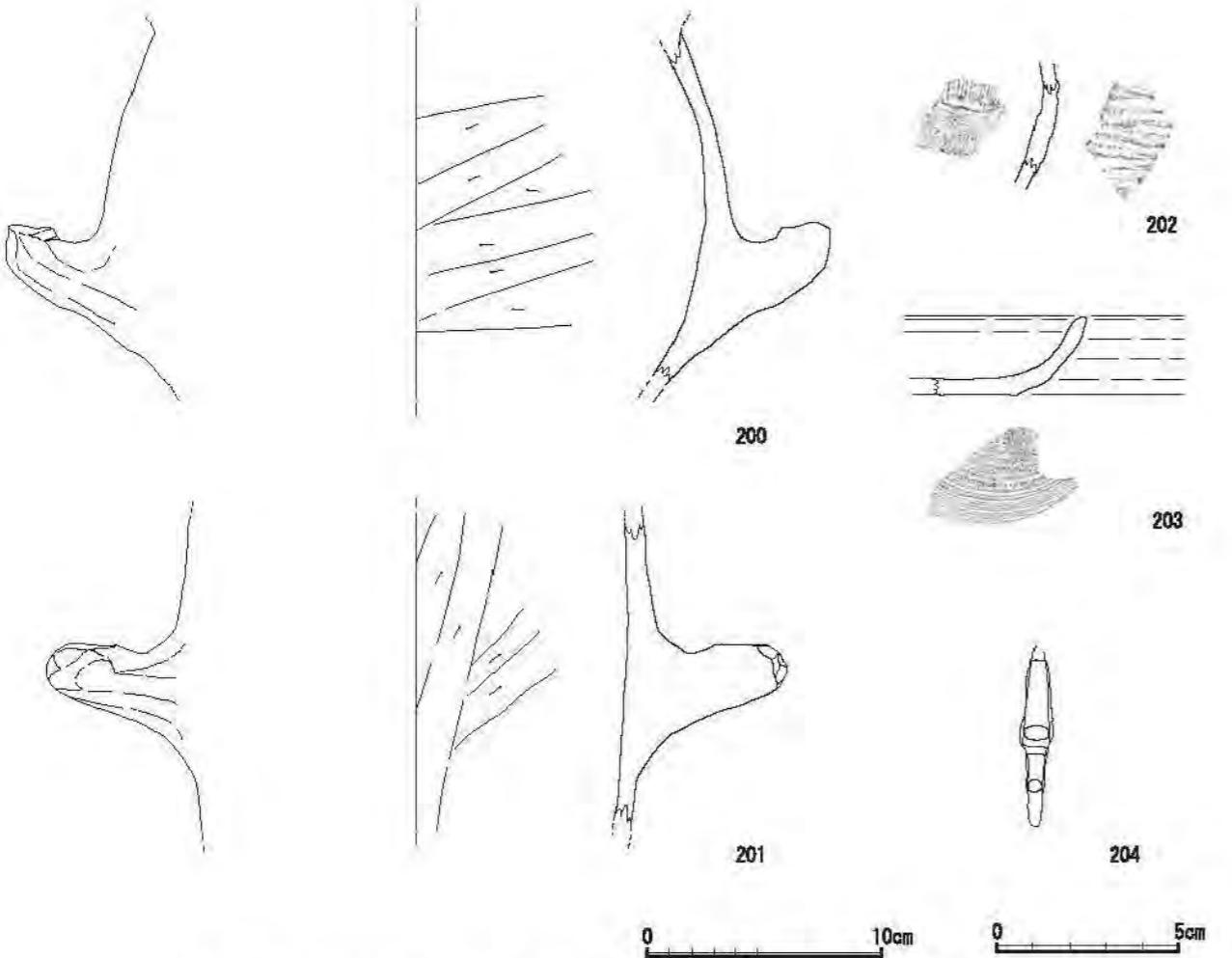
202は、製塩土器であろう。内面を刷毛目か木材の工具でなで、外面は強く叩き占めている。色調は、淡黄褐色を呈す。

203は、中世土器皿である。底部は糸切り、その他はナデで仕上げる。口縁端部に向かって内弯しながら立ち上がり、端部は丸く收まる。現存器高は3.2cmで、色調は黄褐色を呈す。

204は、鉄鎌である。先端部を欠く。刃部はやや扁平で、現存長4.5cm、現存幅0.7cm、最大厚0.4cmを測る。



第19図 昭和46年度調査 表採遺物実測図②(1/3)



第20図 昭和46年度調査 表探遺物実測図③(200~203 1/3)(204 1/2)

昭和46年度調査以後表探資料

ここでは、昭和46年度の調査以後、浜宮社周辺で表探された遺物を一括して報告する。

弥生土器(第21図 表3)

205・206は、壺口縁部片である。口縁端部に刻目を施し、やや張った胸部から直状に立ち上がり、口縁端部で短く外反する。復元口径は、205が23.2cm、206が25.6cmを測る。

207は、壺口縁部片である。頸部があまりしまらず、口縁部がやや強めに外反する広口タイプのものであろうか。復元口径は、22.6cmを測る。208は、壺の頸部から胴部にかけての破片で、頸部直下に刻目を施す凸帯を持つ。内面に指頭圧痕が残り、ハケ目とナデで仕上げる。209は、壺の底部であろう。平底で、底径は7.3cmを測る。内面はナデで、外面は密な横方向のミガキで仕上げる。

210は、壺底部片であろう。平底で、底径8.4cmを測る。内外面ともに剥離が著しく、調整は不明瞭である。

211・212は、高壺の脚柱部片である。須玖式以降にみられる、脚部が長大化するタイプであろう。

須恵器(第21~23図 表3)

213~218は、壺蓋である。口縁端部に僅かに段を残すものや、天井部から口縁端部にかけて緩い沈線を残すもののがみられる。全体的にやや丸みを帯び、復元口径も12~16cm程に収まる。また、216・217にはヘラ記号が残る。

219~232は、壺身である。219のように、やや口径が小さく体部が深くなるものと、225・226のようにやや口径が大きく扁平になるものがみられる。全体的に受け部の摘み出しは小さく、口縁端部のたちあがりは、内傾しながらやや長く延び、端部を丸く收める。220・222の底部には、ヘラ記号が残る。また、232は時期が下る壺の底部であろうか。断面逆三角形の高台が付く。

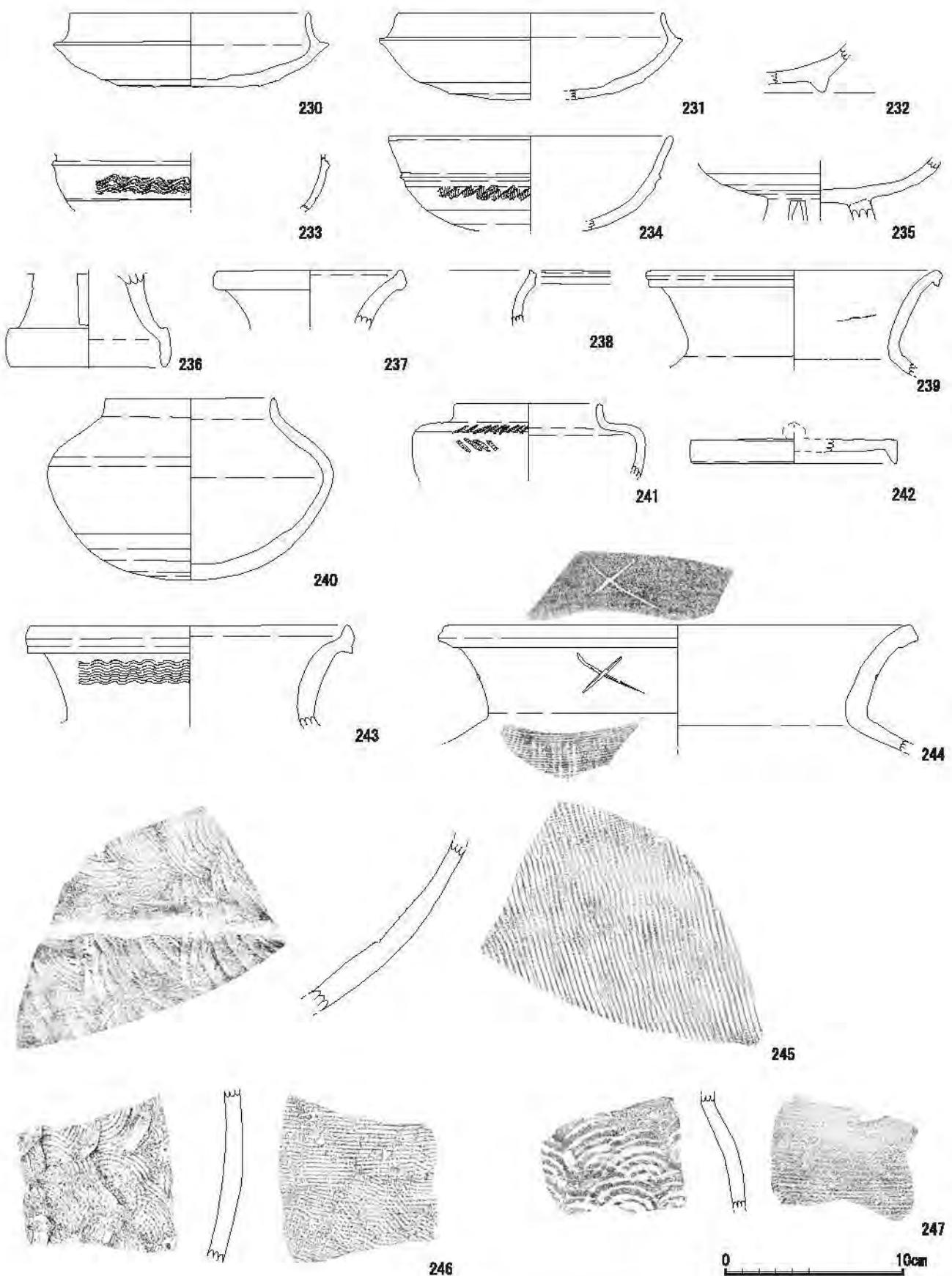
233・234は高壺口縁部片である。233は、体部に波状文を施し、棱より上を欠損している。234も同様の器形と思われるが、体部にはやや粗い櫛描波状文を施している。また、明瞭な棱を残し、口縁端部に向かってやや外傾しながら立ち上がり、端部を丸く收める。口径は15.4cmを測り、焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

235は、高壺底部から脚部にかけてである。低脚の三方向透かしを施すタイプであろう。236も同様の低脚のものである。また、237・238は、それぞれ平瓶口縁部片、堤瓶口縁部片であろうか。

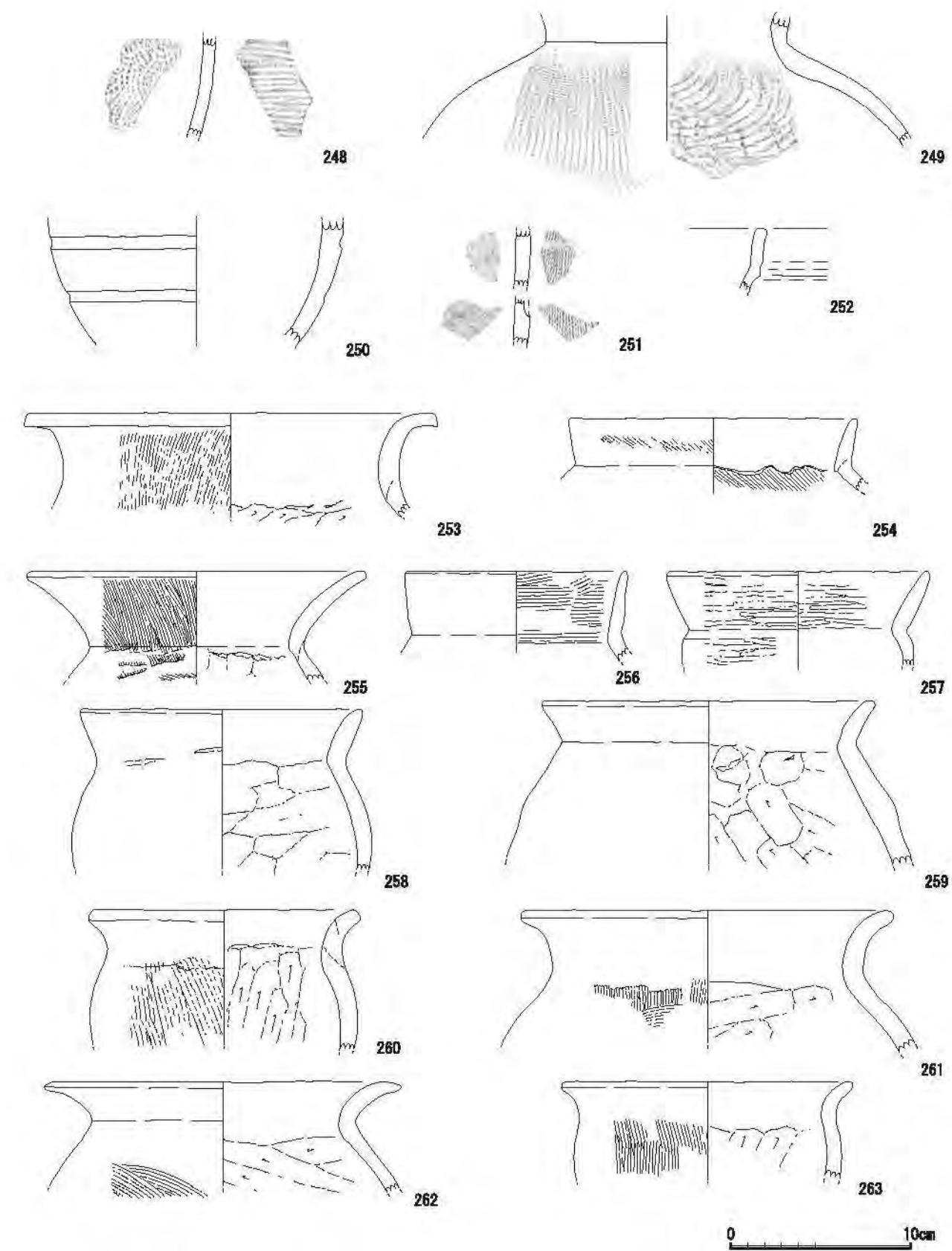
239は、壺口縁部片であろう。頸部がやや強く絞まり、端部にかけて外反しながら立ち上がり、端部に凸帯を有する。240・241は、短頸壺である。240は、底部から胴部にかけて強く張り、頸部にかけてやや内弯し、頸部から端部にかけて直状に短く立ち上がる。口径は9.3cm、器高9.9cmを測る。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。241は、やや胴肩部が強く張り、頸部にかけてやや水平にのび、口縁端部にかけて短く立ち上がる。胴肩部に櫛目刺突を施す。口径は7.8cmを測る。242は、摘みの付くタイプの短頸壺の蓋であろうか。天井部に一条の沈線が巡る。口径は13.2cmを測る。

243・244は、壺口縁部片である。243は、頸部以下を欠く。口縁端部にかけて外反し、端部に凸帯を有する。端部直下に櫛描波状文を施す。244は、頸部で強く屈曲し、外反しながら口縁端部に至る。端部は平坦に收め、凸帯を有する。口縁部に「X」状のヘラ記号を残す。口縁部は回転ナデ、頸部以下内面は同心円文のタタキ、外面はカキ目で仕上げる。復元口径は15.0cmを測り、色調は青灰色を呈する。

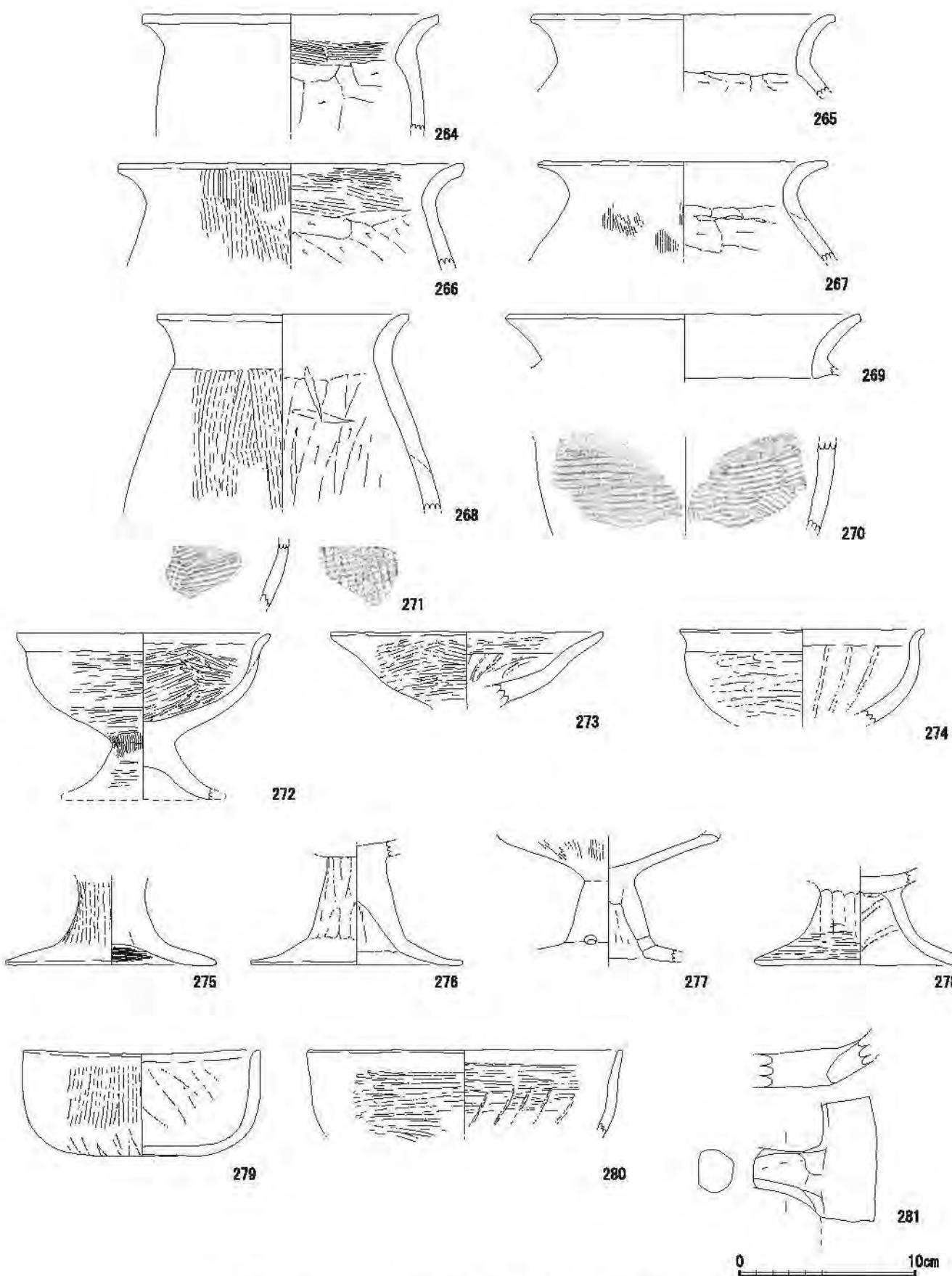
245~249は、壺胴部片である。内面は、同心当て具痕が残り、外面は細かい格子タタキやカキ目で仕上げる。また、248は、土師質焼成の壺で、外面は簾状タタキで仕上げている。



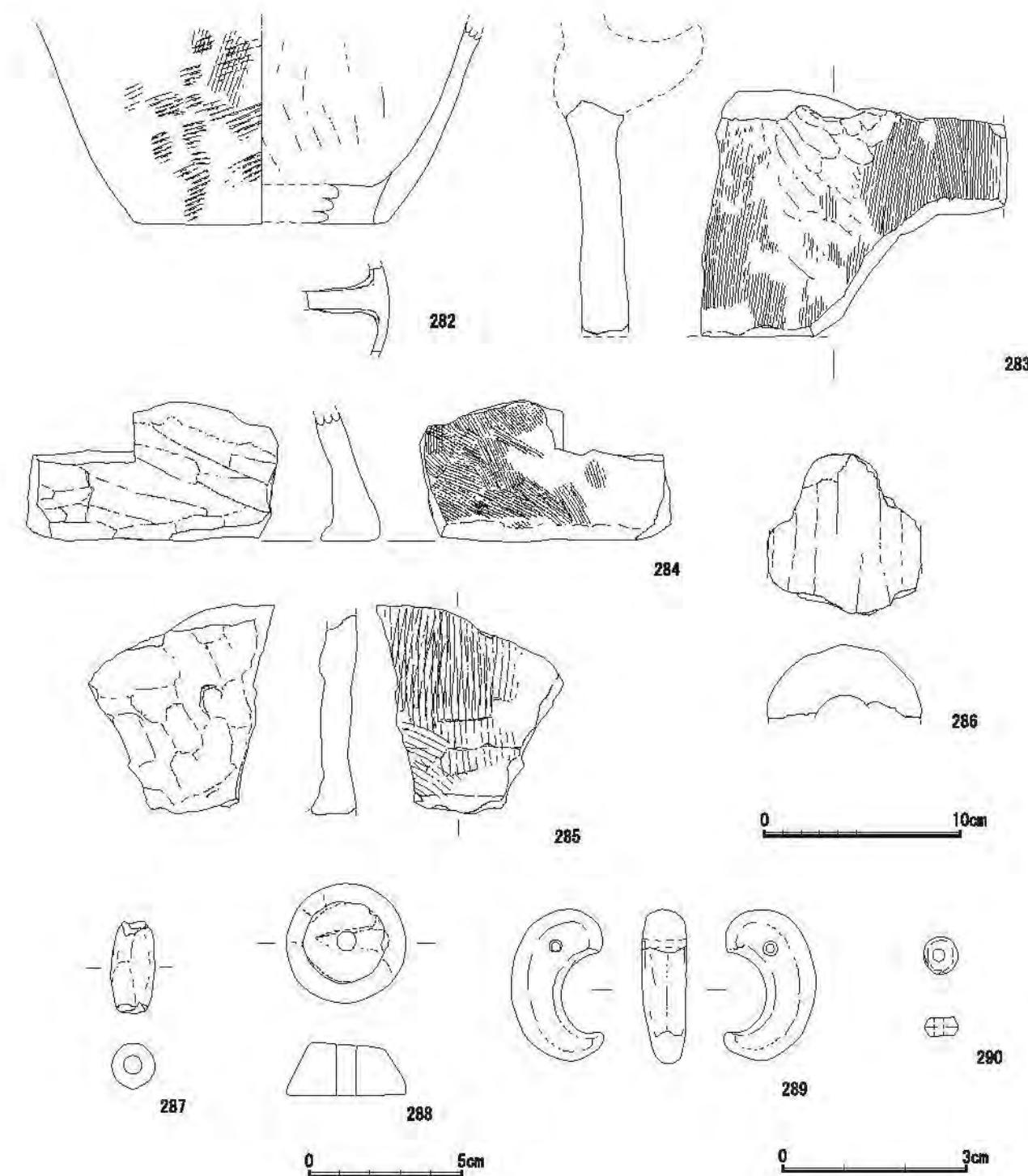
第22図 昭和46年度調査以後 表採遺物実測図②(1/3)



第23図 昭和46年度調査以後 表採遺物実測図③(1/3)



第24図 昭和46年度調査以後 表採遺物実測図④(1/3)



第25図 昭和46年度調査以後 表採遺物実測図⑤(282~286 1/3)(287·288 1/2)(289·290 1/1)

第3章 浜宮貝塚の骨角器・貝製品と自然遺物

1. 骨角器

浜宮貝塚から出土した骨角器、骨角器製作にかかる資料には柄状骨角製品3点、笠状骨製品1点、骨鏃2点、垂飾品1点、牙玉1点、その他1点、加工痕ある鹿角3点の計13点がある。

柄状骨角製品(図版13 第26図291~293)

柄状骨角製品は3点があり、完形品および全形を知りうるもの各1点、破片1点である。

291は鹿角製の刀子の柄である。一本造りで完形品である。鹿角の分枝に近い部分を利用するため、柄頭は緩やかに反り返り、頭部に向ってやや肥厚する。全体に良く研磨されて製作されているが、握り部が全体に磨滅している。柄の棟部側と刃部側に軸に直交したくぼみが平行して認められるので、柄部には紐が巻かれていたとみられる。刀子は打ち込み式で刀身の一部まで打ち込まれている。打ち込み部内面には鉄鏽が残っている。長さ12.0cm、幅2cm前後、厚さ1.6~2.0cmである。293は同様の鹿角製品で利用部位も同じである。柄頭部を残す破片であるが、全形は1と同様と考えられる。前者に比較して断面形は丸みを持つ。全体に良く研磨されている。現存長5.2cm、幅2.0cm、厚さ1.9cm、292は組合せ式の刀子の柄である。鹿角の第1分枝部分を素材としている。3点出土した。うち2点が接合、柄の左側部分の全形がほぼ残存し、他の1点は右側の柄頭が残っているので全体の復元ができる。両端部は幅1.5cmの帯状に削り出され、柄頭の帯状部分はわずかであるが中くぼみ状になり装飾性を持たせている。両端部の帯状部の間は中央部がやや膨らみをもつているが、これは帯状部を削りだす時、その両端のみが削られ、結果的に中央部が膨らんだものである。握り部の中央部にわずかに細かい削り痕がみられるが、全体に良く研磨されている。また、握り部には長軸に直交して幅2mmの平行した凹線が全体に観察できるので紐が巻かれていたことが分かる。内側の接合部には斜位の製作痕が認められるが、全体に平坦に仕上げ、茎部は形状に合わせてくぼんでいる。茎の先端部は柄頭端から2.5cmのところまで達している。茎部分には鏽が付着している。長さ11.0cm、幅は柄尻で2.1cm、柄頭に向かって徐々に大きくなり柄頭端部で2.6cmを測る。厚さは接合した状態で1.7cm、断面形は長楕円形をなす。挟み込まれた刀子は棟の厚さ0.3cm、幅2.3cmと考えられる。

鞘状骨角製品(図版13 第27図294)

鹿角を利用した鞘状の製品である。全体に良く研磨されている。内面の骨髄の部分を取り除き、2個接合して鞘とした製品と考えられる。鞘口と考えられる切断面は丁寧に研磨されている。現存長8.7cm、現存幅2.2cmである。

骨鏃(図版14 第27図295・296)

骨鏃と考えられるものが2点ある。

295は長身の鏃で先端部と茎の一部を欠損する。側辺に研磨を加えて形を整え、表裏面にわずかに研磨を加えている。先端部は丸みをもって尖らせている。先端部周辺は磨滅し、使い減りがみられるので、元来はもう少し長かったと考えられる。茎の断面は楕円形をなす。現存長5.4cm、幅0.9cm、厚さ0.5cmである。296は細身の長身の鏃である。鏃身と茎の境はやや不明瞭、鏃の先端部は鋭く尖り、やや薄くなる。身の片面には不明瞭ながら鏽が入るが、片面は平坦に仕上げている。先端部

から0.8cmから茎部分までの2cmに細かい長軸に直交した平行線が認められ、糸が巻かれていたとみられる。鎌であるか疑問であるが、何であるかは不明。長さ4.7cm、幅0.6cm、厚さ0.2~0.3cmを測る。

装身具(図版13 第27図297・298)

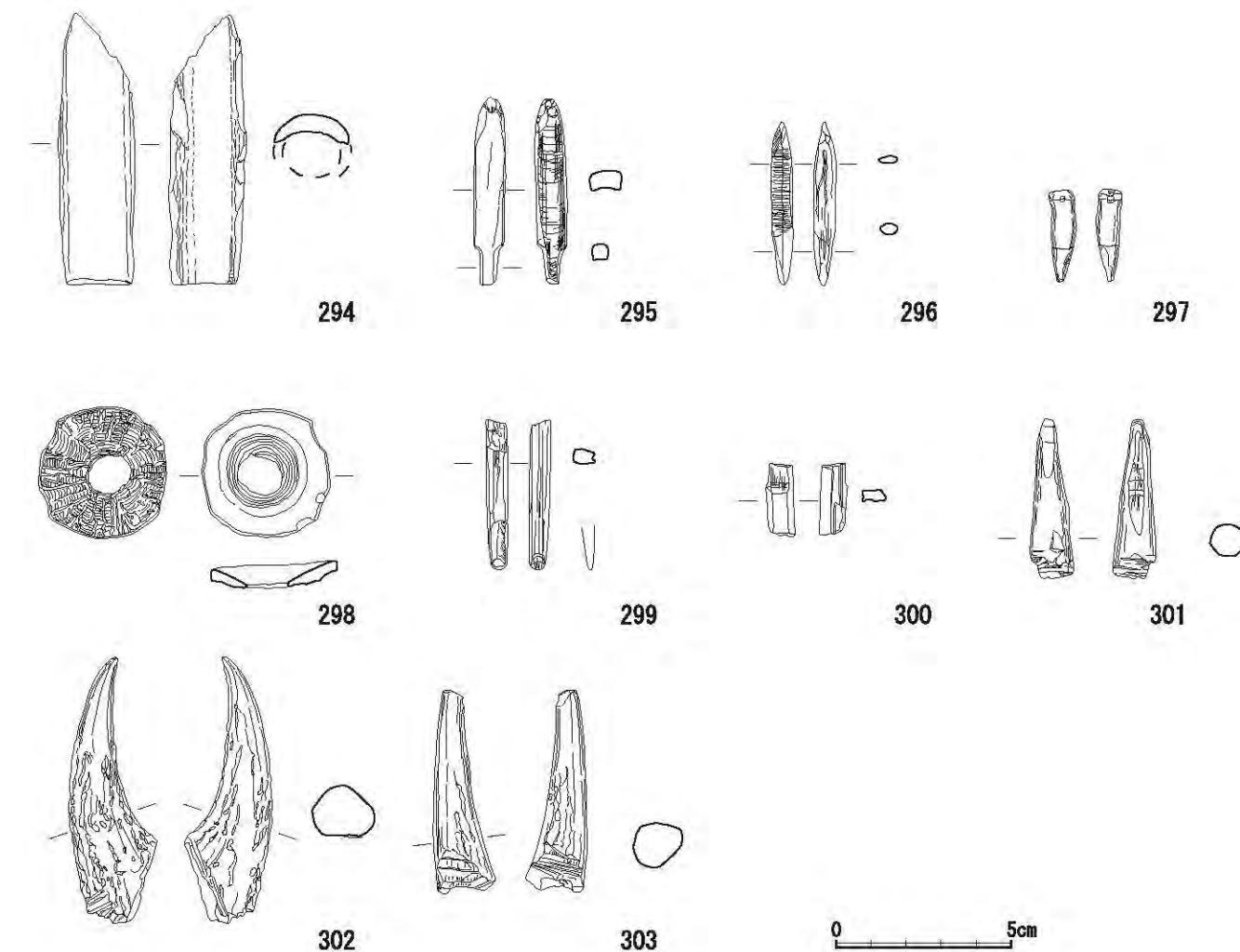
2点がある。297はイルカの歯を素材としている。歯根部を研磨し平坦面を作り出している。平坦面には中央部に径2mmの孔が長軸に平行して穿たれ、横からもこの孔に交差するように片側から孔が穿たれている。穿孔側の径は2mm、反対側は1.5mmである。側面の孔利用し、をめぐるよう歯根部の境の細線がめぐる。組み合わせて装身具等を製作したと考えられる。298はサメ類の脊椎骨(径3.7cmの不整円形)の中央部に径1.15cmの不整円形の孔を穿っている。同様に組み合わせて使用されたものであろう。

その他の骨製品(図版14 第27図299・300)

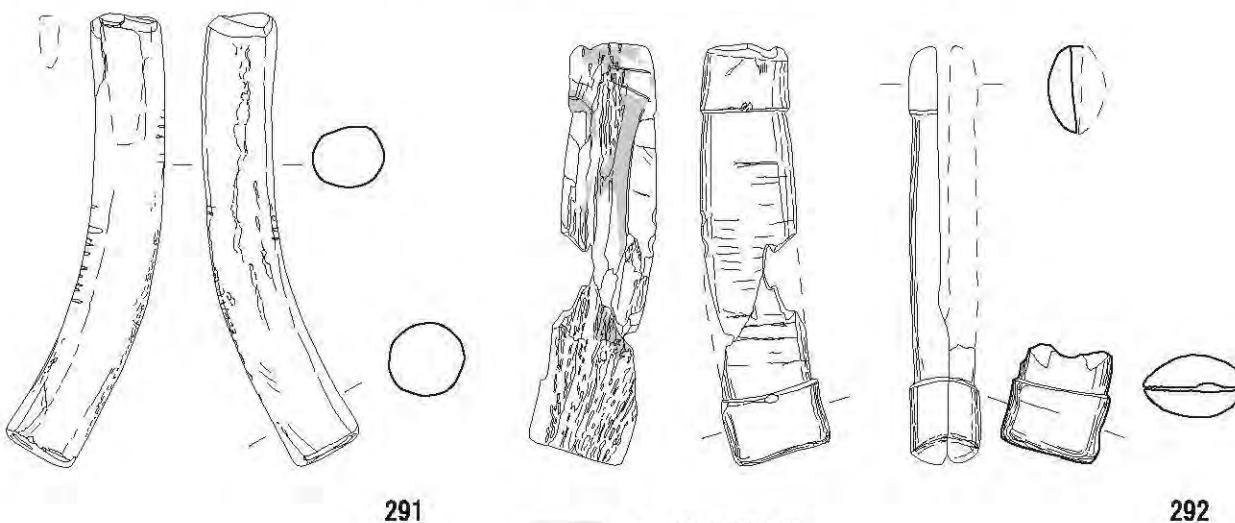
棒状の製品と細かい扁平な製品各1点がある。299は棒状の製品。半折して全形は不明。骨を素材としている。全体に良く研磨されている。先端部は表裏から削られ薄くなるが折れている。折れた面も含めて磨滅している。笠状製品か。現存長4.3cm、幅0.6cm、厚さ0.1~0.5cm。300は全体に良く研磨された扁平な製品であるが、何であるかは不明。先端部に抉り状の削り痕がみられる。途中で折れている。現存長2.1cm、現存幅0.8cm、厚さ0.3cm。

加工痕ある鹿角(図版14 第27図301~303)

301~303は鹿角の先端部、切り落とした資料である。301は相対する2面に削りの加工痕を残している。未成品の可能性があるが、何を製作しようとしたかは不明。長さ4.6cm。



第27図 骨角器(1/2)



第26図 柄状骨角製品(1/2)

2. 貝製品

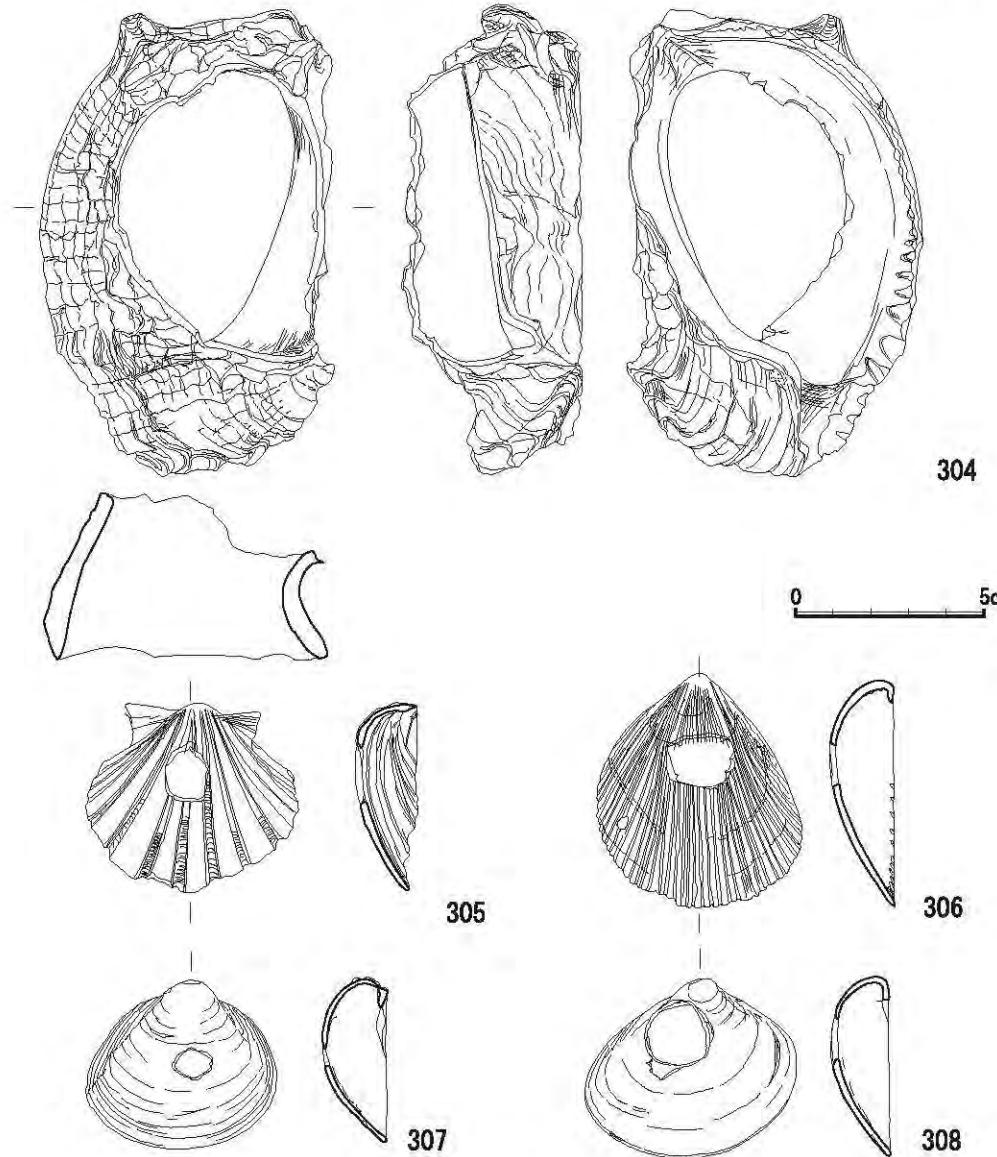
貝製品にはアカニシを素材とした貝輪未成品と二枚貝貝類の殻の中央部に孔を穿った製品、あるいは各頂部に研磨を加えた資料がある。

貝輪未成品(図版12 第28図304)

アカニシを素材とした貝輪未成品である。殻口を取り込み、外形を整えているが、未だ研磨は加えられていない。殻軸部を取り込んでいるが、半截してうまく取り外している。長径12.4cm、短径7.8cm、厚さ4.5cmを測る。

有孔貝製品(図版12 第28図305～308)

305～308は貝殻の中央部に孔を穿ったものであるが、何のための孔かは不明。孔はいずれも内側からの敲打によって穿たれている。垂れ飾りのための孔か、貝錘のための孔か、種々考えられるが判断できない。305はイタヤガイの左殻製、306はザルガイの左殻製、307はシオフキの右殻製、308はハマグリの右殻製、それぞれの色彩は異なっている。似通っているのは大きさのみである。



第28図 貝製品(1/2)

3. 自然遺物

自然遺物には哺乳類・鳥類・爬虫類・魚類・貝類等がある。これらの自然遺物は生産活動や食生活(食料)や魚類・貝類捕獲地を具体的に追及するため有効である。また、魚類や貝類は遺跡周辺の古環境を復原するために重要な遺物である。

哺乳類

1. ニホンジカ *Cervus nippon* TEMMINCK

肩甲骨、右1点、鹿角2点、基節骨1、

2. イヌ *Canis LINNAEUS*

左上顎犬歯1点

3. クジラ類

イルカの歯1点、その他

4. ドブネズミ *Rattus norvegicus* BERKNHOUT

下顎骨右1、寛骨右1、大腿骨右1、左2、脛骨右1、左1、頭骨左1、

鳥類

1. アホウドリ *Diomedea albatrus*

主根中手骨右2点、1点に解体痕、

2. ウミウ *Pelagicorax capillatus*

鳥口骨右1点、足根中足骨右1、

3. 不明

1点

爬虫類

1. ウミガメ類

魚類 *Galeocerdo cuvier*

1. イタチザメ *Squalus mitsukurii* JORDAN & FOWLER

Dasyatidae

- Lateolabrax japonicus* (CUVIER & VALENCIENNES)

2. ツノザメ科 *Epinephelus fario* (THUNBERG)

Mylio macrocephalus (BASILEWSKY)

3. アカエイ科 *Chrysophrys major* TEMMINCK & SCHLEGEL

Amanses modestus (GÜNTHER)

4. スズキ *Tetraodontidae*

Scorpaenidae

5. ハタ科 *Platycephalus indicus* (LINNÉ)

6. クロダイ

7. マダイ

8. ウマズラハギ

9. マフグ科

10. カサゴ科

11. コチ

12. その他

浜宮貝塚から検出した魚種はイタチザメ・ツノザメ科・アカエイ科・スズキ・ハタ科・クロダイ・マダイ・ウマズラハギ・マフグ科・カサゴ科・コチ・その他数種の魚種が確認できた。魚類の各層における出現状況と魚骨の部位は表1に示した。

表1 各層出土魚類及び部位

魚種	部位	層											
		IIIa	IIIb	IIIc	IIId	IIIe	IIIf	IIIg	IIIh	IIIi	IIIj	IIIk	層不明
		l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r
マダイ	前頭骨					3	1	2		1	2	1	2
	上後頭骨										2		1
	前上頸骨				1		1		1	2	2	1	
	主上頸骨		1	3					1	1	1	3	
	歯骨	1	1	2					4	4	1		1 1
	角骨	1	3								1		
	口蓋骨	3	2										
	方骨	3	1								1		
	舌頸骨								1	1			
	前鰓蓋骨			2									
クロダイ	主上頸骨								1				
	前上頸骨					1					1		
	歯骨							1					
ハタ科	前上頸骨				1								
	主上頸骨							1					
	歯骨					1							
	前上頸骨			1	1				2				
	主上頸骨						1						
	角骨	1			1	2							
	口蓋骨				1								
	方骨	1	2					1					
	舌頸骨			1				1					
	前鰓蓋骨					1		1					
スズキ	擬鎖骨						1	1	1				
	前上頸骨			1									
	歯骨							1					
フグ類	角骨										1		
	前上頸骨		2			1	2	2					1
	歯骨	1						1	1			1	
ウマヅラハギ	口蓋骨							1	1				
	背鰭第1棘						1	3					
カサゴ科	歯骨					2							
	前鰓蓋骨		1										
コチ	前鰓蓋骨		1										
	椎骨			2	1			9	4	2			
サメ類	ツザメ棘							1					
	椎骨												
エイ類	椎骨						1						
	方骨								1				
不明種	前鰓蓋骨							2	1				
	角舌骨							1	1				1
	擬鎖骨									2			
	椎骨	1	2	2	1		4	2					4
その他		40	9	7	3	15	4	13	8				

検出した魚類はいずれも大型で、小型の魚種は極めて少ない。これは発掘調査における魚骨の採集方法によるものであろう。発掘調査時には目についた骨のみを採集し、篩や水洗選別を行っていないことで、小さな魚骨は遺漏したと考えられる。

各層における魚種の出土状況を見していく。

マダイはIII-b層、出土数25点、最小個体数3、III-c層、出土数7点、最小個体数3、III-d層、出土数3点、最小個体数2、III-e層、出土数1点、最小個体数1、III-f層、出土数2点、最小個体数1、III-g層、出土数4点、最小個体数1、III-h層、出土数25点、最小個体数4、III-i層、出土数10点、最小個体数2、III-k層、出土数1点、最小個体数1、層位不明、出土数3点、最小個体数1、計、出土数81点、最小個体数19である。

クロダイはIII-d層、出土数1点、最小個体数1、III-f層、出土数1点、最小個体数1、III-g層、出土数1点、最小個体数1、計、出土数3点、最小個体数3である。

ハタ科はIII-a層、出土数1点、最小個体数1、III-b層、出土数3点、最小個体数2、III-d層、出土数4点、最小個体数1、III-e層、出土数1点、最小個体数1、III-f層、出土数5点、最小個体数2、III-g層、出土数9点、最小個体数2、計、出土数23、最小個体数9である。

スズキはIII-d層、出土数1点、最小個体数1、III-g層、出土数1点、最小個体数1、III-k層、出土数1点、最小個体数1、計、出土数3点、最小個体数3である。

フグ類はIII-b層、出土数1点、最小個体数1、III-c層、出土数2点、最小個体数2、III-e層、出土数1点、最小個体数1、III-g層、出土数8点、最小個体数2、III-j層、出土数1点、最小個体数1、層位不明、出土数1点、最小個体数1、計、出土数14点、最小個体数8である。

ウマヅラハギはIII-f層、出土数1点、最小個体数1、III-g層、出土数3点、最小個体数3、計、出土数4点、最小個体数4である。

カサゴ科はIII-b層、出土数1点、最小個体数1点、III-e層、出土数2点、最小個体数2、計、出土数3点、最小個体数3である。

コチはIII-b層、出土数1点、最小個体数1である。

サメ類・エイ類については個体数が算出できないので省略する。上記の魚種の合計は出土数132点、最小個体数50となる。これから全体の魚種の構成比をみると次のようになる。

なお、最初に個体数における構成比、0内に出土数の構成比を示した。

マダイ、38.00%(61.36%)クロダイ、6.00%(2.27%)ハタ科、18.00%(17.42%)スズキ、6.00%(2.27%)フグ類、16.00%(10.61%)ウマヅラハギ、8.00%(3.03%)カサゴ科、6.00%(2.27%)コチ、2.00%(0.76%)である。

マダイには個体数と出土数の間に大きな開きがあるが、マダイ、ハタ科、フグ類の構成比の順位に変化はない。ハタ科やフグ類の構成比の個体数、出土数に大きな差がない事を考慮すると、出土数の方がその構成を良く反映しているとみられる。いずれにしても魚種の主体を占めるのはマダイ、ハタ科、フグ類等で、浜宮貝塚の人々は玄界灘の沖合を主な漁場としていたことが推測される。

貝類

腹足綱

1. トコブシ *Sulculus supertexta* (LISCHKE)
2. メカイアワビ *Notohaliotis sieboldi* (REEVE)
3. クロアワビ *Notohaliotis discus* (REEVE)
4. マダカアワビ *Notohaliotis gigantea* (GMELIN)
5. ウノアシ *Patelloidea (Collisellina) saccharina lanx* (REEVE)
6. マツバガイ *Cellana nigrolineata* (REEVE)
7. クマノコガイ *Chlorostoma xanthostoma* (A. ADAMS)
8. イシダタミ *Monodonta labio* (MINNÉ)
9. クボガイ *Chlorostoma lischkei* (TAPPARONE-CANEFRÍ)
10. ヘソアキクボガイ *Chlorostoma argyrostoma* (A. ADAMS)
11. オオコシダカガンガラ *Omphalius pfeifferi carpenteri* (DUNKER)
12. サザエ *Turbo (Marmorostoma) argyrostomus* LINNE
13. ウラウズガイ *Astralium haematragum* (MENKE)
14. スガイ *Lunella coronata coreensis* (RÉCLUZ)
15. オオヘビガイ *Serpulorbis imbricatus* (DUNKER)
16. クビタテヘビガイ *Macrophragma tokyoense* (PILSBRY)
17. ウミニナ *Batillaria multiformis* (LISCHKE)
18. イボウミニナ *Batillaria zonalis* (BRUGUIFÉRE)
19. ヘナタリ *Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata* (GMELIN)
20. フトヘナタリ *Cerithidea rhizophorarum* (A. ADAMS)
21. カワアイ *Cerithidea (Cerithideopsis) djadjariensis* (K. MARTIN)
22. キクスズメ *Sabia conica* (SCHUMACHER)
23. シドロ *Doxander vittatus japonicus* (RÉCLUZ)
24. ツメタガイ *Neverita (Glossaulax) didyma* (RÖDING)
25. ハナマルユキ *Ravitrona caputserpentis reticulum* (GMELIN)
26. オニサザエ *Chicoreusa sianus* (KURODA)
27. イボニシ *thais clavigera* (KÜSTER)
28. レイシ *Thais bronni* (DUNKER)
29. アカニシ *Rapana thomasiana* CROSSE
30. イソバショウ *Ceratostoma fournieri* (CROSSE)
31. イソニナ *Pisania (Japeuthria) ferrea* (REEVE)
32. ミクリガイ *Siphonalia cassidariaeformis* (REEVE)
33. バイ *Babyronia japonica* (REEVE)
34. マツムシ *Pyrene testudinaria tylerae* (GRIFFITH et PIDGEON)
35. ツノマタナガニシ *Fusinus nigrirostratus* (SMITH)
36. ナガニシ *Fusinus perplexus* (A. ADAMS)
37. テングニシ *Pugilina (Hemifusus) ternatana* (GMELIN)

斧足綱

38. カリガネエガイ *Barbatia (Savignyarca) virescens obtusoides* (NYST)
39. サルボウ *Anadara (Scapharca) subcrenata* (LISCHKE)
40. サトウガイ *Anadara (Scapharca) satowi* (DUNKER)
41. タマキガイ *Glycymeris vestita* (DUNKER)
42. ベンケイガイ *Glycymeris (Veletuceta) albolineata* (LISCHKE)
43. ヒバリガイ *Modiolus nipponicus* (OYAMA)
44. イガイ *Mytilus coruscum* (GOULD)
45. ナミマガシワ *Anomia chinensis* (PHILIPPI)
46. ハナイタヤ *Pecten (Notovola) sinensis* (SOWERBY)
47. イタヤガイ *Pecten (Notovola) albicans* (SCHRÖTER)
48. キンチャクガイ *Decatopecten striatus* (SCHUMACHER)
49. ウミギク *Spondylus barbatus* REEVE
50. イタボガキ *Ostrea denselamellosa* LISCHKE
51. イワガキ *Crassostrea nipponica* (SEKI)
52. マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG)
53. ケガキ *Saxostrea echinata* (QUOY et GAIMARD)
54. スミノエガキ *Crassostrea rivularis* (GOULD)
55. トマヤガイ *Cardita leana* DUNKER
56. キクザル *Chama reflexa* REEVE
57. ケイトウガイ *Chama dunkeri* LISCHKE
58. ザルガイ *Vasticardium burchardi* (DUNKER)
59. ハマグリ *Meretrix lusoria* (RÖDING)
60. チョウセンハマグリ *Meretrix lamarcii* (HOLTEN)
61. オキシジミ *Cyclina orientalis* SOWERBY
62. カガミガイ *Dosinia (Phacosoma) japonica* (REEVE)
63. コタマガイ *Gomphina (Macridiscus) Melanaegis* (SOWERBY)
64. アサリ *Tapes (Amygdala) japonica* (DESHAYES)
65. バカガイ *Mactra chinensis* PHILIPPI
66. シオフキ *Mactra veneriformis* REEVE
67. ナミノコガイ *Latona cuneata* (LINNÉ)
68. イソシジミ *Nuttallia solida* (LINNÉ)
69. マテガイ *Solen strictus* (GOULD)
- 汽水・淡水産
70. カワニナ *Semisulcospirabensis* (PHILIPPI)
71. タニシ科 *Family Viviparidae*
72. ヤマトシジミ *Corbicula (Corbiculina) leana* PRIME

節足動物甲殻綱フジツボ目フジツボ科

73. アカフジツボ *Balanus roseus* PILSBRY

節足動物甲殻綱フジツボ目ミョウガガイ科

74. カメノテ *Pollicipes mitella* (LINNAEUS)

浜宮貝塚から出土した貝類は表面採集品も含めて鹹水産貝類69種(腹足綱37種、斧足綱32種)と汽水・淡水産貝類3種確認をした。この中で、アワビについてはメカイアワ、クロアワビ、マダカアワビの3種が含まれるが、破損して完形を保っていないものも多く、詳細不明なものも含んでいるので構成比表ではアワビとして一括した。この他に節足動物甲殻綱フジツボ目フジツボ科のアカフジツボをはじめとするフジツボ類、節足動物甲殻綱フジツボ目ミョウガガイ科のカメノテがある。

表2に発掘層位ごとの貝類構成比を示した。数字が出土数で、()内の数字は構成比率である。

全体の集計で構成比率の高い貝類にはクボガイ(6.97%)、サザエ(14.72%)、ハマグリ(8.26%)、シオフキ(8.76%)、タニシ科(6.07%)、ヤマトシジミ(8.20%)等がある。サザエはいずれも有刺型のもので、クボガイとともに外海の岩礁地帯で採取されたものである。ハマグリ・シオフキは内湾の砂泥底、ヤマトシジミは汽水域、タニシは淡水域に産出する貝類である。いずれも遺跡周辺にその採取地が求められる。

各層位における生息地ごとの構成比は次のようになる。

III-a層は岩礁性貝類18(42.85%)外洋性貝類1(2.38%)内湾砂泥性貝類13(30.94%)汽水性貝類10(23.81%)計42個体(99.99%)。

III-b層は岩礁性貝類73(37.83%)外洋性貝類14(7.25%)内湾砂泥性貝類75(38.87%)汽水性貝類23(11.92%)淡水性貝類8(4.15%)計193個体(100.02%)。

III-c層は岩礁性貝類167(45.70%)外洋性貝類20(4.29%)内湾砂泥性貝類120(30.31%)汽水性貝類41(10.35%)淡水性貝類37(9.34%)計396個体(99.99%)。

III-d層は岩礁性貝類116(44.98%)外洋性貝類16(6.21%)内湾砂泥性貝類86(33.35%)汽水性貝類30(11.63%)淡水性貝類10(3.88%)計258個体(100.05%)。

III-e層は岩礁性貝類114(47.40%)外洋性貝類13(7.08%)内湾砂泥性貝類62(25.85%)汽水性貝類23(9.58%)淡水性貝類24(10.00%)240個体(99.91%)。

III-f層は岩礁性貝類17(40.47%)外洋性貝類3(7.14%)内湾砂泥性貝類17(40.47%)汽水性貝類4(9.52%)淡水性貝類1(2.38%)計42個体(99.98%)。

III-g層は岩礁性貝類48(47.05%)外洋性貝類10(9.80%)内湾砂泥性貝類29(28.42%)汽水性貝類4(3.92%)淡水性貝類11(10.78%)計102個体(99.97%)。

III-h層は岩礁性貝類25(78.14%)外洋性貝類1(3.13%)内湾砂泥性貝類4(12.52%)汽水性貝類1(3.13%)淡水性貝類1(3.13%)計32個体(100.05%)。

III-i層は岩礁性貝類31(75.62%)外洋性貝類1(2.44%)内湾砂泥性貝類5(12.20%)汽水性貝類3(7.32%)淡水性貝類1(2.44%)計41個体(100.02%)。

層位不明は岩礁性貝類144(31.93%)外洋性貝類4(0.92%)内湾砂泥性貝類267(60.85%)汽水性貝類7(1.59%)淡水性貝類17(3.87%)計439個体(100.06%)。

総計は岩礁性貝類764(42.95%)外洋性貝類54(3.03%)内湾砂泥性貝類707(39.73%)汽水性貝類146(8.20%)淡水性貝類110(6.17%)計1781個体(100.08%)となる。

上記のように出土した貝類は生息場所が多岐にわたっている。これらから遺跡を中心としてみた貝類の採取地を具体的にみると岩礁性貝類は遺跡の西側、神湊から草崎にかけての岩礁地帯。外洋性貝類は遺跡の前面の外海に面した砂丘海岸一帯。内湾砂泥性貝類は釣川の川口部、ただし、釣川は現在直線的に北流して玄界灘に注いでいるが、明治期以前は犀月橋の北より右折して砂丘後背部を東流して江口集落の東側で玄界灘に流れ込んでいたとされるので、川口から砂丘後背部にかけての一帯。汽水性貝類は上記の釣川の流れからすると、遺跡のすぐ東側の犀月橋周辺からその上流域に求められる。淡水性貝類は釣川のさらに上流域であったとみられる。遺跡を中心にして半径2kmの範囲が貝類の採取地と考えることができる。

表2 貝類構成比

No1

No.	腹足綱	III-a	III-b	III-c	III-d	III-e	III-f	III-g	III-h	III-i	層位不明	計
1	トコブシ		2(1.04)			2(0.83)					1(0.23)	5(0.28)
2	アワビ			5(1.26)	7(2.71)	5(2.08)	3(7.14)	4(3.92)	2(6.25)	3(7.32)	5(1.14)	34(1.91)
3	ウノアシ					1(0.42)						1(0.06)
4	マツバガイ			2(0.51)	1(0.39)	1(0.42)						4(0.22)
5	クマノコガイ		6(3.11)	21(5.30)	11(4.26)	5(2.08)	2(4.76)	1(0.98)			2(0.46)	48(2.70)
6	イシタタミ			1(0.25)		1(0.42)						2(0.11)
7	クボガイ		18(9.33)	48(12.12)	16(6.20)	23(9.58)	9(21.43)	4(3.92)			6(1.37)	124(6.96)
8	ヘソアキクボガイ		4(2.07)	3(0.76)		2(0.83)		3(2.94)		2(4.88)	2(0.46)	14(0.79)
9	オオコシダカガニカラ	1(2.38)			7(2.71)	3(1.25)		1(0.98)		1(2.44)	2(0.46)	13(0.73)
10	サザエ	7(16.67)	14(7.25)	33(8.33)	31(12.02)	27(11.25)		18(17.65)	19(59.38)	19(46.34)	94(21.41)	262(14.71)
11	ウラウズガイ			1(0.25)								1(0.06)
12	スガイ	3(7.14)	5(2.59)	12(3.03)	14(5.43)	10(4.12)				1(2.44)	8(1.82)	53(2.98)
13	オオヘビガイ	1(2.38)	5(2.59)	16(4.04)	5(1.94)	10(4.12)	1(2.38)	4(3.92)	1(3.13)		4(0.91)	47(2.64)
14	クビタテヘビガイ				1(0.39)							1(0.06)
15	ウミニナ	4(9.52)	8(4.15)	17(4.29)	3(1.16)	3(1.25)	1(2.38)	3(2.94)			1(0.23)	40(2.24)
16	イボウニミニナ		6(3.14)	4(1.01)	3(1.16)	8(3.33)					3(0.68)	24(1.35)
17	ヘナタリ		5(2.59)	9(2.27)	2(0.78)	4(1.67)					1(0.23)	21(1.18)
18	フトヘナタリ		3(1.55)	2(0.51)	6(2.33)	3(1.25)					1(0.23)	15(0.84)
19	カワアイ		1(0.52)									1(0.06)
20	キクスズメ			3(0.76)		2(0.83)	1(2.38)				2(0.46)	8(0.45)
21	シドロ			1(0.25)	1(0.39)						1(0.23)	3(0.17)
22	ツメタガイ			3(0.76)	1(0.39)		1(2.28)	2(1.96)			1(0.23)	8(0.45)
23	オニサザエ							1(0.98)				1(0.06)
24	イボニシ		1(0.52)	1(0.25)	1(0.39)	2(0.83)					1(0.23)	6(0.34)
25	レイシ	4(9.52)	8(4.15)	15(3.79)	9(3.49)	4(1.67)		1(0.98)	1(3.13)	1(2.44)	4(0.91)	47(2.64)
26	アカニシ		2(1.04)									2(0.11)
27	イソバシヨウ				1(0.39)			1(0.98)				2(0.11)
28	イソニナ			1(0.25)								1(0.06)
29	ミクリガイ									1(2.44)		1(0.06)
30	バイ	1(2.38)			4(1.55)			2(1.96)			2(0.46)	9(0.51)
31	マツムシガイ					1(0.42)						1(0.06)
32	ツノマタナガニシ				1(0.39)							1(0.06)
33	ナガニシ										1(0.23)	1(0.06)
34	テングニシ	1(0.52)						1(0.98)				2(0.11)
	小計	21(49.99)	89(46.13)	198(49.99)	125(48.47)	117(48.65)	18(42.85)	46(45.09)	23(71.89)	28(68.30)	142(32.38)	803(45.14)
35	カリガネエガイ					1(0.42)					2(0.46)	3(0.17)
36	サルボウ		3(1.55)		3(1.16)	1(0.42)	1(2.38)					8(0.45)
37	サトウガイ					1(0.42)						1(0.06)
38	タマキガイ		3(1.55)	1(0.25)	2(0.78)	2(0.83)	1(2.38)	2(1.96)	1(3.13)		1(0.23)	13(0.73)
39	ベンケイガイ			1(0.52)		3(1.16)	5(2.08)				1(0.23)	10(0.56)
40	ヒバリガイ			1(0.25)								1(0.06)
41	イガイ		3(1.55)	3(0.76)	1(0.39)	5(2.08)		4(3.92)	2(6.25)	3(7.32)	6(1.37)	27(1.52)

表2 貝類構成比

No2

No.	腹足綱	III-a	III-b	III-c	III-d	III-e	III-f	III-g	III-h	III-i	層位不明	計
42	ナシマガシク									1(2.44)	46(10.48)	47(2.64)
43	イタヤガイ		2(1.04)	1(0.25)	1(0.39)		1(2.38)	1(0.98)	1(3.13)		1(0.23)	8(0.45)
44	キンチャクガイ			1(0.25)	1(0.39)							2(0.11)
45	ウミギク		1(0.52)	1(0.25)								2(0.11)
46	イクガキ					1(0.42)						1(0.06)
47	マガキ		1(0.52)								58(13.21)	59(3.31)
48	ケガキ		1(0.52)	2(0.51)	1(0.39)		1(2.38)					5(0.28)
49	スミノエガキ					1(0.42)						1(0.06)
50	トマヤガイ				1(0.39)							1(0.06)
51	キクザル										1(0.23)	1(0.06)
52	ケイトウガイ	1(2.38)										1(0.06)
53	ザルガイ	1(2.38)		6(1.52)	5(1.94)	2(0.83)		2(1.96)			2(0.46)	18(1.01)
54	ハマグリ	5(11.90)	21(10.88)	46(11.62)	28(10.85)	17(7.08)	7(16.67)	9(8.82)	1(3.13)	2(4.88)	11(2.51)	147(8.25)
55	チヨウセンハマグリ		3(1.55)	5(1.26)	6(2.33)	4(1.67)	2(9.76)	8(7.84)		1(2.44)	2(0.46)	31(1.74)
56	オキシジミ		4(2.07)	2(0.51)	3(1.16)	1(0.42)	1(2.38)	3(2.94)	1(3.13)		4(0.91)	19(1.07)
57	カガミガイ			1(0.25)		1(0.42)						2(0.11)
58	ユタマガイ	2(4.76)	12(6.22)	12(3.03)	10(3.88)	11(4.58)	3(7.14)	3(2.94)		1(2.44)	4(0.91)	58(3.26)
59	アサリ		1(0.52)	2(0.51)	1(0.39)						1(0.23)	5(0.28)
60	バカガイ		1(0.52)		3(1.16)	1(0.42)		1(0.98)			1(0.23)	7(0.39)
61	シオフキ		3(1.55)	11(2.78)	5(1.94)	6(2.50)	1(2.38)	2(1.96)	1(3.13)		127(28.93)	156(8.76)
62	ナミノコ	1(2.38)	7(3.63)	11(2.78)	9(3.49)	6(2.50)					1(0.23)	35(1.97)
63	イソシジミ		1(0.52)	1(0.25)	1(0.39)	1(0.42)						4(0.22)
64	マテガイ				1(0.25)							1(0.06)
	小計	10(23.81)	68(35.23)	108(27.28)	84(32.58)	67(27.93)	18(42.85)	35(34.30)	7(21.90)	8(19.52)	269(61.31)	674(37.81)
65	カワニナ		1(0.52)			1(0.42)</td						

第4章 文献からみた浜宮

1. 浜宮の現況

昭和46年(1971)の発掘調査地から200m程南に浜宮という神社がある。海に隣接する浜宮は入海に面していた往古の宗像大社辺津宮の立地を偲ばせるものであるが、その成立時期などについては明らかでない部分が多い。

『宗像神社史』(以下「神社史」)は、浜宮はかつて辺津宮境内付近の「御前濱」にあったが、いつかの段階で釣川河口の五月浜(現宗像市江口)に移動したと説いており(上巻398~400頁)、これが通説的な認識となっている。ただし、現在、実際に浜宮があるのは五月浜ではなく、釣川を挟んだその対岸であるという矛盾についてはあまり意識されていない。

五月浜には皐月神社があり、5月5日に「五月さまのお座」と称して酒、鯛、餅などの饗に預かり、一日酒興を尽くすということが戦前まで行われていた¹。今日でも5月5日の五月祭及び浜宮祭では「しょうぶ」「ちまき」をお供えしての祭典が行われている²。

浜宮貝塚に近接する浜宮についての論考は「神社史」の他に、浜宮そのものがこれまであまり注目されてこなかった。そこで、本章では、浜宮について文献史料の見地から再検討を試みる³。

なお、行論の便宜上、現在の「浜宮」と区別するため、前近代の記述においては史料に合わせて「濱宮」ないし「濱殿」と旧字で表記することにする。

2. 濱殿(濱宮)と浮殿

濱宮の存在が確認できるのは、建治3年(1277)に成立した『宗像三所大菩薩御座次第』である。これは惣社(第一宮)、中殿(第二宮)、第三大菩薩(第三宮)を始めとして、かつて辺津宮境内に存在していた社、あるいは現在も辺津宮境内に存在している社に祭られている「御正躰」(御神体)について記した史料で、辺津宮境内の具体的な構成が分かる初見史料でもある。ここには「濱宮御正躰者、冠俗躰白大躰、所持物者、白シヤク、御衣赤色、安鞍御座」とある。この一連の記述の中で濱宮のみが辺津宮境内から離れた釣川河口にあったとは考えにくく、少なくとも13世紀には「御正躰」を持った社として濱宮は辺津宮境内に存在していたことは確実である。おそらく、古代から中世にかけて辺津宮境内の施設が整えられていく中で濱宮も成立したのであろう。

ところで、濱宮と同一とされる施設に「浮殿」がある。この浮殿については、これまでほとんど議論がなされていないため、濱宮との関連で取り上げてみたい。

『応安神事次第』(以下「神事次第」)は、中世宗像社における一年間の神事が月日ごとに網羅的に記された史料で、現在六つの伝本(甲本、乙本、丙本、丁本、戊本、癸本)が存在する。これらの伝本のうち甲本の五月会について記した箇所に「昔ハ五月ノ浮殿者三間四面ノ御社也。雖、然、近年令破指一畢。可レ有急束御造立者也」とあり、「五月ノ浮殿」が三間四面の社であり、近年破損したため造立が急がれていることが窺える。一方、乙本では同様の箇所が、「濱宮ノ神殿ノ後ニハ赤キ色ノ縵幕ヲ引也。内陣也。昔濱宮ハ三間四面御社也」と記されており、これらの史料から「神社史」は「五月ノ浮殿」=「五月浜にある濱殿(宮)」と解釈している(上巻、398~400頁)。

他の用例を探すと、「神事次第」甲本正月十五日条には「御内浮殿事、チハヤフルウキトノノミヤノユフタスキ、カケテノノチハタノシカリケリ、古人曰、昔ハ池ノ中嶋ニ在_レ社、号_レ浮殿ト_レ云々」とある。おそらくかつて中島に建てられていて、池に浮いたような構造を持つ建物が「浮殿」と呼ばれており、それが御内(=大宮司)の館、あるいはその付近に移ったため「御内浮殿」と表現されたと思われる。また、「神事次第」甲本と同時期の正平23年(1368)に成立した神事史料である「正平二十三年宗像宮年中行事」には「瀆殿社」と別項目として「館浮殿神事社務館」の項目が立てられている。すなわち、宗像社における「浮殿」の用例は、「瀆殿」ではなく「御内浮殿(館浮殿)」を指していることが分かる。

さらに、「五月ノ浮殿」という表現が、現存史料のうち「神事次第」甲本の五月会の記事のみに現われることから推測すれば、「五月ノ浮殿」は「五月会で使用される浮殿構造の建物」の意で、すなわち「瀧殿」を指しているのではなかろうか。つまり、史料上の「浮殿」は「御内浮殿(館浮殿)」を指すが、甲本の「五月ノ浮殿」に限り「瀧殿」を指していると解釈できる。

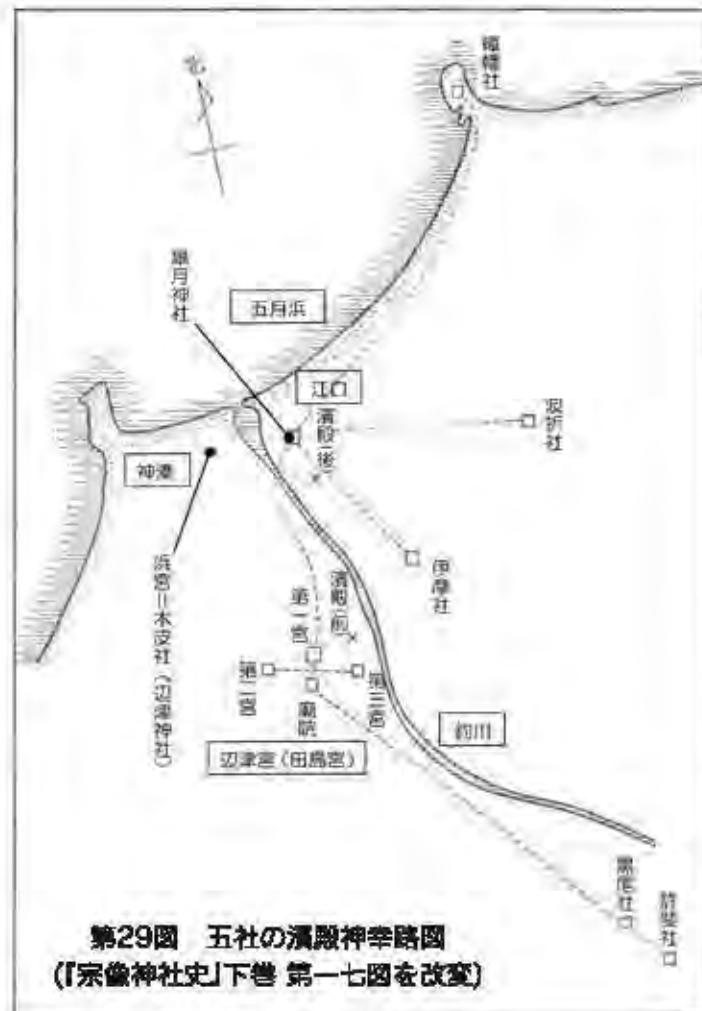
3. 滅殿の位置

瀬殿が移動したとする「神社史」の説は、「五月ノ浮殿」を「五月浜にある瀬殿」と解釈したことにより成立している。しかし、「五月ノ浮殿」が「五月会で使用される浮殿構造の建物＝瀬殿」であるとすれば、瀬殿は「神社史」のいうように「御前瀬」から五月浜へ移動したといえるであろうか。そこで、中世宗像社における二大神事である五月会と放生会について検討を加えてみたい。

5月5日に行われる五月会では、第一宮・第二宮・第三宮、許斐社、鐵幡社の五社が濱殿に神幸し、そこで神事は最高潮となり、様々な神事を終えた後、五社は「濱」から還御する（「神事次第」甲本）。もし「濱」＝濱殿が「御前濱」から五月浜に移動したとすれば、それに伴い五社の神輿の神幸先も「御前濱」から五月浜に変わることになる。鐵幡を除く社が五月浜から還御しようとすると、「御前濱」から還御した場合と比べて、迎津宮～五月浜の往復分だけ神幸の移動距離が延びることになる。

また、他の神事関係史料を参照すると、「濱」と記される場合は「御前濱」を指しているようである。従って、五月会における濱殿神事は常に「御前濱」で行われたと考るほうが自然であろう。

次に、放生会では、8月14日に五社が濱殿に集合し、酒肴や祝詞、風流や田楽などが行われ、その後に惣社(第一宮)で神事が行われる。なお、乙本によれ



ば、濱殿での酒肴の後、「夜ニ入テ」、風流、田楽、延年、猿樂が催されるとある。濱殿が五月浜にある場合、三宮と許斐は一度辺津宮から五月浜まで神幸し、濱殿で神事を終えた後、再び辺津宮の惣社に戻らなければならないことになる。しかも、乙本によれば「夜ニ入テ」猿樂等を終えた後で、濱殿から夜道を惣社へ神幸する必要が生じるのである。さらに、翌日、惣社から還御するに際しては、「五体御輿濱殿ニ出御、鐵橋モ御入、一・二ハ宮ニ入御、三ハ御廟ニ院入御、許斐ハコノミニ入御也」(甲本)とあるように、五社が一度濱殿に出御してから還御することになっている。すなわち、濱殿が五月浜にある場合、三宮と許斐社は、還御するためだけに辺津宮～濱殿間を往復することになり、神輿の動きとしていかにも不自然である。放生会においても濱殿が五月浜にあつたとは考え難いのである。

これらの検討により、瀧殿が「御前瀧」から五月浜に移動したとする「神社史」の説明は裏付けられず、瀧殿は中世を通して「御前瀧」を動かなかつたと結論付けることができる。

4. 現在の浜宮の成立

「神社史」がかつて五月浜に演説があったという認識してしまったその背景は既に近世段階で存在していたと思われる。次に「筑前国続風土記」(以下「続風土記」)、「筑前国続風土記附録」(以下「附録」)、「筑前国続風土記拾遺」(以下「拾遺」)を掲示する。

「続風土記」卷之十七 宗像郡下 五月濱

江口村の境内にあり。田島より十三町北也。むかし田島の神の御旅所也。五月松原あり。其所に石壇あり。むかし六月夏越和饌の祓とて、田島の神輿を、御前の瀧と云所より船十二艘にのせ、五月瀧に御下り、神輿を石壇の上に置奉りしと云。今は久しく絶て、其儀式なし。御前の瀧とは、今の田島の社の東の川はたなり。

五月五日此所にて競馬をなす。此故に五月濱といふ。宗像記に曰、五月五日宗像家人、家々の
端子花やかに出立て、五月濱に出て馬を乗る。是を五月児と云。家をつぐ端子なれば、庶子
此日かけ馬を乗て、越度なきとき、宗領の座に直る。是古来の風俗也。

「附錄」卷之三十二 宗像郡上 江口村 皋月濱并松原

田嶋宮幡宮の地にして松林の内に石壇あり。いにしへい五月五日大祭ありしか、今は里民寄つとひてかたはかりなる祭りを執行ふと言。

「拾遺」卷之三十六 宗像郡上 江口村 皋月社

卓月松原に在。古へ田嶋の神の幅宮の地にして五月五日大祭有。競馬をも執行す。今も小祠を建て宗像三神を勧請し毎年形斗りの祭をなせり。

これらの記述を総合すると、「五月濱」はかつての「田島の神」(辻津宮)の「御旅所」「頓宮」であり、5月5日に競馬などの「大祭」が行われていたという。しかし、前述のとおり中世における五月会は「御前之濱」で行われていたことは明らかであり、また5月5日に五月濱で「大祭」があったことを明示する史料はない。

「続風土記」では、「御前濱」と並んでそれ以前の史料には見えない「五月濱」という用語が現れ、六月の夏越祓の際に神輿が「御前濱」から「五月濱」に船で下ると記される。「拾遺」では、「皐月松原」(五月濱)に皐月社なる小祠が建ち、現在は「形斗りの祭」をするに過ぎないという。しかし、中世の「神事次第」諸本では「五月濱」への神幸の事実は確認することができない。おそらく「続風土記」が完成する宝永6年(1709)以前のどこかの段階で「五月濱」における「大祭」の伝承が成立したのであろう。それでは、この「大祭」伝承は何に基づいて形成されたのであろうか。

「続風土記」卷之十六 宗像郡上 田島

村中に神社あり。右にしるす宗像三神の内、一はしらの御神也。田島社職の輩は、此社を田心姫とし、第一の宮と云。此神社いにしへは神湊の東六町、海の南一町許にありし故に海濱宮と云。へとは海濱を云。つは助字なり。今其あとを神の幸屋敷と云。其所に今も社の跡ありて、いちしるし。昔の祭に用ひし土器のわれたる多し。人家はなし。此所神湊と江口との間にあり。神湊の境内にして、田島を去事半里許也。清氏より四十八世の大宮司長氏、後深草院建長年中、夢に神託の告有て、田島にうつし奉るといひ伝ふ。

「附録」卷之三十二 宗像郡上 神湊村

海濱宮址 本編田嶋の所に見えたり。田嶋神社の旧地小祠あり。石鳥居建り。なり。里民ハ天応元年此処より田嶋の宮に遷座し給ふといふ。故に神幸様といふ。

「拾遺」卷之三十六 宗像郡上 神湊 濱宮社

神湊の東六町江口浦に至る道松林の中に小祠有。宗像三神を祭る。俗にいにしへの辺津宮の址歟といふハ誤なり。宗像古記にハ湊ノ木皮ノ社と有。(中略)木皮を神幸と書いて田島の神輿むかし神幸有し故に、名つくるよし本編に見えたれとも、神幸をキノカウと訓ること、古記の内に見えす。又神字をキと訓義理も聞えかたし。いふかし。又此社を辺津宮の址也といふ説も信しかたし。今其境地を見るに、往古ハわつかなる浪の打寄たる洲崎と見えたれハ辺津宮などいふ斗の大社のますへき所にあらす。…(中略)…常ハ社とてもなく、毎年祭のたひことに、仮りに神籬を造て、木皮などを以て上を葺たる歟とおほしき故に、神幸にはあらで木皮ノ社と書しなるへし。故に今の世にも礎なども一つもなかるべし。

「続風土記」と「附録」は「五月濱」の対岸に位置する神湊村の「海濱宮」こそが本来の辺津宮であるとし、「続風土記」によれば鎌倉時代の大宮司長氏の頃に、「附録」によれば天応元年(781)に現在の田島の地へ遷座したというのである。そして、その跡地を「キノカウ」と呼び「神幸」という字を宛てている。

一方、「拾遺」は、「続風土記」と「附録」の説を否定し、この小祠は木皮社であり、「神幸」を「キノカウ」と訓ずることを「いふかし」と主張する。おそらく、中世以来の宗像社の末社である木皮社の「木皮」が「キノカウ」に転訛し、その音に「神幸」という漢字が宛てられたため、辺津宮は神湊から「神幸」してきた、言い換えれば、神湊の木皮社が辺津宮の旧跡であるという伝承が生まれたものと思われる。

さらに、想像を逞しくすれば、かかる「神幸伝承」が釣川対岸の江口に伝わったことで、「五月濱」はかつて辺津宮の頓宮であり、5月5日に「大祭」が行われていたという伝承が成立したのではな

かろうか。つまり、五月濱で五月会がおこなわれていたのではなく、5月5日の「大祭」伝承が成立した後に、その「大祭」が行われたとされる場所を「五月濱」と呼ぶようになったと考えられる。

重要なのは、「拾遺」がその項目名を「濱宮(はまみや)社」としていることである。これは「海濱宮」の誤記であろうが、その内容が木皮社に関する事であつたため、木皮社=濱宮という認識が成立してしまった。この認識に基づいて成立したのが現在の浜宮であった。

以上、文献史料からは「濱殿(濱宮)」は中世を通じて辺津宮付近の「御前濱」にあり、近世の「神幸伝承」及び「拾遺」の記述によって、近世末以降に浜宮貝塚に近接する現在の浜宮は成立したことを指摘できる。

〈参考文献〉

- 註1 森弘子「宗像大社の無形民俗文化財」(「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議編「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ、2011年)。
- 註2 「むなかたさま その歴史と現在(改訂版)」(宗像大社発行、2006年) 123頁。
- 註3 本章の内容は、拙稿「宗像大社浜宮考」「沖ノ島研究」第2号、2016年に拠る。併せて参照されたい。
- 註4 「続風土記」、「附録」、「拾遺」の引用は、中村正夫編校訂「宗像郡地誌総覧」(文献出版、1997年)による。

第5章 まとめ

1. まとめ

(1)出土遺物からみる浜宮貝塚の時期

各層出土遺物及び表採遺物からみる浜宮貝塚の時期についてまとめる。

1) III-1層

須恵器については、破片資料ではあるが、坏蓋は、口縁端部に僅かに段を有するものや、天井部から端部にかけて沈線を有するものと、やや丸味を帯び、段が退化しているものがみられる。両者の時期幅として、前者は田辺編年のTK10型式、後者はTK43型式の時期が考えられ、6世紀中頃から末にかけてであろう。坏身も端部を丸く収めており、やはりTK10型式以降である。

土師器に関しては、甕などは長胴化するタイプのものや、口縁部が外反するものが多く主体は、6世紀代に収まるものである。高坏も坏部に屈曲部を持つタイプと半球状のものがみられ、屈曲部をもつものが破片資料のため、明確な時期決定は難しいが、こちらも古くても6世紀前半以降の時期と考えられる。鉢は、破片資料のため詳細な時期は不明であるが、端部を僅か外に摘み上げている点や「く」の字状に屈曲しない点を加味すると、6世紀前半～中頃の時期が想起できよう。

以上の点からIII-1層の時期については、6世紀前半～6世紀末の時期幅が想定され、主体は6世紀中頃～末であろう。

2) III-2層

須恵器は、やや体部に稜を残す坏蓋が見られる。やや扁平で大型の坏身も出土していることから、III-1層同様、TK10型式～TK43型式の時期であろう。高坏においては、3方向透かしや低脚である点からTK47型式(5世紀末)頃の時期が想定される。

土師器については、やや口縁が直状に立ち上がる甕も見られるが、主体は口縁部が外反する6世紀以降のものが占める。

高坏は、バリエーションに富んでおり、坏部内面に暗文状のミガキを施すものや、扁平な坏部をもつもの、やや大型の塊状を呈するものもみられる。

III-2層も、III-1層と同様に6世紀中頃以降が主体となるが、やや時期的に古い遺物を含む傾向にある。

3) III-3層

須恵器に関しては、上層と比較して、やや古式のものが多くみられる。坏蓋の天井部から端部にかけて稜が残り、口縁端部に明確な段を有するものが主体である。MT15型式(6世紀前半)の時期であろう。

土師器も、高坏は、明確な屈曲部を持つ坏部が出土しており、口縁部に向かって直線的、もしくはやや内弯して立ち上がるタイプである。形状から5世紀末頃まで上るものであろうか。その他、6世紀以降から、筑後川や矢部川を中心に盛行する模倣坏も1点出土している。

上層に比べ、やや時期的に古式の遺物が見られ、6世紀前半の遺物も多くみられる。また、有孔円板も1点出土している。沖ノ島や大島御嶽山遺跡から出土するものに比べるとやや扁平である。その他、漁労用の刺突具であろうか、鉄製ヤスが出土しているのも海浜集落を考える上で注目される。

4) III-4層

遺物数が少ないため、明確な時期決定は難しいのが現状である。しかし、須恵器高坏については、低脚の付くタイプTK47形式(5世紀末)の時期と考えられる。土師器壺は、口縁が直立気味にやや

長く伸びるタイプがみられ、甕もやや倒卵形に近い胴部をなしている。頸部近くが直立することから、両者とも6世紀初頭～前半の時期であろうか。やや断定的ではあるが、Ⅲ-4層については、5世紀末～6世紀前半にかけての時期を想定したい。

5) Ⅲ-5層

こちらも、破片資料が多く断定的な時期ではあるが、やや器壁の厚い甕の口縁部がみられ、外反も緩いことから5世紀後半以降の時期が考えられよう。また、高坏に関しては、やや口径が大きく屈曲部を持つタイプのものや、脚部から大きく裾部端部まで広がるタイプがみられる。時期に関しては、5世紀後半以降であろう。

6) Ⅲ-6層

この層も遺物数が少なく、明確な時期決定は難しい。注目されるのが、1点のみであるが、半島系瓦質土器が出土しており、海浜集落及び半島との交流を伺い知れる貴重な資料である。また、完形の土師器の鉢からおおよそ5世紀後半～6世紀前半の時期幅は読み取ることができるであろう。

鉄製刀子は、第3章で報告した骨角製品の中に鹿角製の柄状骨角製品が出土しているため、関連する可能性も残る。

7) 出土遺物まとめ

層位ごとに見る遺物の時期的な変遷については、Ⅲ-1層～Ⅲ-2層については、6世紀中頃～末が主体であり、Ⅲ-3層になると、主体は6世紀中頃まで上がるものと考えられる。また、Ⅲ-2層から6世紀前半の遺物が散発的に確認できるようになる。その後、Ⅲ-4層～Ⅲ-6層については、TK47(5世紀末)頃の須恵器等を含み、少数ではあるが下層につれて古式の遺物がみられるといった様相である。

以上、各層の出土遺物からは、時期幅として5世紀後半～6世紀末の時期が想定でき、浜宮貝塚の主体となるのは6世紀中頃～末と想定できる。

8) 表採遺物

表採遺物は、弥生時代のものから確認することができ、遺跡の成立を考える中で重要な遺物である。口縁に刻目を持つ如意状口縁の甕がみられ、時期としては弥生時代前期末頃であろう。また、弥生中期と思われる高坏も出土している。

須恵器の坏身・蓋に関しては、おおよそMT15～TK43型式の時期で収まると考えられ、多くはTK10～TK43型式の6世紀中頃～末である。また、一部甕などにもヘラ記号がみられるものがある。

土師器に関しては、甕の長胴化するタイプや、胴部にやや歪みのあるもの、口縁部が強く外反するものが主体で6世紀以降の特徴であろう。また、胴部が球状を呈し、やや古手の形状を示すものも見られ、5世紀中頃まで遡るものかであろうか。

弥生土器を除けば、表採遺物からは、5世紀前半～6世紀末頃までの時期幅がみられるといった様相を示している。これは、各層出土遺物の時期とほぼ重なり、やはり浜宮貝塚の主体は6世紀中頃～末であろう。また、Ⅲ-6層同様に半島系瓦質土器も3点確認できることから、資料数としては少ないものの半島との交流を裏付ける資料である。

(2) 浜宮貝塚の位置づけ

1) 立地環境について

まず、浜宮貝塚の立地環境について見てみる。遺跡は釣川河口左岸の砂丘上に立地しており、現在の海岸線まで400mほどの距離があるが、1997「宗像市史」通史編「第一巻 自然考古」編纂時に

行ったボーリング調査により縄文時代中期には近くまで海岸線が迫っていたことがわかつている。浜宮貝塚が形成されていた古墳時代の状況は不明だが、飛砂による堆積の進捗によっては現在より海岸線がかなり近接していたと推定され、漁撈活動に適していたのだろう。さらに釣川を介した内陸部への移動についても至便であり、その地理的な利便性が集落形成の背景にあったと考えられる。また、出土魚類の構成比から、マダイ、ハタ科、フグ類等が出土魚種の主体を占めており、浜宮貝塚の人々が玄海灘の沖合を主な漁場としていたことが推測される。貝類についても、遺跡から2km圏内の神湊から草崎半島にかけての岩礁地帯や、前面の外海に面した砂丘海岸一帯、釣川河口の汽水域から淡水域において多岐にわたる貝類を採取しており、漁場や貝類の採取地としても最適な環境であったと推測できる。

貝塚の形成時期については、前述のとおり5世紀後半から6世紀末葉にかけて、特に6世紀中頃から末葉に盛行するが、続く古代・中世の出土遺物はごく僅かとなり、神湊地区の海人活動の拠点は浜宮貝塚から7～8世紀を主体とする新波止貝塚へ移り変わるという様相を示している。この集落の変遷、拠点の移動については、どのような要因が考えられるのか、今後詳細な検討が必要である。なお、弥生時代前期末～中期にかけての遺物も若干みられ、前身集落の存在する可能性も残る。

2) 出土遺物について

出土遺物については、須恵器は坏身・坏蓋が主体を占め、土師器についても、甕、瓶、壺など日常土器が主体を占めることから、集落遺跡としての一般的な様相を示している。祭祀関連の遺物としては、有孔円板や石製勾玉、滑石製白玉など祭祀遺物が僅かながらも確認できたが詳細は不明である。その他、遺跡の性格を示す遺物として、玄界灘式製塙土器や漁撈具として鉄製釣針・鉄製ヤスのほか、刀子などに装着すると思われる大ぶりの鹿角製柄など、海浜集落としての特徴の一端を伺える良好な資料である。同時に、朝鮮半島系の瓦質土器なども少量ではあるが出土しており、海を介した対外交流を示すものである。その他、表採遺物であるが、須恵器坏蓋内面にヘラ記号を施すものがみられる。これは、6世紀代に宗像地域の窯で生産された須恵器の特徴のひとつであり、須恵器生産が盛んに行われていた宗像市内陸部の釣川右岸地域(須恵・三郎丸・稻元・山田地区)と浜宮貝塚周辺の人々の交流を示唆している。

3) 神湊地区海浜集落の墓域について

神湊地区における海浜集落の墓域に関しては、草崎半島の基部に立地する前方後円墳、神湊上野1号墳(前方後円墳集成8期/全長40m)を中心とする神湊上野古墳群や、浜宮貝塚南側の低地を隔てた丘陵上に立地する神湊牟田尻古墳群などが注目される。特に神湊牟田尻古墳群は、装飾古墳である桜京古墳(9期/40m)など前方後円墳を含む約200基の群集墳からなる大規模な群集墳で、浜宮貝塚を含む神湊周辺における海浜集落の造営時期とほぼ並行期に造営されていることなどから、これら人々の墓域候補に考えられよう。

また、浜宮貝塚との関連を考えておかねばならない沖ノ島祭祀遺跡・御嶽山祭祀遺跡との時期的な並行関係をみてみると、沖ノ島祭祀の岩陰祭祀段階(5世紀後半～7世紀)の前半期に相当し、大島の御嶽山(223.2m)山頂に立地する御嶽山祭祀遺跡において半岩陰・半露天祭祀(7世紀後半～8世紀前半)の末期から露天祭祀段階(8世紀～9世紀)とほぼ同質の祭祀が行われる7世紀末頃には集落としては衰退している。なお、新波止貝塚では沖ノ島露天祭祀段階に特徴的な須恵器有孔壺形土器の出土が知られるが、浜宮貝塚においても本土側で沖ノ島渡島に最も近い神湊地区に立地することや祭祀遺物、特に採集品で今回未報告であるが沖ノ島祭祀に特徴的な大ぶりの白玉の存在などから、浜宮貝塚を営んだ人々が沖ノ島祭祀に全く無関係だったとは思えず、今後、実態を示す

祭祀遺構・遺物の出現を期しておきたい。

4) 津屋崎古墳群との並行関係について

宗像地域の盟主墓が展開する津屋崎古墳群との並行関係を見てみると、浜宮貝塚の形成初期は遺跡に近い勝浦地区において大型の前方後円墳である勝浦峯ノ畠古墳(7期/100m)、勝浦井ノ浦古墳(8期/70m)が相次いで築かれる。新原・奴山古墳群では1号墳(7期/50m)などの前方後円墳の築造期にあたり、続いて22号墳(8期/80m)、30号墳(9期/54m)など盟主墳が6世紀前半まで連継と築かれる。6世紀中頃になると盟主墳は南下し、須多田天降神社古墳(9期/80m)、須多田ミソ塚古墳(9期/60m)、須多田下ノ口古墳(10期/83m)が相次いで築造され、浜宮貝塚の最盛期に相当する。

5) 課題

最後に、今後の課題を整理しておきたい。遺跡の広がりについては貝殻や土器の散布状況等から大まかに設定されているが、確認調査等による詳細な範囲の解明が急務である。また、今回報告した調査区では残念ながら住居・土坑等の明確な遺構が確認されておらず、今後の調査にあたっては集落遺構の確認、さらに若干の製塩土器や祭祀系遺物の存在から予想される製塩や祭祀行為の有無についても留意すべきであろう。このほか神湊地区に分布する海浜集落の神湊上方遺跡や新波止貝塚、周辺の鐘崎地区、津屋崎地区、大島など離島地区の海浜集落遺跡や古墳群との関連性についても詳細な考察が必要である。その他にも対外交流を示す半島系遺物の検討や、沖ノ島祭祀との係わりなど残された課題は多く、今後、資料の蓄積を行いながら本遺跡の性格や位置づけを明らかにしていきたい。

〈参考文献〉

- 金関惣/佐原真(編) 1987『弥生文化の研究 4弥生土器II』
 田辺昭三 1981『須恵器大成』
 石野博信/岩崎卓也/河上邦彦/白石太一郎(編)1991『古墳時代の研究6土師器と須恵器』
 重藤輝行2002『古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性-』九州前方後円墳研究会
 西谷正1979「日本における韓式土器・陶器」『世界陶磁全集17』
 西谷正1984「九州出土の朝鮮産陶質土器について」九州文化史研究所紀要第二十九号
 横山浩一1984「玄界灘式製塩土器(上)」九州文化史研究所紀要第二十九号
 山崎純男1984「福岡市海の中道遺跡出土自然遺物の検討」九州文化史研究所紀要第二十九号
 横山浩一1985「玄界灘式製塩土器(中)」九州文化史研究所紀要第二十九号
 原俊一1987「福岡県「弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題-第1分冊 九州篇-」埋蔵文化財研究会
 山崎純男2007「九州における海人集団の成立と展開」「古墳時代の海人集団を再検討する-「海の生産用具」から20年-」埋蔵文化財研究会
 白木英敏2007「宗像海人集団の動向」「古墳時代の海人集団を再検討する-「海の生産用具」から20年-」埋蔵文化財研究会
 小池史哲/岸本圭/佐々木隆彦1998「鈴ヶ山遺跡 広ミ遺跡」広川インター・エンジニアリング埋蔵文化財調査報告書 福岡県教育委員会
 山崎純男1982「海の中道遺跡」福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第87集 福岡市教育委員会
 井上裕弘1983「御床松原遺跡」志摩町文化財調査報告書第3集 志摩町教育委員会
 宗像市1997『宗像市史』通史編「第一巻 自然考古」宗像市史編纂委員会
 小池史哲1991「神湊井牟田古墳群 I」玄海町文化財調査報告書第1集 玄海町教育委員会
 判田博明1991「神湊井牟田古墳群 II」玄海町文化財調査報告書第2集 玄海町教育委員会
 伊崎俊秋1989「稻元日焼原」宗像市文化財調査報告書第22集 宗像市教育委員会
 白木英敏1994「富地原川原田 I」宗像市文化財調査報告書第39集 宗像市教育委員会
 白木英敏1996「富地原川神屋崎」宗像市文化財調査報告書第41集 宗像市教育委員会
 白木英敏2001「三郎丸堂ノ上 C」宗像市文化財調査報告書第50集 宗像市教育委員会
 山田広幸2012「大島御嶽山遺跡」宗像市文化財調査報告書第64集 宗像市教育委員会
 三野章2010「神湊新波止遺跡を通じて見た飛鳥奈良朝の地方漁村文化」「福岡考古」第22号福岡考古懇話会
 池ノ上宏・吉田東明2011「津屋崎古墳群 II」福津市文化財調査報告書第4集 福津市教育委員会
 近藤義郎編1992「前方後円墳集成」九州編

表3 出土遺物一覧表

番号	種類	遺物名	遺物種類	形態	大きさ	説明	色調	位置/範囲
1	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
2	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
3	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
4	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
5	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
6	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
7	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
8	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
9	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
10	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
11	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
12	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
13	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
14	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
15	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
16	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
17	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
18	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
19	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
20	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
21	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
22	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
23	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
24	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
25	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
26	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
27	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
28	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
29	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
30	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
31	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
32	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
33	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
34	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
35	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
36	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
37	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
38	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
39	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
40	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
41	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
42	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
43	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
44	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
45	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
46	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
47	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
48	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
49	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
50	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
51	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地
52	貝	貝	貝殻	一	一	貝殻	白色	精良地

単位はcm、()は推定

番号	神 名	川上造機	造物種類	日付	底枠	機種	調 度	色調	その他の特徴
53	9	II-1号	造物種類未記載	—	—	1.7t	調度	白	—
54	9	II-2号	造物種類未記載	—	18.10	1.0t	調度	白	—
55	9	II-3号	造物種類未記載	—	12.6	1.0t	調度	白	—
56	9	II-4号	造物種類未記載	—	—	1.0t	調度	白	—
57	9	II-5号	造物種類未記載	—	—	0.25t	調度	白	—
58	9	II-6号	造物種類未記載	(20.0)	—	0.8t	調度	白	—
59	9	II-7号	造物種類未記載	—	—	0.8t	調度	白	—
60	9	II-8号	上部機架	—	—	1.7t	調度	白	—
61	9	II-9号	上部機架	—	—	1.3t	調度	白	—
62	9	II-10号	上部機架	(16.0)	—	1.0t	調度	白	—
63	9	II-11号	上部機架	(13.0)	—	1.3t	調度	白	—
64	9	II-12号	上部機架	—	—	0.8t	調度	白	—
65	9	II-13号	上部機架	—	—	0.8t	調度	白	—
66	9	II-14号	上部機架	—	—	0.8t	調度	白	—
67	9	II-15号	上部機架	—	—	0.8t	調度	白	—
68	9	II-16号	上部機架	—	—	0.8t	調度	白	—
69	10	II-1号	上部機架	(19.0)	—	1.0t	調度	白	—
70	10	II-2号	上部機架	(14.0)	—	1.0t	調度	白	—
71	10	II-3号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
72	10	II-4号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
73	10	II-5号	上部機架	(10.0)	—	1.0t	調度	白	—
74	10	II-6号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
75	10	II-7号	上部機架	(11.0)	—	1.0t	調度	白	—
76	10	II-8号	上部機架	(12.0)	—	1.0t	調度	白	—
77	10	II-9号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
78	10	II-10号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
79	10	II-11号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
80	10	II-12号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
81	10	II-13号	上部機架	(12.0)	—	1.0t	調度	白	—
82	10	II-14号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—
83	10	II-15号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
84	10	II-16号	上部機架	(14.0)	—	1.0t	調度	白	—
85	10	II-17号	上部機架	(15.0)	—	1.0t	調度	白	—
86	10	II-18号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
87	10	II-19号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
88	10	II-20号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
89	11	II-1号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
90	11	II-2号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
91	11	II-3号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
92	11	II-4号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
93	11	II-5号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
94	11	II-6号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
95	11	II-7号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
96	11	II-8号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
97	11	II-9号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
98	11	II-10号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
99	11	II-11号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
100	12	II-1号	上部機架	(12.0)	—	1.0t	調度	白	—
101	12	II-2号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
102	12	II-3号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—
103	12	II-4号	上部機架	(12.0)	—	1.0t	調度	白	—
104	12	II-5号	上部機架	(12.0)	—	1.0t	調度	白	—

番号	機 種	機 種	川上造機	造物種類	日付	底枠	機種	機 種	調 度	色調	その他の特徴
105	12	II-6号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
106	12	II-7号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
107	12	II-8号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
108	12	II-9号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
109	12	II-10号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
110	12	II-11号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
111	12	II-12号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
112	12	II-13号	上部機架	(12.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
113	12	II-14号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
114	12	II-15号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
115	12	II-16号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
116	12	II-17号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
117	12	II-18号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
118	12	II-19号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
119	12	II-20号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
120	12	II-21号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
121	12	II-22号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
122	12	II-23号	上部機架	(12.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
123	12	II-24号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
124	12	II-25号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
125	12	II-26号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
126	12	II-27号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
127	12	II-28号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
128	12	II-29号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
129	12	II-30号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
130	12	II-31号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
131	12	II-32号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
132	12	II-33号	上部機架	—	—	1.0t	調度	白	—	—	—
133	12	II-34号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
134	12	II-35号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
135	12	II-36号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—	—	—
136	12	II-37号	上部機架	(13.0)	—	1.0t	調度	白	—</td		





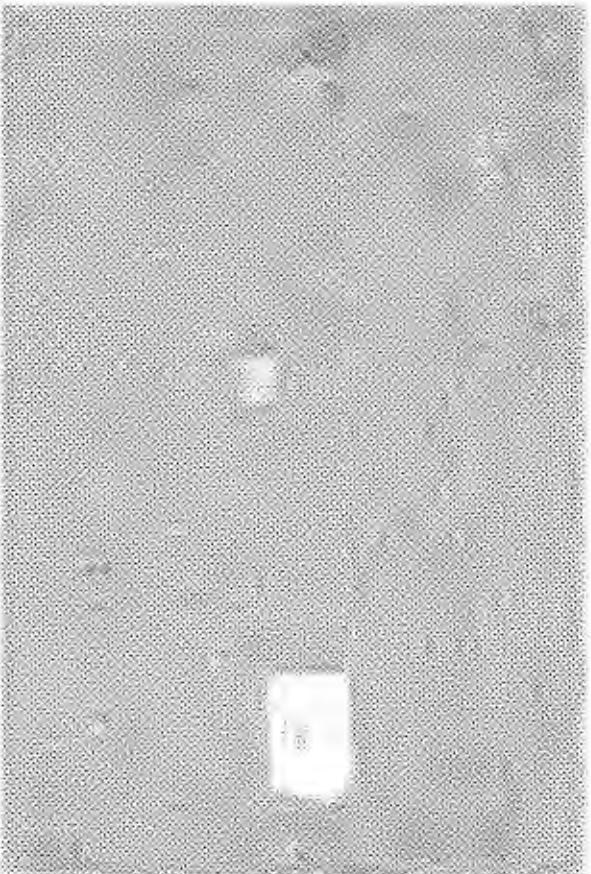
1. 涵宮風祭周辺航空写真（平成23年撮影）



2. 宗像大社浜宮 現況（平成30年2月撮影）



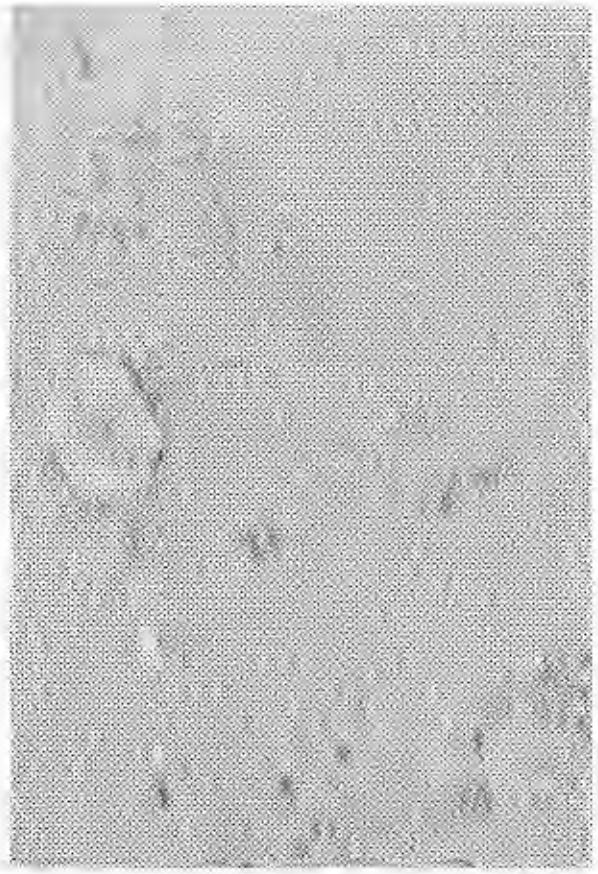
1. 昭和 46 年度調査写真①
浜吉貝塚 遺跡 (北東より)



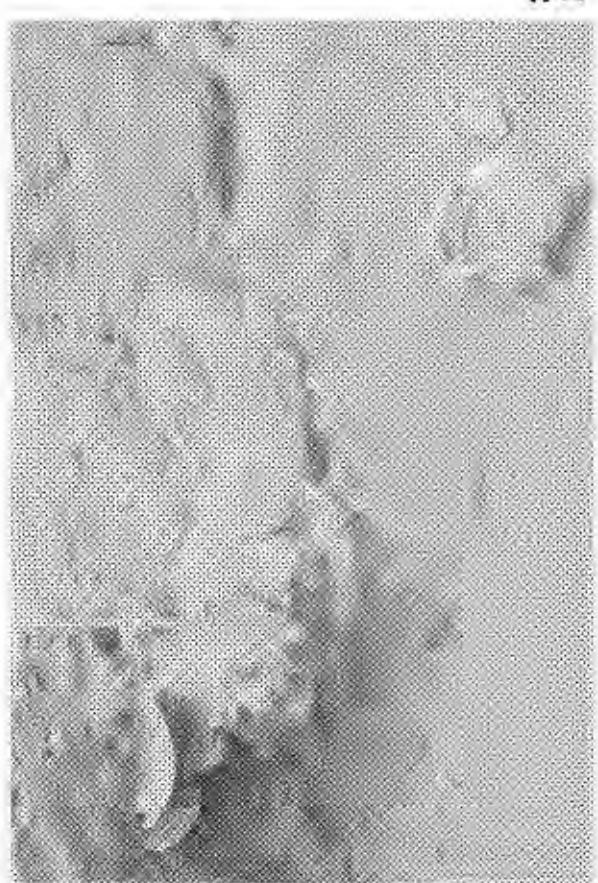
1. 昭和 46 年度調査写真④
III-3 層 鋼刀鉄頭片



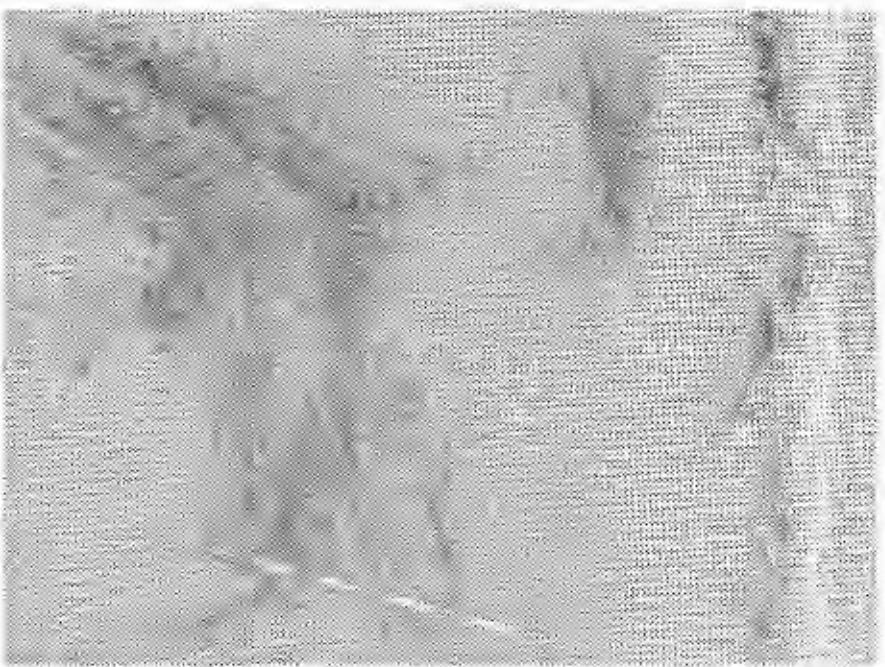
2. 昭和 46 年度調査写真②
浜吉貝塚 近景 (南より)



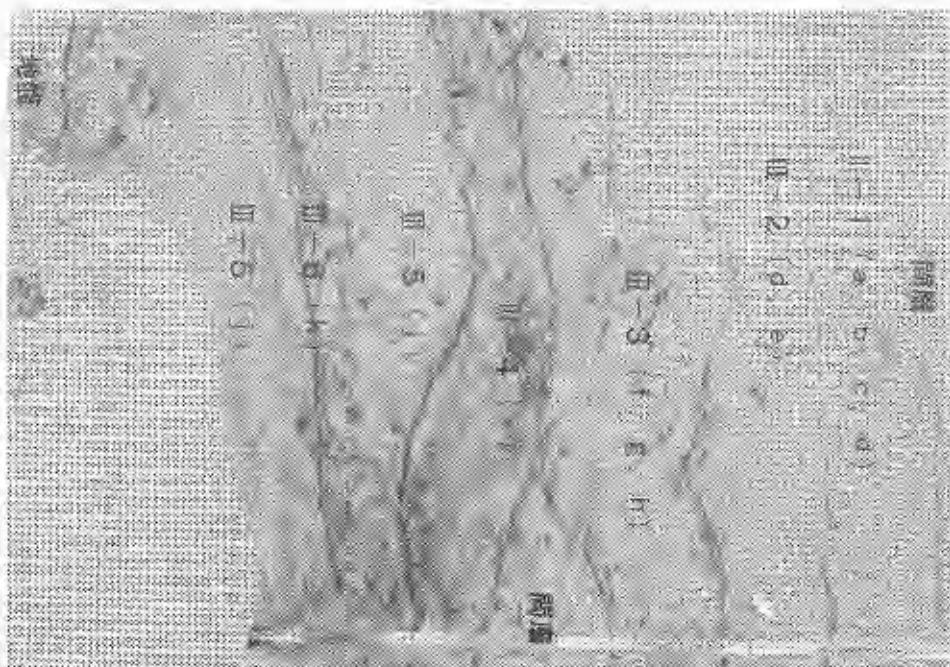
2. 昭和 46 年度調査写真⑤
III-5 層 骨盤出土状況



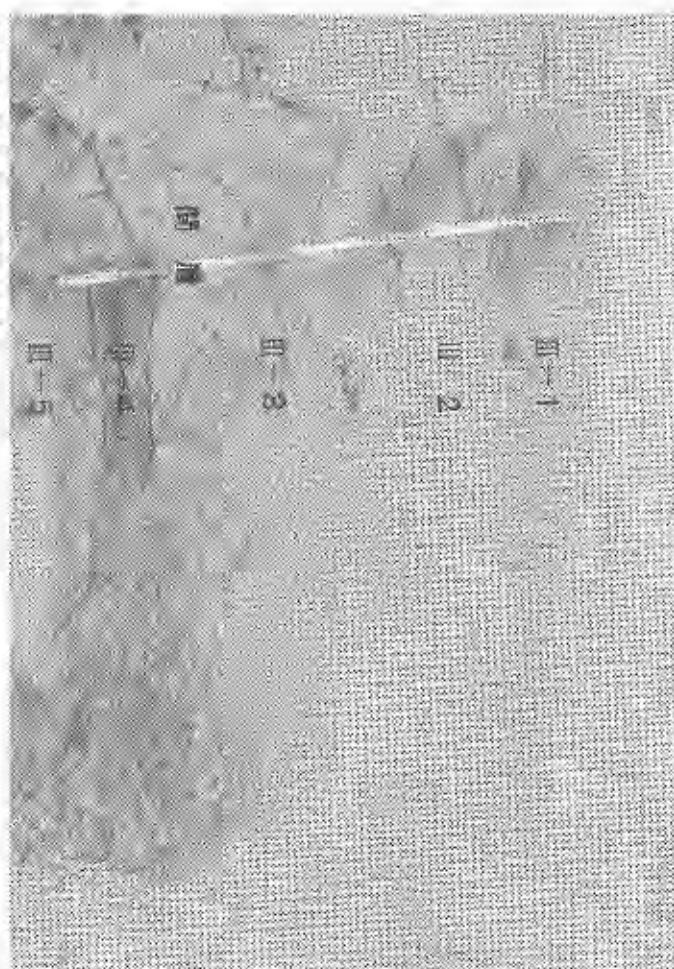
3. 昭和 46 年度調査写真③
III-1 層 鋼及び土器片出土状況



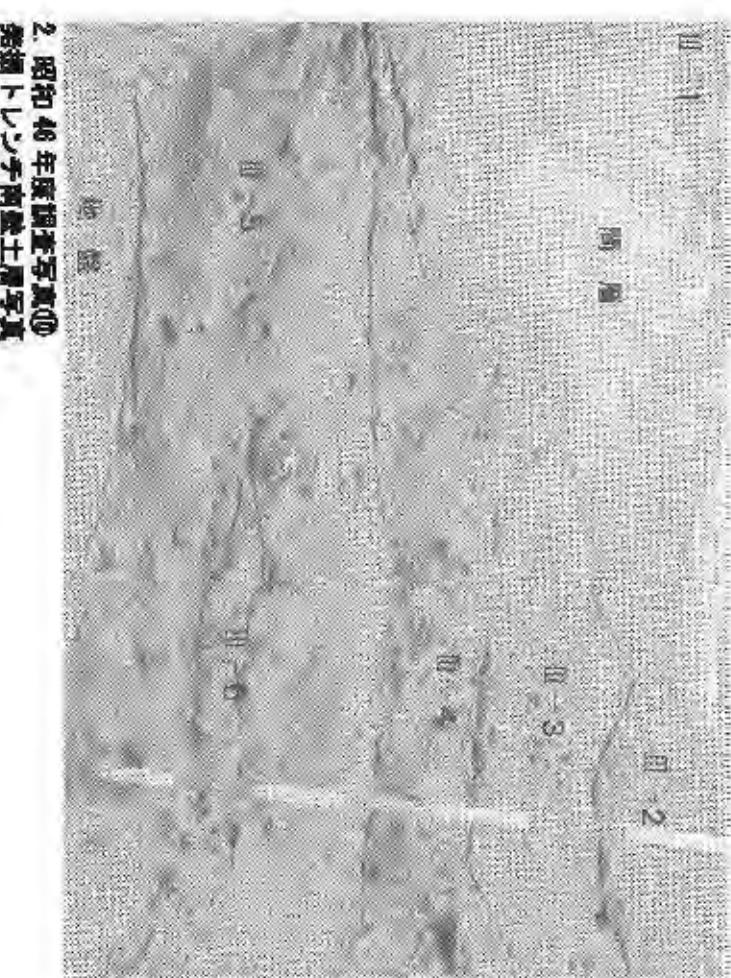
1. 昭和46年度調査写真④
発掘トレンド子西壁土層写真 全景



2. 昭和46年度調査写真⑤
発掘トレンド子西壁土層写真 近景

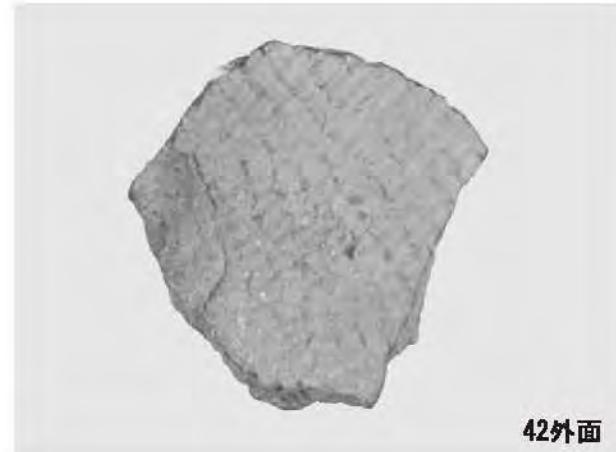


1. 昭和46年度調査写真⑥
発掘トレンド子北壁土層写真

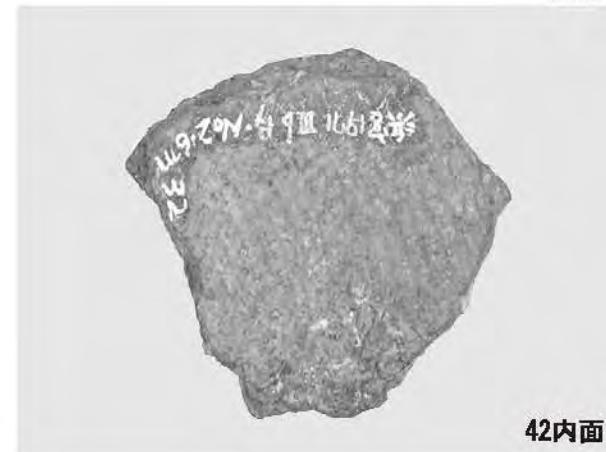


2. 昭和46年度調査写真⑦
発掘トレンド子南壁土層写真

图版 6



42外面



42内面



103



114



45



54



115



134



55



69



138外面



138内面



73



86



139



142

浜宮貝塚出土遺物①

浜宮貝塚出土遺物②

图版 7

图版 8



146



160



178



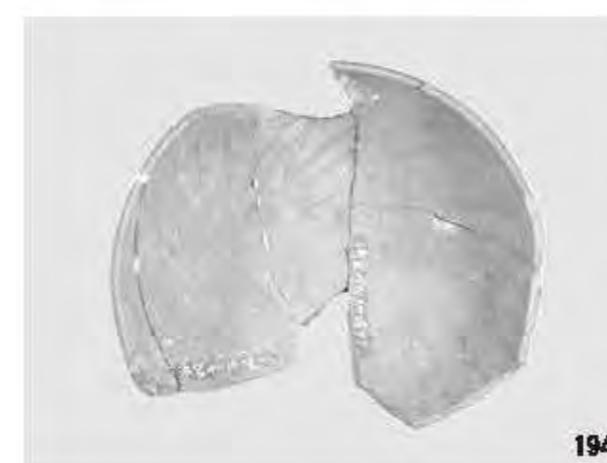
186



151



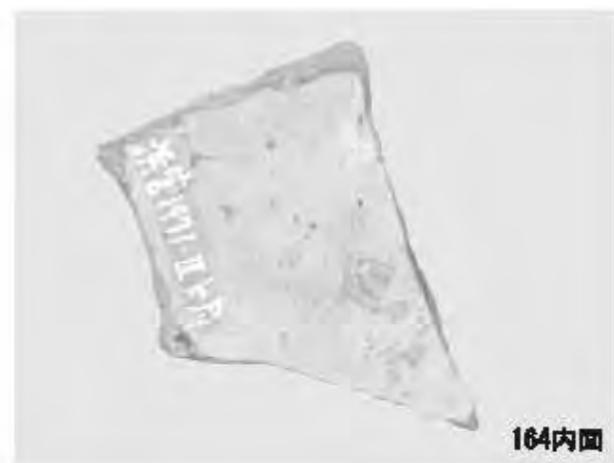
159



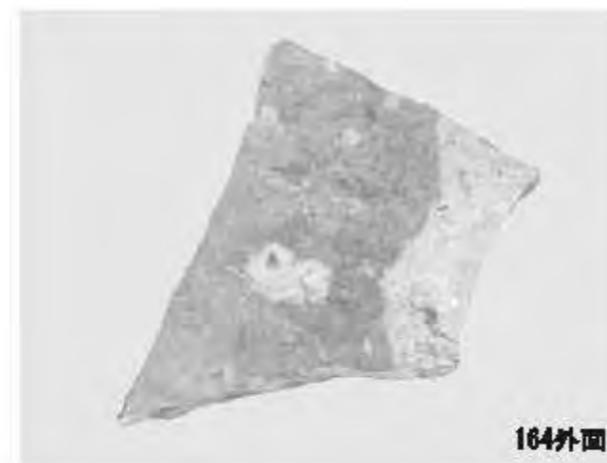
194



195



164内面



164外面



216



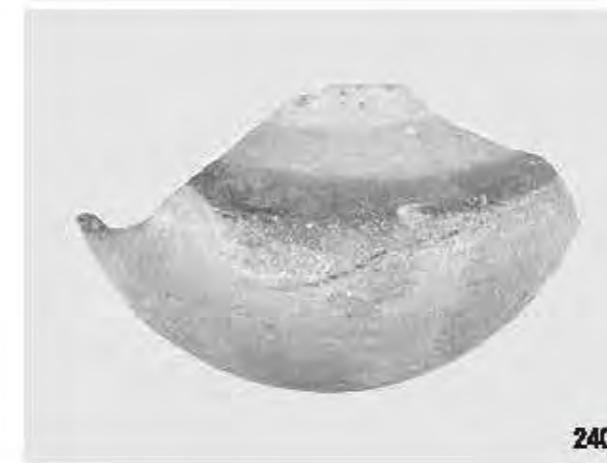
222



167



177



240



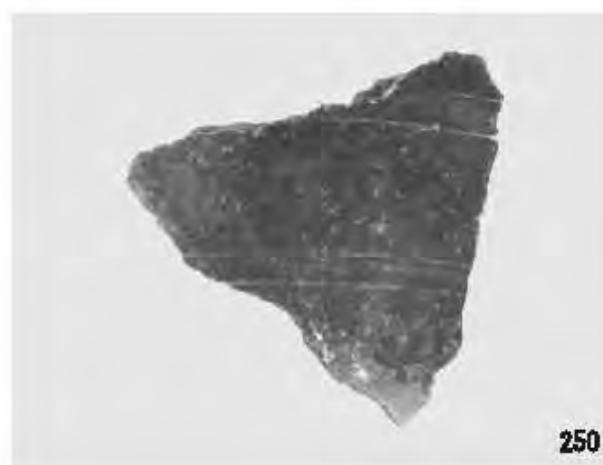
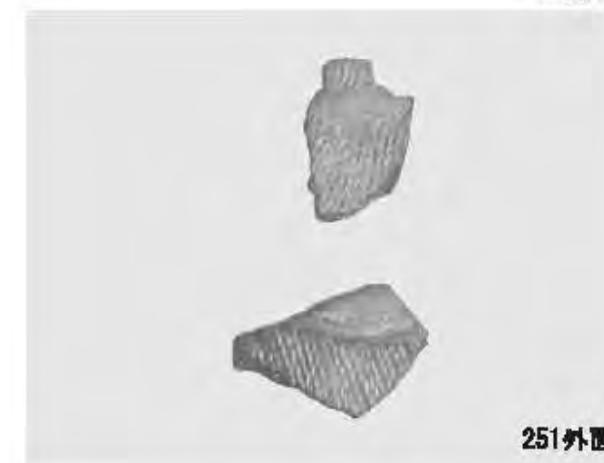
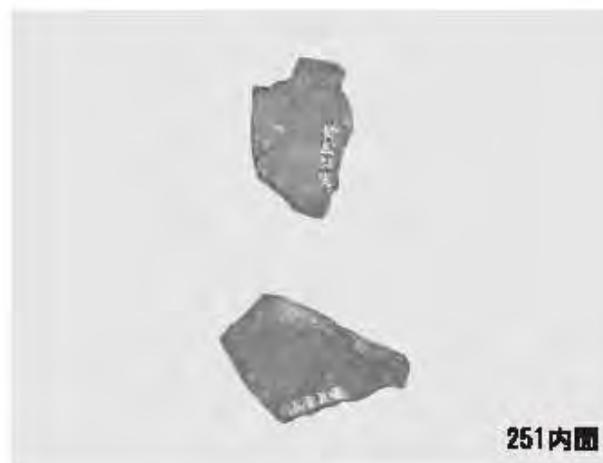
244

浜宮貝塚出土遺物③

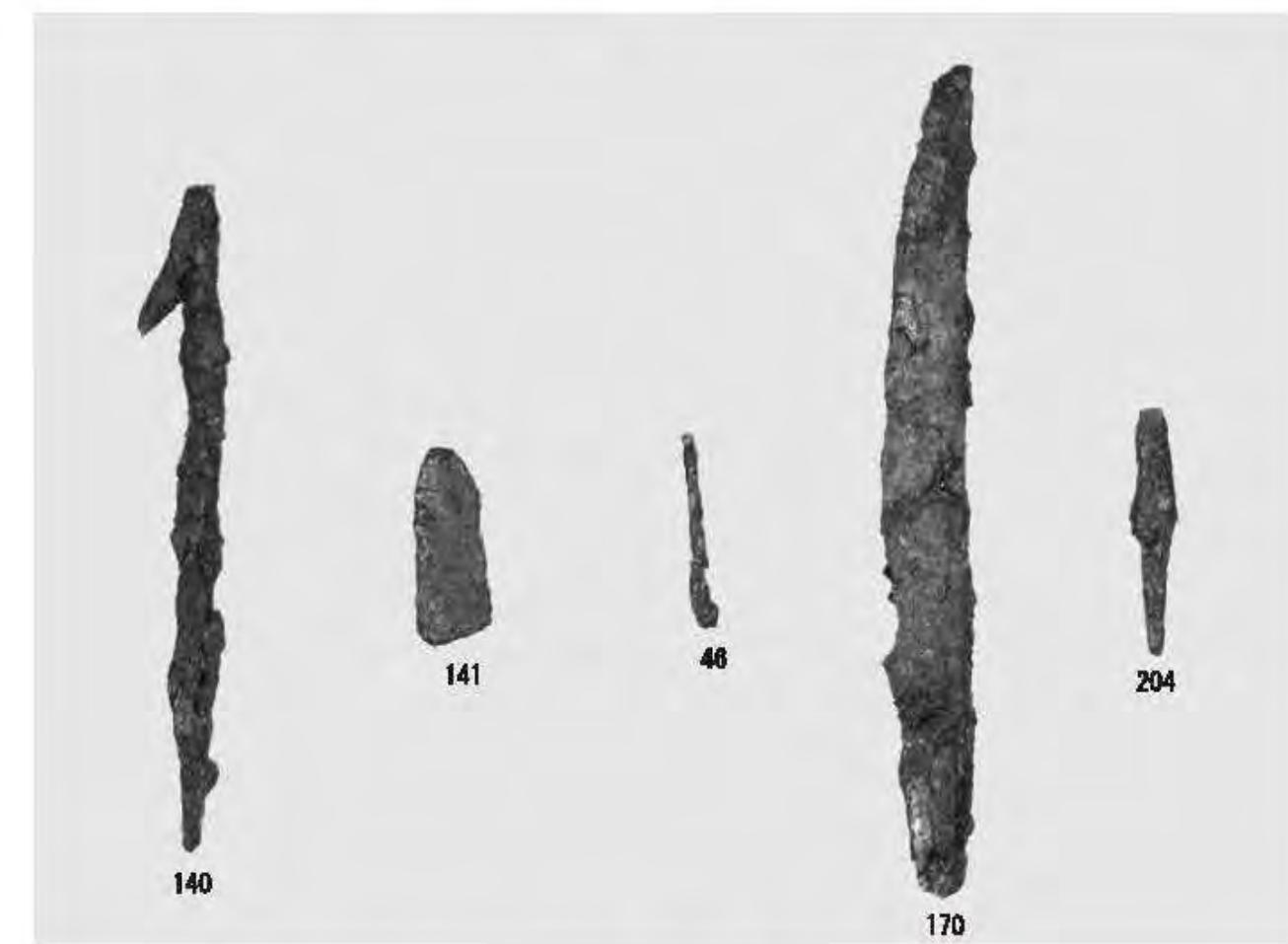
浜宮貝塚出土遺物④

图版 9

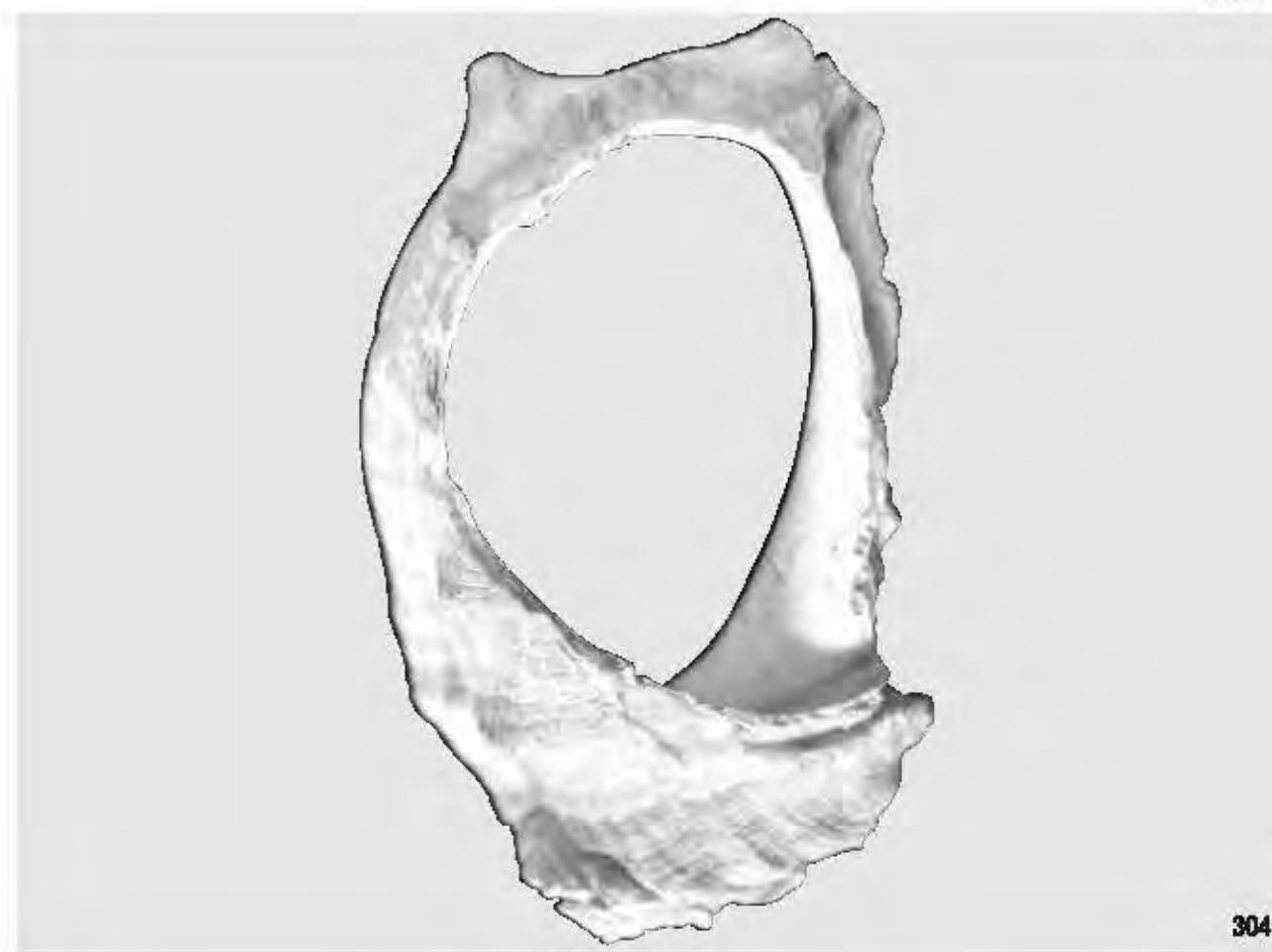
圖版 10



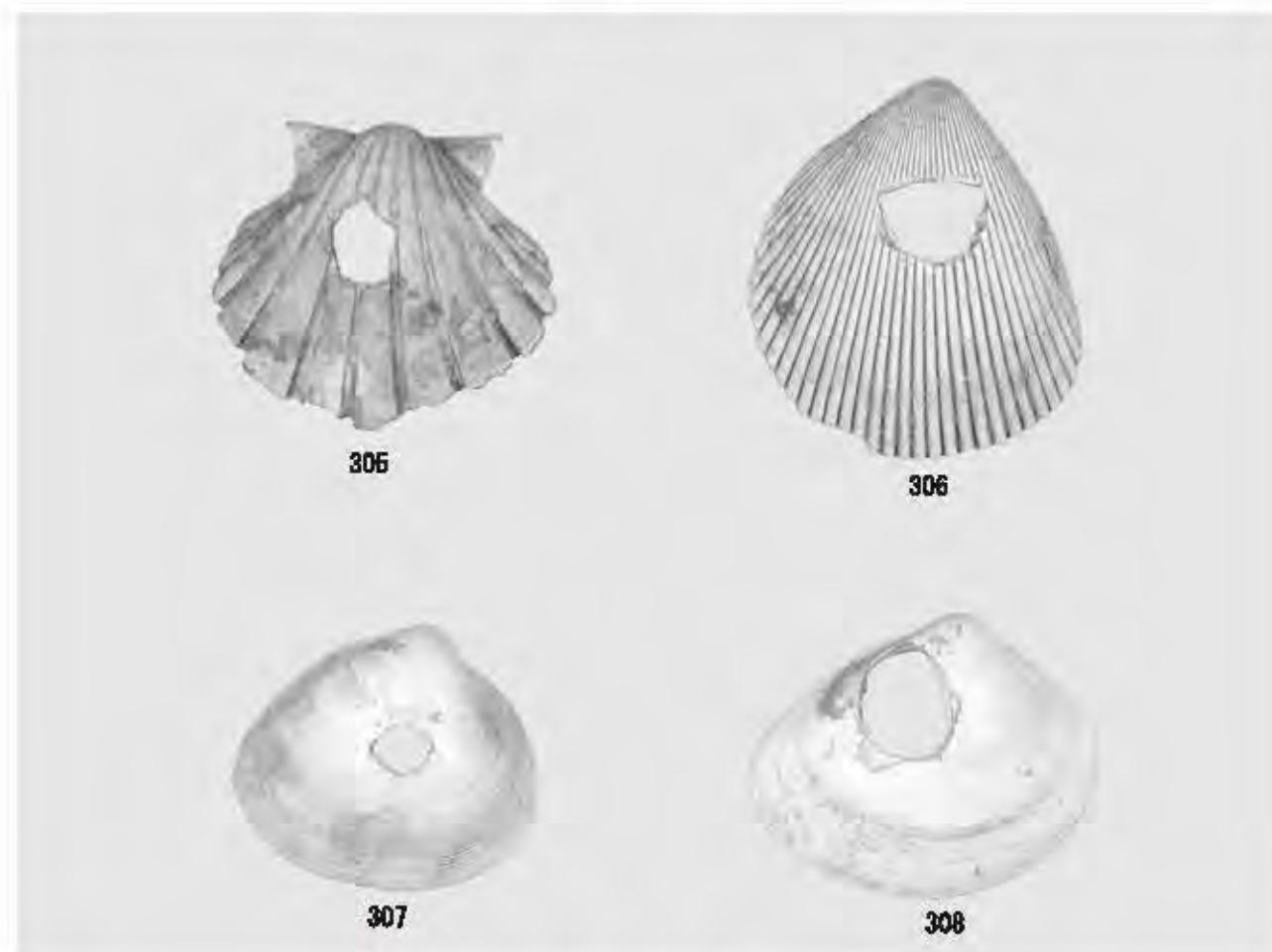
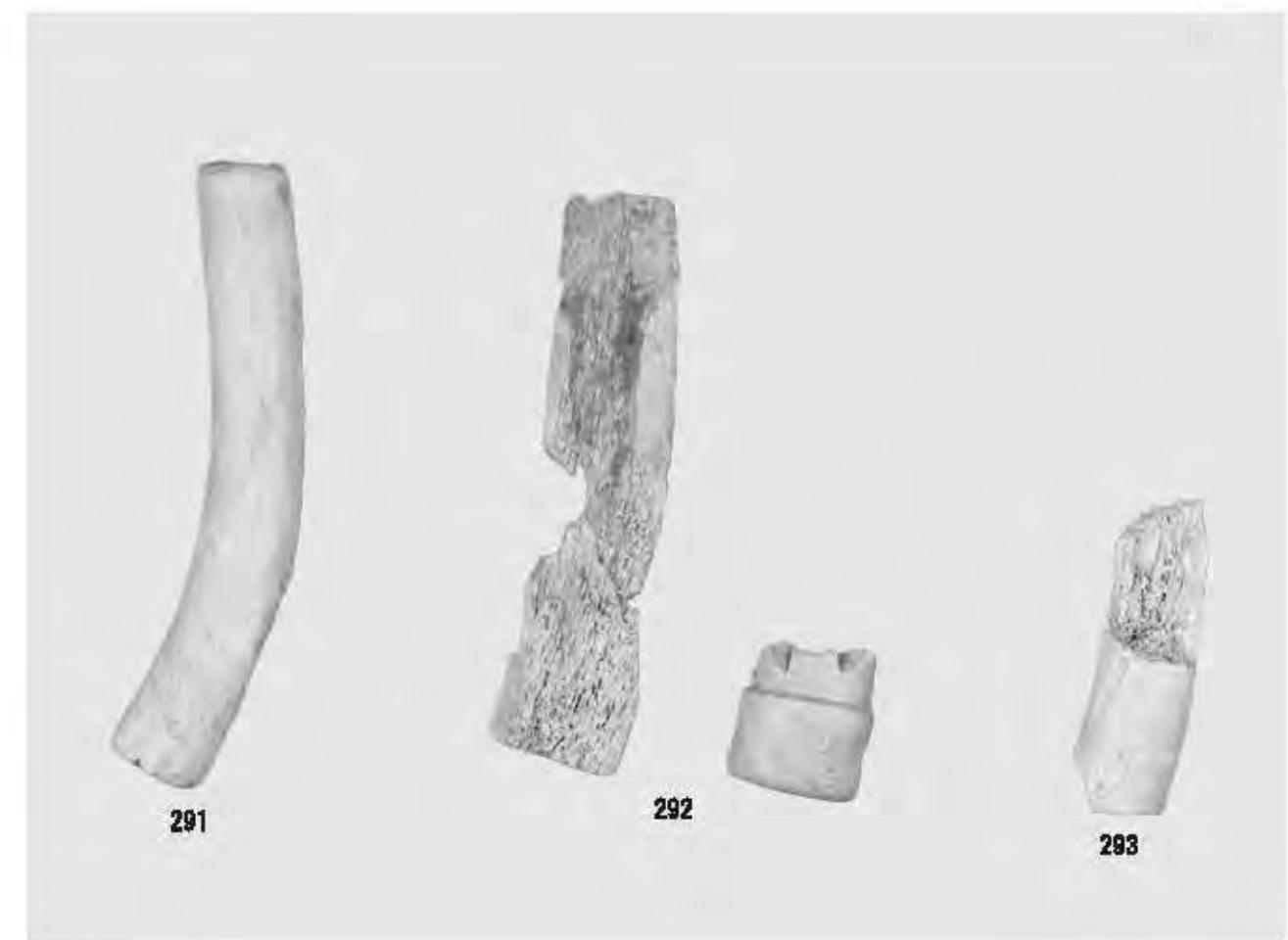
圖版 11



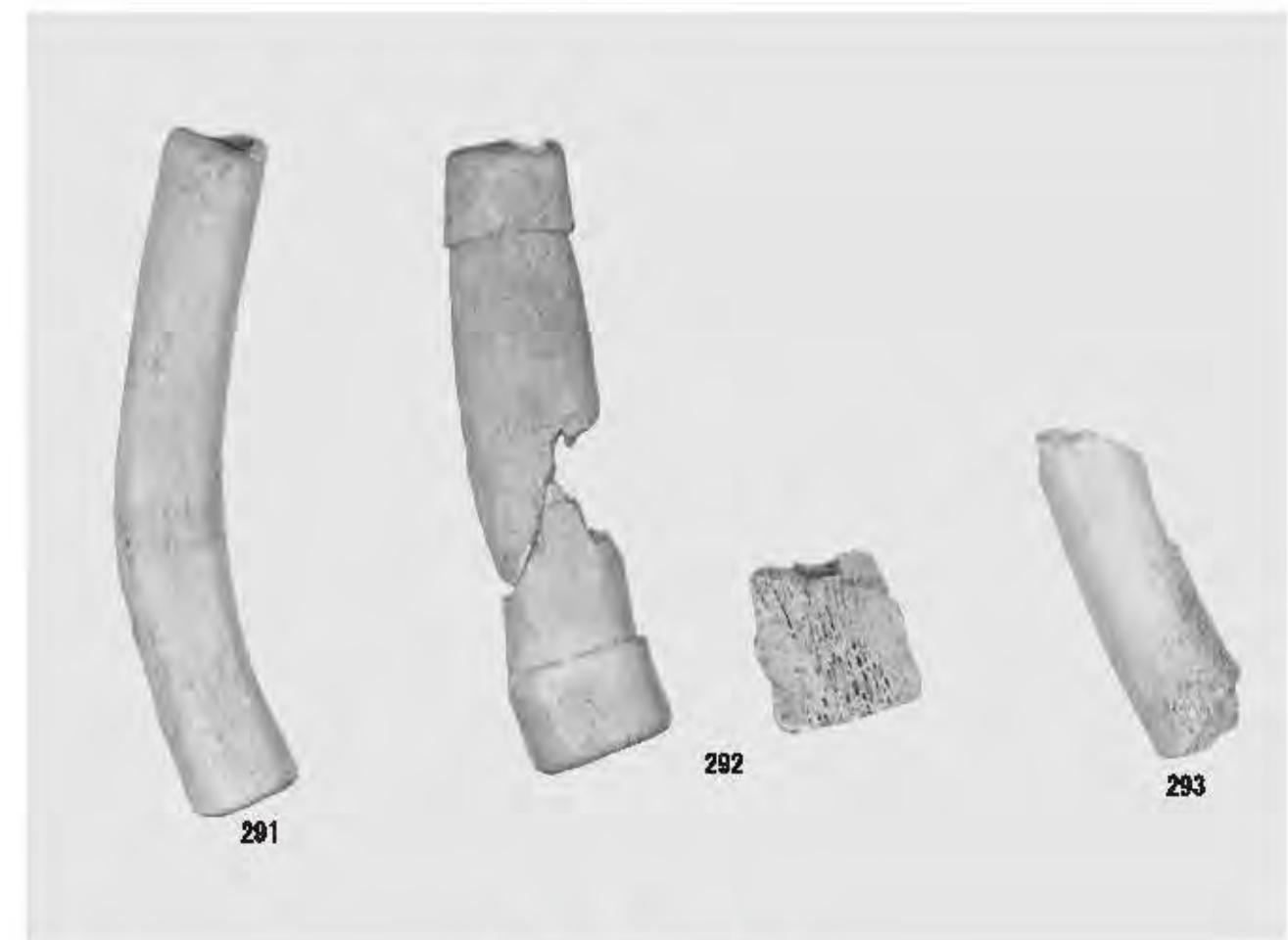
图版 12



图版 13

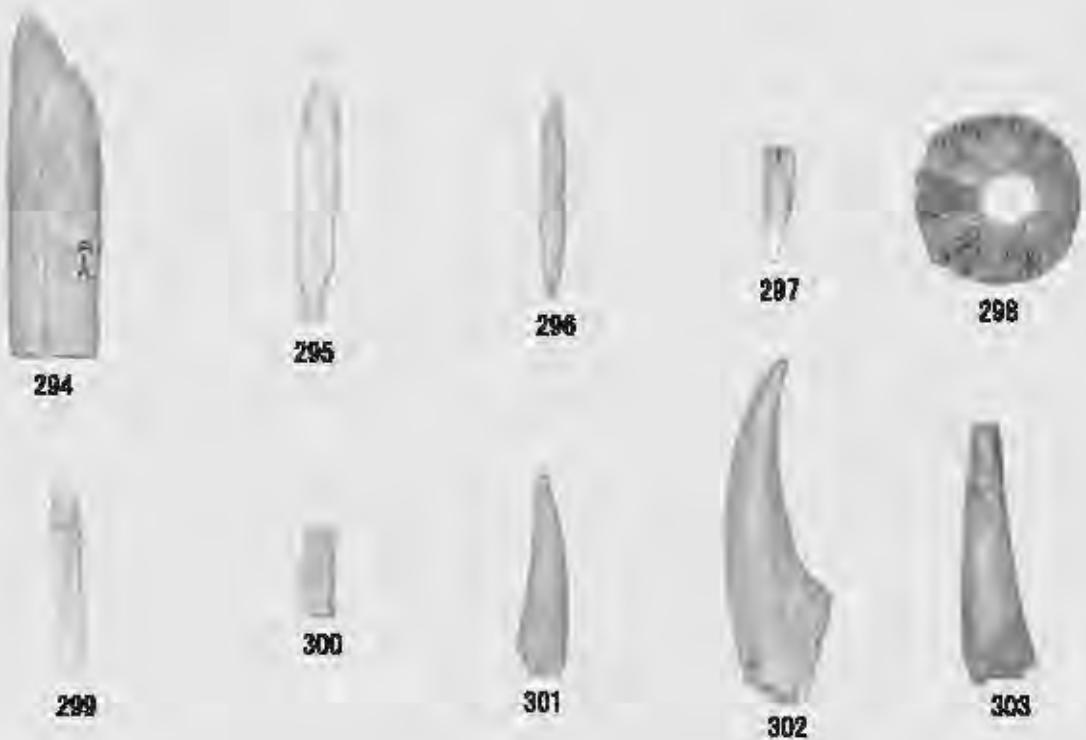


浜吉貝塚出土貝製加工品



浜吉貝塚出土骨角器①

報告書抄録



ふりがな	はまみやかいづか							
書名	浜宮貝塚 I							
副書名	-福岡県宗像市神漢の発掘調査報告-							
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第76集							
編著者名	豊崎晃史・山田広幸・白木英敏・山崎純男・野木雄大							
編集機関	宗像市教育委員会							
所在地	〒811-3492 福岡県宗像市東郷一丁目1番1号 TEL(0940)62-2600(海の道むなかた館)							
発行年月日	西暦2018年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	° ′ ″	° ′ ″		m ²		
浜宮貝塚	福岡県宗像市 神漢	40220	00045	33° 50' 56"	130° 29' 43"	1971年 4月29日～ 1971年 5月5日	約15m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
浜宮貝塚	集落跡	古墳時代	不明	須恵器 土師器 貝類 骨角器 鉄器	古墳時代における 海浜集落			
要 約	遺跡は、宗像大社浜宮周辺における古墳時代の貝塚及び集落跡である。調査は、1971年に実施。以後表採造物等含め古墳時代中期～後期にかけての土師器・須恵器が主体を占める。その他、鉄製品や骨角器類も出土し、当時の活動領域が海岸線だけに限らず、内陸の集落との交流を行っていることが分かる資料が提示される形となった。また、半島系の土器も確認され、対外交流についても貴重な資料を確認した。また、自然遺物や文献資料から浜宮貝塚を検討し、新たな研究資料の成果を得た。							

浜宮貝塚 I

-福岡県宗像市神漢の発掘調査報告-

宗像市文化財調査報告書

第76集

平成30年3月31日

発行 宗像市教育委員会
宗像市東郷1丁目1番1号印刷 株式会社ディスジャパン
福岡市中央区大名1-9-30

浜宮貝塚 I

I

宗像市文化財調査報告書第76集

2018

宗像市教育委員会

浜宮貝塚 I

—福岡県宗像市神湊の発掘調査報告—

宗像市文化財調査報告書 第76集

2018

宗像市教育委員会